

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第718集

たくさり      たくさりだてあと      たくさりくるまどうまえ  
田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡  
発掘調査報告書

宮古西道路建設事業関連遺跡発掘調査

【第1分冊】  
田鎖遺跡・田鎖館跡

2020

岩手県沿岸広域振興局土木部  
(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第718集

田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡  
発掘調査報告書  
【第1分冊】

2020

岩手県沿岸広域振興局土木部  
(公財)岩手県文化振興事業団

# 田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡 発掘調査報告書

宮古西道路建設事業関連遺跡発掘調査

【第1分冊】

田鎖遺跡・田鎖館跡





## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、宮古地域と県都の盛岡とを結ぶ国道106号宮古西道路建設事業に関連して、平成26年度から平成29年度までの4箇年にわたり発掘調査を実施した宮古市に所在する田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡の調査成果をまとめたものです。

田鎖遺跡では縄文時代から近世に至る遺構・遺物がみられます。田鎖館跡では、中世城館の施設の一部や平安時代の集落がみつかりました。田鎖車堂前遺跡においては、縄文時代早期および中期を中心とする集落が形成されていることが明らかになりました。縄文時代中期の集落内には配石遺構を検出しました。古代の竪穴住居も多く検出され、この地域における拠点的な集落遺跡であることが判明しました。さらに、平安時代末期、平泉藤原氏に関連する遺構や遺物もみられ、この時代の居館であることが調査により明らかになるなど重要な成果が得られました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解に繋がると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県沿岸広域振興局宮古土木センターをはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和2年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 高橋 嘉行

## 例 言

1 本書は、岩手県宮古市田鎖に所在する田鎖遺跡（宮古市田鎖第2地割120-12ほか）・田鎖館跡（宮古市田鎖第1地割69-6ほか）・田鎖車堂前遺跡（宮古市田鎖第11地割46-2ほか）の調査成果を収録したものである。

2 発掘調査は、宮古西道路建設に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センターによる委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成26年度から平成29年度にかけて実施したものである。

3 遺跡コード・遺跡略号

【田鎖遺跡】：遺跡コード（LG32-2358）・遺跡略号（TKS-15）

【田鎖館跡】：遺跡コード（LG32-2333）・遺跡略号（TKD-16）

【田鎖車堂前遺跡】：遺跡コード（LG33-2040）・遺跡略号（TSK-14、TSK-15、TSK-16、TSK-17）

4 発掘調査期間・面積

【田鎖遺跡】平成27年4月9日～平成27年6月30日・4,830m<sup>2</sup>

【田鎖館跡】平成28年4月8日～平成28年10月4日・13,500m<sup>2</sup>

【田鎖車堂前遺跡】

平成26年度：平成26年6月2日～平成26年12月12日・2,650m<sup>2</sup>

平成27年度：平成27年4月9日～平成27年12月22日・9,100m<sup>2</sup>

平成28年度：平成28年4月11日～平成29年3月8日・4,300m<sup>2</sup>

平成29年度：平成29年4月4日～平成29年6月2日・3,105m<sup>2</sup>

5 発掘調査担当者（一週間以上の従事者のみ記載）

【田鎖遺跡】

福島正和・宮内勝巳（公益財団法人 千葉県教育振興財団派遣）・船渡耕己・箕輪匠太

【田鎖館跡】

杉沢昭太郎・澤目雄大・戦場由裕

【田鎖車堂前遺跡】

平成26年度：福島正和・鈴木次郎（公益財団法人 かながわ考古学財団派遣）・宮内勝巳（公益財団法人 千葉県教育振興財団派遣）・近藤行仁・鈴木貞行・中島康佑

平成27年度：福島正和・宮内勝巳（公益財団法人 千葉県教育振興財団派遣）・杉沢昭太郎・伊藤武（公益財団法人 大阪文化財センター派遣）・船渡耕己・箕輪匠太・光井文行・大坪華子・南野龍太郎・藤田崇志・藤原雅仁・澤美咲

平成28年度：福島正和・趙哲済（公益財団法人 大阪市博物館協会派遣）・川村均・阿部勝則・光井文行・中村隼人・船渡耕己・佐々木隆英・白戸このみ・児玉駿介

平成29年度：福島正和・西澤正晴・須原拓・村田淳・光井文行・中村隼人・船渡耕己・立花雄太郎・澤目雄大・佐々木昭太

6 室内整理期間・担当者

平成27年度：平成26年11月1日～平成27年3月31日・福島

平成27年度：平成27年11月1日～平成28年3月31日・福島、船渡、箕輪

平成28年度：平成28年11月1日～平成29年3月31日・福島、趙、中村、船渡

平成29年度：平成29年4月3日～平成30年3月30日・福島、村田、中村

平成30年度：平成30年8月1日～平成31年3月29日・福島

平成31年度：平成31年4月1日～令和元年7月31日・福島

7 本書の執筆は各整理担当者を中心に分担執筆し、全体の編集・構成を福島が担当した。文責は本文中に適宜記した。

8 外部委託業務

【田鎖遺跡】

・基準点測量・・・・・・・・株式会社 鈴木測量設計

【田鎖館跡】

・基準点測量・・・・・・・・有限会社 スカイ測量設計

・炭化物年代測定・・・・・・・・株式会社 加速器分析研究所

・鉄製品保存処理・・・・・・・・公益財団法人 大阪市文化財研究所

【田鎖車堂前遺跡】

平成26年度

・基準点測量・・・・・・・・株式会社 鈴木測量設計

・土壌化学分析・・・・・・・・株式会社 古環境研究所

・炭化物年代測定・・・・・・・・株式会社 加速器分析研究所

・鉄製品保存処理・・・・・・・・公益財団法人 元興寺文化財研究所

平成27年度

・航空写真撮影・・・・・・・・東邦航空株式会社

・火山灰同定・・・・・・・・株式会社 火山灰考古学研究所

・炭化物年代測定・・・・・・・・株式会社 加速器分析研究所

平成28年度

・基準点測量・・・・・・・・株式会社 鈴木測量設計

・遺構部分平面図作成・・・・・・・・株式会社 岩手測器社

・炭化物年代測定・・・・・・・・株式会社 加速器分析研究所

平成29年度

・空撮および遺構図作成・・・・・・・・株式会社 リッケイ

・石質鑑定・・・・・・・・花崗岩研究会

平成30年度

・鉄製品保存処理・・・・・・・・株式会社 吉田生物研究所

・木製品保存処理・・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

・炭化物年代測定・・・・・・・・株式会社 加速器分析研究所

・石器実測図化・・・・・・・・株式会社 ラング

- 9 土層および土器の色調観察には、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を、地図は国土地理院発行の50,000分の1を使用した。
- 10 発掘調査・整理作業・報告書作成にあたっては下記の方々と機関にご指導・ご助言・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する（所属および敬称略・五十音順）。  
相原康二、浅野晴樹、安達訓仁、天野賢一、天野秀亮、新井崇之、飯村 均、池谷初恵、石川日出志、伊藤智樹、伊藤博幸、伊藤正人、井上雅孝、入間田宣夫、宇部則保、上床 真、大賀克彦、近江俊秀、及川真紀、長田友也、大久保弥生、柏木善治、加藤幹樹、金山順雄、河本純一、菅野成寛、橘田正徳、熊谷常正、国生 尚、斉藤利男、櫻井友梓、佐藤敏幸、佐藤由紀男、佐野尚子、篠宮 正、清水 哲、菅原祥夫、杉井涼子、鈴木弘太、鈴木琢也、鈴木康之、瀬戸哲也、高橋 岳、高橋 工、高橋千晶、高橋與右衛門、竹下将男、田中克子、塚本敏夫、津野 仁、手塚新太、豊田勝彦、中井淳史、中田 英、中野晴久、橋本久和、浜中邦弘、日高 慎、平野卓治、廣瀬時習、深澤敦仁、藤澤良祐、降矢哲男、菅田慶信、松吉大樹、三浦謙一、水澤幸一、室野秀文、森 一欽、森 達也、八重樫忠郎、八木光則、山口博之、山崎頼人・宮古市教育委員会
- 11 発掘調査による成果は、各種講演会および報告会、現地説明会、『平成26年度発掘調査報告書』・『平成27年度発掘調査報告書』・『平成28年度発掘調査報告書』・『平成29年度発掘調査報告書』等で公表しているが、内容も含め本書を正式な報告とする。
- 12 今回の発掘調査による出土品および記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

## 【第1分冊】

序

例言

報告書抄録（田鎖遺跡・田鎖館跡 第1分冊巻末、田鎖車堂前遺跡 第4分冊巻末）

### I 経緯と経過

1 調査経緯	1
2 調査経過	2

### II 位置と環境

1 遺跡の位置	6
2 地質的環境	6
3 歴史的環境	9

### III 調査方法

1 発掘方法	15
2 整理作業	16
3 記載方法	16

### IV 田鎖遺跡の調査

1 概要と層序	19
2 遺構と遺物	21
(1) 縄文時代の遺構	21
(2) 縄文・弥生時代の遺物	26
(3) 古代の遺構	38
(4) 古代の遺物	39
(5) 中・近世の遺構	41
(6) 中・近世の遺物	47
(7) 時代不明の土坑	48
3 小 結	48

### V 田鎖館跡の調査

1 概要と層序	83
2 遺構と遺物	83

(1) 縄文時代	83
(2) 古代	84
(3) 中世	96
(4) その他	98
(5) 出土遺物	99
3 小 結	101

## 附編 田鎖館跡自然科学分析

1 田鎖館跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	270
---------------------------	-----

### 【第2分冊】

## VI 田鎖車堂前遺跡の調査

- 1 概要と層序
- 2 中世後半以降の遺構と遺物
- 3 中世前半の遺構と遺物
- 4 古墳時代から古代の遺構と遺物
- 5 弥生時代・縄文時代後晩期の遺構と遺物
- 6 縄文時代中期の遺構と遺物
- 7 縄文時代早期の遺構と遺物

## VII 総 括

- 1 時期区分と成果
- 2 田鎖の牧
- 3 平泉期の居館
- 4 古代の集落
- 5 弥生時代の遺物様相
- 6 縄文時代中期の様相
- 7 縄文時代早期末の様相
- 8 ま と め

## 附編 自然科学的分析・測定

- 1 田鎖車堂前遺跡の土壌化学分析
- 2 田鎖車堂前遺跡の火山灰同定
- 3 田鎖車堂前遺跡の年代測定 (AMS)

## 【第3分冊】

田鎖車堂前遺跡 遺構図版・遺物図版

## 【第4分冊】

田鎖車堂前遺跡 写真図版

## 【第1分冊】

### 田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡 共通図版目次

第1図	遺跡の位置	5	第3図	宮古湾周辺の地形分類	8
第2図	田鎖遺跡・田鎖館跡・ 田鎖車堂前遺跡調査位置	7	第4図	調査遺跡周辺の遺跡	10
			第5図	城館分布	12

### 田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡 共通表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	11	第2表	城館一覧表	13
-----	---------	----	-----	-------	----

### 田鎖遺跡 図版目次

第1図	遺構配置図	20	第12図	掘立柱建物1	38
第2図	陥し穴1～4	23	第13図	古代の土器(73～85)	40
第3図	陥し穴5～8	24	第14図	掘立柱建物2	42
第4図	陥し穴9～11・貯蔵穴1	25	第15図	掘立柱建物3	43
第5図	石器集積遺構・石組炉1	27	第16図	掘立柱建物4	44
第6図	弥生土器(1～3)・縄文土器(4～18)	29	第17図	掘立柱建物4,柱穴断面	45
第7図	縄文土器(19～38)	30	第18図	井戸1・2	46
第8図	縄文土器(39～48)	31	第19図	中世～近世陶磁器(86～109)	50
第9図	縄文土器(49～58)	32	第20図	近世陶磁器(110～129)	51
第10図	縄文土器(59)	33	第21図	近世陶磁器(130)・石製品(131～134)	52
第11図	土製品(60)・石器(61～72)	34	第22図	銭貨(135～150)	53

### 田鎖遺跡 表目次

第1表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(縄文土器)	35	第5表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(土師器・須恵器)	40
第2表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(縄文土器)	36	第6表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(陶磁器)	54
第3表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(縄文土器)	37	第7表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(陶磁器)	55
第4表	田鎖遺跡掲載遺物一覧 (土製品・石器・石製品)	37	第8表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(石製品)	56
			第9表	田鎖遺跡掲載遺物一覧(銭貨)	56



## 田鎖遺跡 写真図版目次

写真図版 1	田鎖遺跡調査区全景	59	写真図版 13	屋外カマド 3～5	71
写真図版 2	陥し穴 1～3 全景	60	写真図版 14	弥生土器(1～3)・縄文土器(4～34)	72
写真図版 3	陥し穴 1～3 断面	61	写真図版 15	縄文土器(35～49)	73
写真図版 4	陥し穴 4～6 全景	62	写真図版 16	縄文土器(50～59)	74
写真図版 5	陥し穴 4～6 断面	63	写真図版 17	土製品(60)・石器(61～70)	75
写真図版 6	陥し穴 7～9 全景	64	写真図版 18	石器(71・72)・古代の土器(73～85)・ 中世～近世陶磁器(86～90)	76
写真図版 7	陥し穴 7～9 断面	65	写真図版 19	中世～近世陶磁器(91～102)	77
写真図版 8	陥し穴 10、貯蔵穴 1	66	写真図版 20	中世～近世陶磁器(103～114)	78
写真図版 9	石組炉 1、石器集積遺構 1	67	写真図版 21	近世陶磁器(115～130)	79
写真図版 10	掘立柱建物 1・2	68	写真図版 22	近世陶器(110)・石製品(131～134)	80
写真図版 11	掘立柱建物 3、井戸 1・2	69	写真図版 23	銭貨(135～150)	81
写真図版 12	屋外カマド 1・2	70			

## 田鎖館跡 図版目次

第 1 図	基本土層	83	第 31 図	SI27～29・31、SK40・41、SX01(2)	133
第 2 図	遺構配置図 1	104	第 32 図	SI27～29・31、SK40・41、SX01(3)	134
第 3 図	遺構配置図 2	105	第 33 図	SI33、SK42	135
第 4 図	遺構配置図 3	106	第 34 図	SI37・38、SK47・48(1)	136
第 5 図	遺構配置図 4	107	第 35 図	SI37・38、SK47・48(2)	137
第 6 図	遺構配置図 5	108	第 36 図	SI39・40	138
第 7 図	遺構配置図 6	109	第 37 図	SI41・44・51・53(1)	139
第 8 図	遺構配置図 7	110	第 38 図	SI41・44・51・53(2)	140
第 9 図	遺構配置図 8	111	第 39 図	SI37・41～43・46・48～52(1)	141
第 10 図	遺構配置図 9	112	第 40 図	SI37・41～43・46・48～52(2)	142
第 11 図	遺構配置図 10	113	第 41 図	SI37・41～43・46・48～52(3)	143
第 12 図	遺構配置図 11	114	第 42 図	SI44・46	144
第 13 図	SI03・13・35・45	115	第 43 図	SI54、SK66・67	145
第 14 図	SI04、SK14	116	第 44 図	SI55(1)	146
第 15 図	SI05・11、SK30	117	第 45 図	SI55(2)	147
第 16 図	SI06	118	第 46 図	SI56	148
第 17 図	SI07	119	第 47 図	SI57	149
第 18 図	SI08、SK33	120	第 48 図	SI58	150
第 19 図	SI10、SK39	121	第 49 図	SK02～09・21	151
第 20 図	SI12	122	第 50 図	SK10・12・13・15～18・20・22	152
第 21 図	SI14～18(1)	123	第 51 図	SK23～26・28・29・31～34	153
第 22 図	SI14～18(2)	124	第 52 図	SK36～39・41～45	154
第 23 図	SI19	125	第 53 図	SK46・49～53	155
第 24 図	SI20	126	第 54 図	SK55・57～62	156
第 25 図	SI21～23・34、SK45、SD01(1)	127	第 55 図	SK63～65・68～70、沢 1	157
第 26 図	SI21～23・34、SK45、SD01(2)	128	第 56 図	SX02、沢 2	158
第 27 図	SI24	129	第 57 図	1 号堀	159
第 28 図	SI25	130	第 58 図	帯曲輪	160
第 29 図	SI26・36・47、SK47	131	第 59 図	柱穴群	161
第 30 図	SI27～29・31、SK40・41、SX01(1)	132	第 60 図	出土遺物 1(1・2)	162

第61図	出土遺物 2 (3~12)	163	第72図	出土遺物13 (172~179)	174
第62図	出土遺物 3 (13~17)	164	第73図	出土遺物14 (180~182)	175
第63図	出土遺物 4 (18~27・801)	165	第74図	出土遺物15 (201~209)	176
第64図	出土遺物 5 (101~105)	166	第75図	出土遺物16 (210~224・235)	177
第65図	出土遺物 6 (106~113)	167	第76図	出土遺物17 (225~234・301~305)	178
第66図	出土遺物 7 (114~123)	168	第77図	出土遺物18 (401~410)	179
第67図	出土遺物 8 (124~133)	169	第78図	出土遺物19 (411~417)	180
第68図	出土遺物 9 (134~143)	170	第79図	出土遺物20 (501~529)	181
第69図	出土遺物10 (144~150)	171	第80図	出土遺物21 (530~535・601・701~705)	182
第70図	出土遺物11 (151~160)	172	第81図	出土遺物22 (706~711)	183
第71図	出土遺物12 (161~171)	173			

## 田鎖館跡 表目次

第1表	土坑類観察表	184	第7表	鉄滓観察表	191
第2表	柱穴観察表	186	第8表	陶磁器観察表	191
第3表	縄文・弥生土器観察表	187	第9表	土製品観察表	191
第4表	土師器・須恵器観察表	188	第10表	銭貨観察表	192
第5表	鉄製品観察表	190	第11表	石器類観察表	192
第6表	羽口観察表	190			

## 田鎖館跡 写真図版目次

写真図版 1	遺跡全景 1	195	写真図版23	SI29・33	217
写真図版 2	遺跡遠景 2	196	写真図版24	SI34・36~38	218
写真図版 3	遺跡近景、調査区現況	197	写真図版25	SI36~40	219
写真図版 4	調査区別全景 1	198	写真図版26	SI39~41他	220
写真図版 5	調査区別全景 2	199	写真図版27	SI41・42	221
写真図版 6	調査区別全景 3	200	写真図版28	SI36~52他	222
写真図版 7	SI03・04	201	写真図版29	SI43・46他	223
写真図版 8	SI05・06	202	写真図版30	SI44~47・50・51・53他	224
写真図版 9	SI07	203	写真図版31	SI36~53	225
写真図版10	SI08	204	写真図版32	SI54	226
写真図版11	SI10	205	写真図版33	SI55・56	227
写真図版12	SI11・12	206	写真図版34	SI57	228
写真図版13	SI12~18	207	写真図版35	SI58	229
写真図版14	SI14~18	208	写真図版36	SK02~05	230
写真図版15	SI15・17・19	209	写真図版37	SK06~09	231
写真図版16	SI19~21	210	写真図版38	SK10・12~14	232
写真図版17	SI20~23・SD01	211	写真図版39	SK15~18	233
写真図版18	SI24・25	212	写真図版40	SK13・19・20・22・23	234
写真図版19	SI25・25	213	写真図版41	SK24~26・28・29	235
写真図版20	SI26	214	写真図版42	SK30~33	236
写真図版21	SI27~29・31他	215	写真図版43	SK34・36~38	237
写真図版22	SI28・29・31	216	写真図版44	SK39~42	238

写真図版45	SK43～49	239	写真図版61	出土遺物10	255
写真図版46	SK50～53	240	写真図版62	出土遺物11	256
写真図版47	SK54～57	241	写真図版63	出土遺物12	257
写真図版48	SK58～62	242	写真図版64	出土遺物13	258
写真図版49	SK64～68	243	写真図版65	出土遺物14	259
写真図版50	SK63・65・69・70、SX02、帶曲輪	244	写真図版66	出土遺物15	260
写真図版51	その他の遺構	245	写真図版67	出土遺物16	261
写真図版52	出土遺物1	246	写真図版68	出土遺物17	262
写真図版53	出土遺物2	247	写真図版69	出土遺物18	263
写真図版54	出土遺物3	248	写真図版70	出土遺物19	264
写真図版55	出土遺物4	249	写真図版71	出土遺物20	265
写真図版56	出土遺物5	250	写真図版72	出土遺物21	266
写真図版57	出土遺物6	251	写真図版73	出土遺物22	267
写真図版58	出土遺物7	252	写真図版74	出土遺物23	268
写真図版59	出土遺物8	253	写真図版75	出土遺物24	269
写真図版60	出土遺物9	254			

# I 経緯と経過

## 1 調査経緯

田鎖車堂前遺跡、田鎖遺跡、田鎖館跡の3遺跡は「地域連携道路整備事業 一般国道106号宮古西道路」の施工に伴い、その事業区域内に存在することから、発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道106号は、県内陸部と沿岸部を結ぶ重要な幹線道路であり「岩手県地域防災計画」において「緊急輸送道路」に指定されている。また、東日本大震災津波では、避難路や物資の輸送路としての役割を担い、「岩手県東日本大震災津波復興実施計画」において「復興道路」に位置づけられている重要な路線である。一方で、宮古市内における交通混雑が日常化していると共に、冠水による通行規制区間があるなど、抜本的な改良を求められていた。そのため、国によりかつてないスピードで進められている宮古盛岡横断道路及び三陸沿岸道路と一体となった自動車専用道路の整備により、交通混雑の緩和や復興加速への寄与、地域の活性化を支援しようとするものである。

当事業の施工に係る田鎖車堂前遺跡、田鎖遺跡、田鎖館跡の取扱いについては、沿岸広域振興局土木部宮古土木センターから、平成25年1月10日付宮土セ第532号、平成26年9月29日付宮土セ第539号、平成27年6月17日付宮土セ第311号、平成平成28年1月5日付宮土セ第770号、平成28年2月29日付宮土セ第929号、「一般国道106号宮古西道路地域連携道路整備事業における埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、田鎖車堂前遺跡について平成25年2月18日～19日、田鎖遺跡について平成26年11月25日～26日、田鎖館跡について平成27年7月7日、平成28年1月18日、平成28年3月8日に試掘調査を実施し、工事着手するには、「田鎖車堂前遺跡」、「田鎖遺跡」、「田鎖館跡」の発掘調査が必要となる旨を、平成25年3月26日付教生第1785号、平成26年12月1日付教生第1272号、平成27年7月13日付教生第656号、平成28年1月20日付教生第1586号、平成28年3月9日付教生第1856号、「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により、当土木センターへ回答された。

その結果を踏まえて、当土木センターは岩手県教育委員会と協議・調整し、平成26年5月30日、平成27年3月31日、平成27年6月30日、平成28年3月31日、平成28年6月8日、平成29年3月31日、平成29年6月8日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、田鎖車堂前遺跡、田鎖遺跡、田鎖館跡の発掘調査を実施することとなったものである。

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター

## 2 調査経過

### (1) 田鎖遺跡

田鎖遺跡の発掘調査は平成27年4月9日に開始した。前年、岩手県教育委員会（以下県教委）生涯学習文化課による試掘調査によって田鎖館跡の下位段丘面を対象とした範囲を本調査することとなった。調査に際しては、田鎖車堂前遺跡と共用の事務所・作業員棟を県道側に設置した。遺跡東側の市道を挟んで隣接する田鎖車堂前遺跡の発掘調査と併行して、調査員2～4名体制で調査をおこなった。対象面積は4,830㎡であったが、南東側の一角は低湿地となっており、湧水著しく、遺物も出土しないことからトレンチ調査で終えた。一方、段丘面には予想以上に柱穴が多く検出され、さらに低地部分には縄文時代中期の遺物包含層を確認した。調査は限定された排土置き場と私道の利用があったため苦慮したが、6月15日に終了確認を受け、6月30日に調査を終了した。なお、調査が終了した地点は、翌年度田鎖館跡の事務所・作業員棟として利用した。

(福島)

### (2) 田鎖館跡

田鎖館跡の発掘調査は平成28年4月8日に開始した。本遺跡は周知の遺跡であったこと、現況からも山の斜面部分に人工的な地形改変痕跡が各所に認められたため、事前の試掘調査は実施せずに、事業計画地内は全て本調査の対象とされた（面積13,500㎡）。調査区は三つの細尾根にまたがっており、その間には沢が二箇所あった。開始段階では西側の調査区が未伐採であったため、調査区東側から作業を始め、東から西へと調査を進めることとした。当初は中世城館（田鎖館）に伴う遺構・遺物が主体となると予想されたが、細尾根部の多くは平安時代の大規模な集落であることが判明した。山裾部分は縄文時代中期の小規模な集落であった。道路本体の工事も並行して行われることとなり、その部分を優先して調査しなければならなかった。部分終了確認を5月24日、6月28日、8月4日に実施し、調査終了した場所を委託者側へ引き渡している。これにより、遺構の密集する地点に十分な時間と労力をかけることが出来ずに調査は難渋した。工事車両が近くを頻りに往来する状況であったため、安全性の観点から一般公開は見送られた。9月15日に終了確認を受け、10月4日に調査を終了している。

(杉沢)

### (3) 田鎖車堂前遺跡

#### 平成26年度調査

田鎖車堂前遺跡の発掘調査は平成26年6月2日に遺跡最東端部の用地取得済み部分を皮切りに開始した。調査開始直後、調査範囲内に重機による大きな掘削坑があることが判明した。このことについて6月5日、県教委・宮古土木センター・埋文センターの三者で協議と状況確認をおこなった。その経緯は、本調査直前の5月8日～12日に表土のみの掘削を県教委が許可し（教生第4-73号）、事業主体者である宮古土木センターが施工業者に依頼し、表土の掘削作業をおこなったが、手違いで予定の掘削深度よりも約1m深耕した部分であったことが明らかになった。その範囲は406㎡で、これにより中世および古代の遺構面や遺構の一部が損壊、失われてしまっていた。6月12日午後、現地で宮古土木センターによる状況説明と謝罪会見がおこなわれた。再発防止の徹底が急務であるとされた。

その後、発掘調査は8月のお盆の長期閉鎖前までの間、表土掘削および遺構検出をおこない、広範囲に遺構が確認された。8月後半から9月には台風等の大雨によって再三調査区が水没し、排水等に労を費やした。9月以降は遺構の掘削および実測作業をおこない、調査を進めた。調査範囲の東半で宮古地域では例を見ない12世紀の遺構・遺物が認められ、10月25日に現地説明会を開催した。現地説明会には141人の見学者があった。その後、古代の面での調査をおこない、11月25日におこなわれた三者による終了確認において、範囲西側の古代面の調査を次年度に繰り越すことが決定し、12月12日に撤収した。なお、古代面の調査未了範囲は、シート等の養生によって越冬した。

#### 平成27年度調査

前年度に引き続き、平成27年4月9日から調査を開始した。隣接する田鎖遺跡と一体での調査であった。開始当初は田鎖遺跡で重機作業をおこなっている間、前年度の繰り越し分である古代の面の調査をおこなった。その後、田鎖遺跡へ作業員の大半を移し、6月からは新たに用地が取得された箇所および前年度遺構が連続することが判明した追加調査範囲についての表土除去をおこなった。7月には田鎖遺跡からすべての人員が合流し、遺構検出作業および遺構掘削作業を進めたが、予想以上の遺構数と識別の困難さから調査は難航した。また、12世紀の大規模な堀を確認し、掘削作業を進めた。堀は湧水著しく掘削土量も多かった。地下水位の低下する11月に集中して調査をおこなった。11月20日には現地説明会を開催し、165人の参加があった。さらに、次年度予定範囲の一部の表土を掘削したが、予想以上に遺構が密集している状況が確認できたため、年度内の本格的な調査は断念せざるを得なかった。12月4日には、三者で終了確認をおこない、12月22日に調査を終了した。これまでで全調査予定範囲の約半分のエリアの調査を終えた。

#### 平成28年度調査

平成28年4月11日に調査を再開した。用地取得の遅れ等で未了だった南東部の一角と調査区西側の調査をおこなった。調査区西側では、長大な堀の続きを検出し、範囲内で折れ曲がることを確認し調査を進めた。このエリアでは古代の遺構密度も非常に高く、調査を進めると下層に縄文時代の遺構面が広がっていることが判明した。8月のお盆休暇明けには岩手県内に甚大な被害をもたらした台風10号や低気圧など相次ぐ荒天の影響で調査区周辺域を含めた広い範囲が3度に渡って冠水し、調査事務所や発掘器材等も甚大な被害を受けた。調査も約1ヶ月間の中断を余儀なくされた。拠点としていた長沢川に近いエリアは盛土をおこない、地盤のかさ上げをおこなった後、ユニットハウスを再度設置した。被災後の復旧の目処が立った9月19日には地元自治会主催の地域学講座で遺跡の調査成果の一部を紹介し、地元住民の理解が一層得られた。12月19日、三者による終了確認がおこなわれたが、調査終了の目処が立たないため部分終了として、協議をおこなうこととなった。協議の結果、年内は12月22日まで調査をおこない、一旦撤収した。その後12月27日まで部分的に重機作業を継続した。年が明け、平成29年1月17～19日には下面の検出に備えるため重機作業を再開した。2月13日から人力作業による調査業務を再開した。3月1日には三者による終了確認がおこなわれ、3月8日まで調査をおこなうことや今後の調査の方針について協議がおこなわれた。調査は異例の冬期作業であったが、北側工事用通路分を最終面まで調査を終了し、その部分については引き渡した。その後3月13～17日は次年度調査開始後すぐに本格的な遺構調査を行うべく、部分的に古代面まで終了した範囲の沖積層を重機で掘削し、除去を行った。



### 平成29年度調査

平成29年4月4日に3班作業員約80人体制で調査を再開した。昨年度終わらなかった古代面の調査をおこないつつ、下層に広がる縄文時代中期の遺構面の調査を実施した。5月25日終了確認を現地でおこない、6月2日の調査終了予定を確認した。5月26日に空撮を実施し、終了を待つばかりとしたかったが、東側でさらに下面にも縄文時代早期末の遺構が存在することが判明し、調査最終日まで遺構の調査に注力した。調査は6月2日をもってすべて終了した。

4箇年、約25箇月を費やした田鎖車堂前遺跡の発掘調査は当初の予想を大きく上回る調査成果を得て、田鎖インターを含む宮古西道路（平成31年3月共用開始）の一部へと姿を変えた。

（福島）

## Ⅱ 位置と環境

### 1 遺跡の位置

田鎖車堂前遺跡は岩手県宮古市田鎖第11地割46-2ほか、田鎖遺跡は宮古市田鎖第2地割120-12ほか、田鎖館跡は宮古市田鎖第1地割69-6ほかそれぞれ所在する。

3遺跡の所在する宮古市は岩手県最頭部に位置し、市域西側は北上山地、東側は三陸海岸、太平洋にそれぞれ面する。宮古市は昭和16年宮古町、千徳村、山口村、磯鶏村の1町3村が合併して市制を開始した。昭和30年この宮古市と花輪村、津軽石村、崎山村、重茂村の1市4村の合併がおこなわれた。平成17年には田老町、新里村と、平成22年には川井村とそれぞれ合併し、現在の市域となった。この広域合併の結果、1259.89㎡の広大な面積を有する市となり、人口56,854人（平成26年12月1日現在）を擁している。宮古市は北部で下閉伊郡岩泉町、南部で下閉伊郡山田町、遠野市、上閉伊郡大槌町、南西部花巻市、西部で盛岡市とそれぞれ市域が接している。主要な産業は、宮古湾を漁場とした水産業、北上山地の森林資源を利用した木材加工業等が盛んである。気候は温暖湿潤気候であるが、夏は涼しく、冬は比較的温暖である。市域の東西方向へ流れる2級河川の閉伊川は宮古湾に注ぎ出ており、河口付近北岸に宮古市中心市街地広がっている。また、閉伊川河口北側には宮古港の港湾施設が築かれている。平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、宮古市街地を中心に甚大な津波被害を受け、現在もその復興のために各種事業が展開中である。

田鎖車堂前遺跡および田鎖遺跡の所在する田鎖地区は、宮古市街地から約6km西の閉伊川を越えた対岸に位置する。閉伊街道と呼ばれる国道106号から南へ分岐する県道200号が閉伊川を越え、田鎖地区へのアクセスルートとなっている。県道200号は閉伊川へ注ぎ込む長沢川と併走するように南進する。遺跡周辺は水田が広がり、牧歌的な雰囲気を醸し出しており、田鎖地区旧来の集落はおもに田鎖遺跡側、旧道に沿うようにあり、その延長線南方には花輪小学校や花輪中学校が所在する。

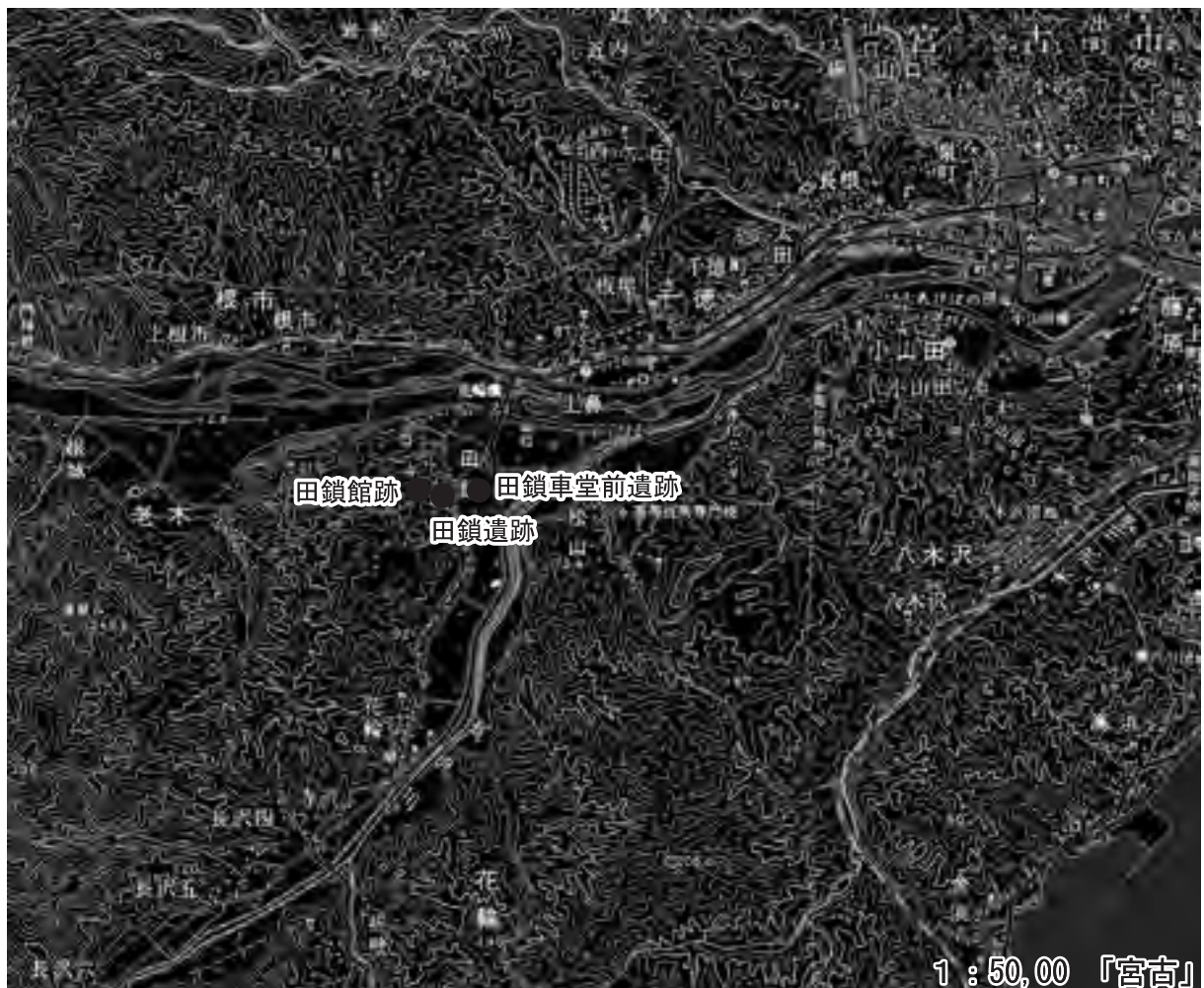
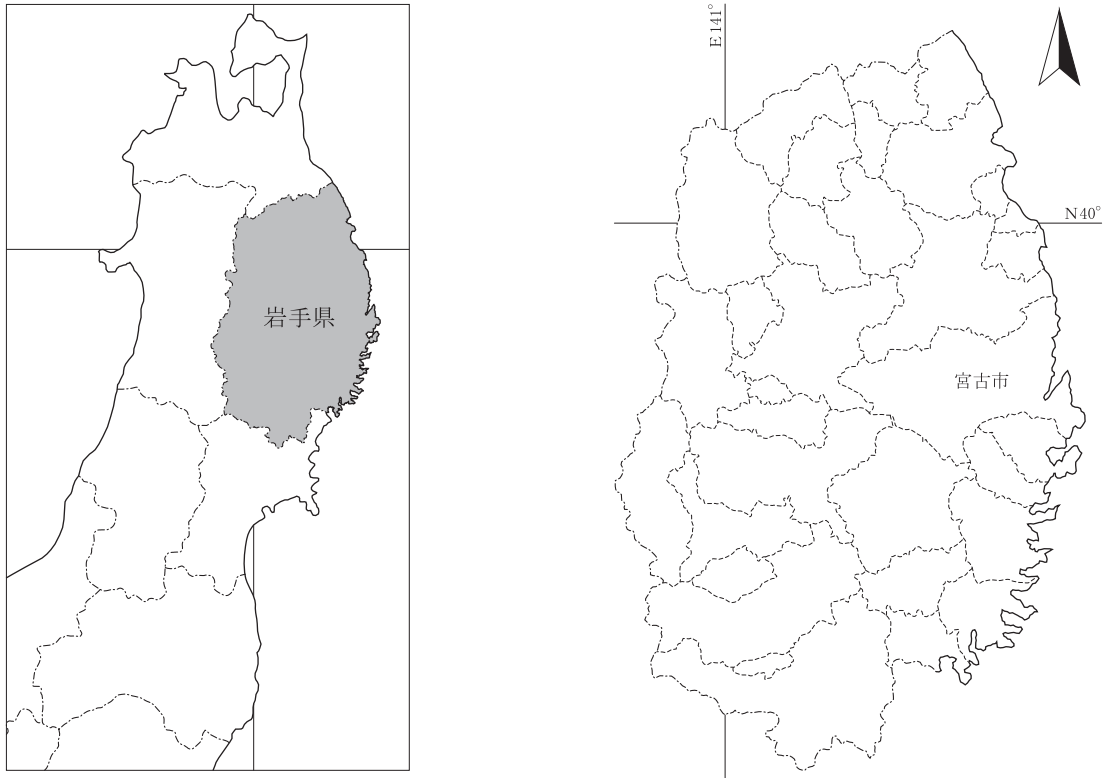
### 2 地質的環境

宮古市中心部は、東側の宮古湾に面する一帯である。この一帯を区界峠付近に源流を持つ閉伊川が西から東へ流れ、市内を流れる近内川、山口川、長沢川、八木沢川等の支流を集め宮古湾に注ぎ込む。これら河川によって開析された平野部および自然堤防は狭小であり、これに沿うように丘陵地が立ち上がり、その背後にはそれらより標高の高い山地が広がっている。丘陵部は複雑に入り組んだ地形を形成しており、磁鉄鉱を多く含む宮古花崗岩によって構成されている。宮古花崗岩は白亜紀の花崗閃緑岩からトナル岩を主体とし、閉伊川を中心に南北に分布している。

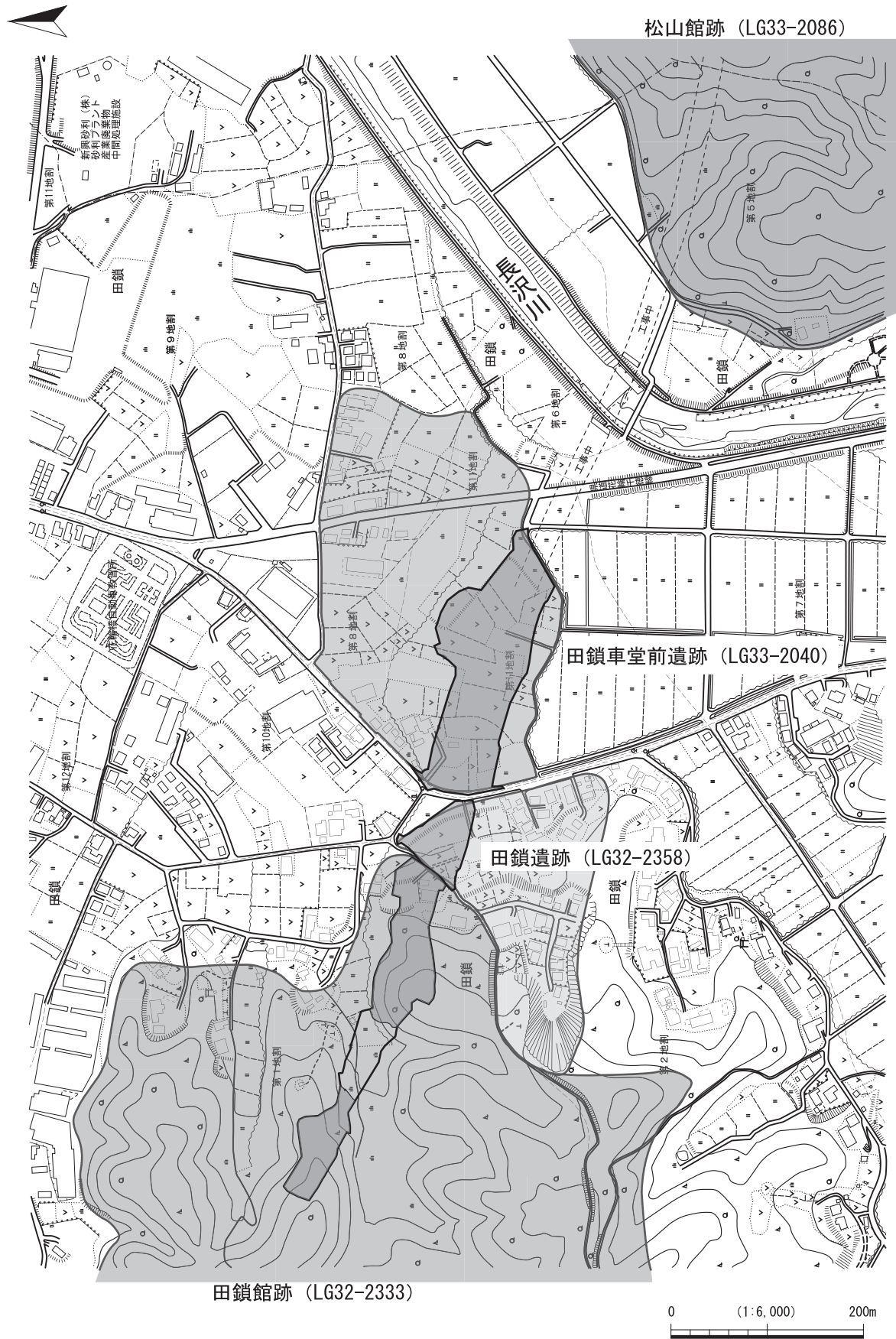
田鎖車堂前遺跡および田鎖遺跡は、いずれも閉伊川およびその支流の長沢川によって開析された谷底平野上に立地する。この谷底平野は長沢川に沿って帯状に広がっており、山口川と関連する宮古市街地、津軽石川と関連する津軽石地区と並んで宮古地域では比較的広い平野部となっているが、両平野部と異なるのは宮古湾に直接面していない点である。長沢川により近い田鎖車堂前遺跡は沖積平野とその沖積作用によって生まれた自然堤防上にあり、長沢川から約1.5km離れている田鎖遺跡は標高がわずかに高く、洪積段丘縁辺部を跨ぐように立地している。



1 遺跡の位置

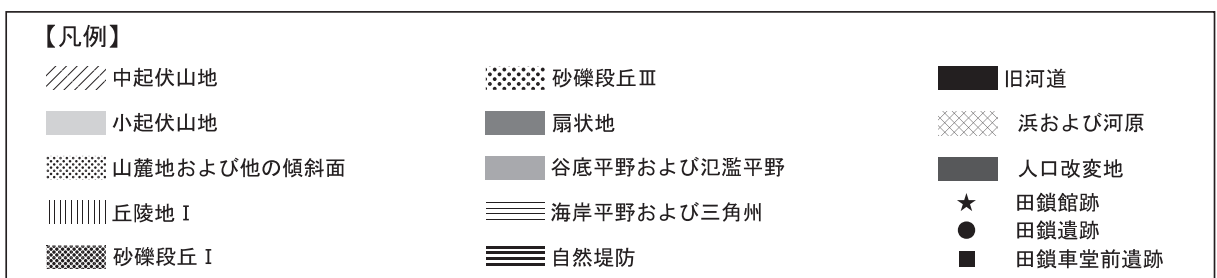
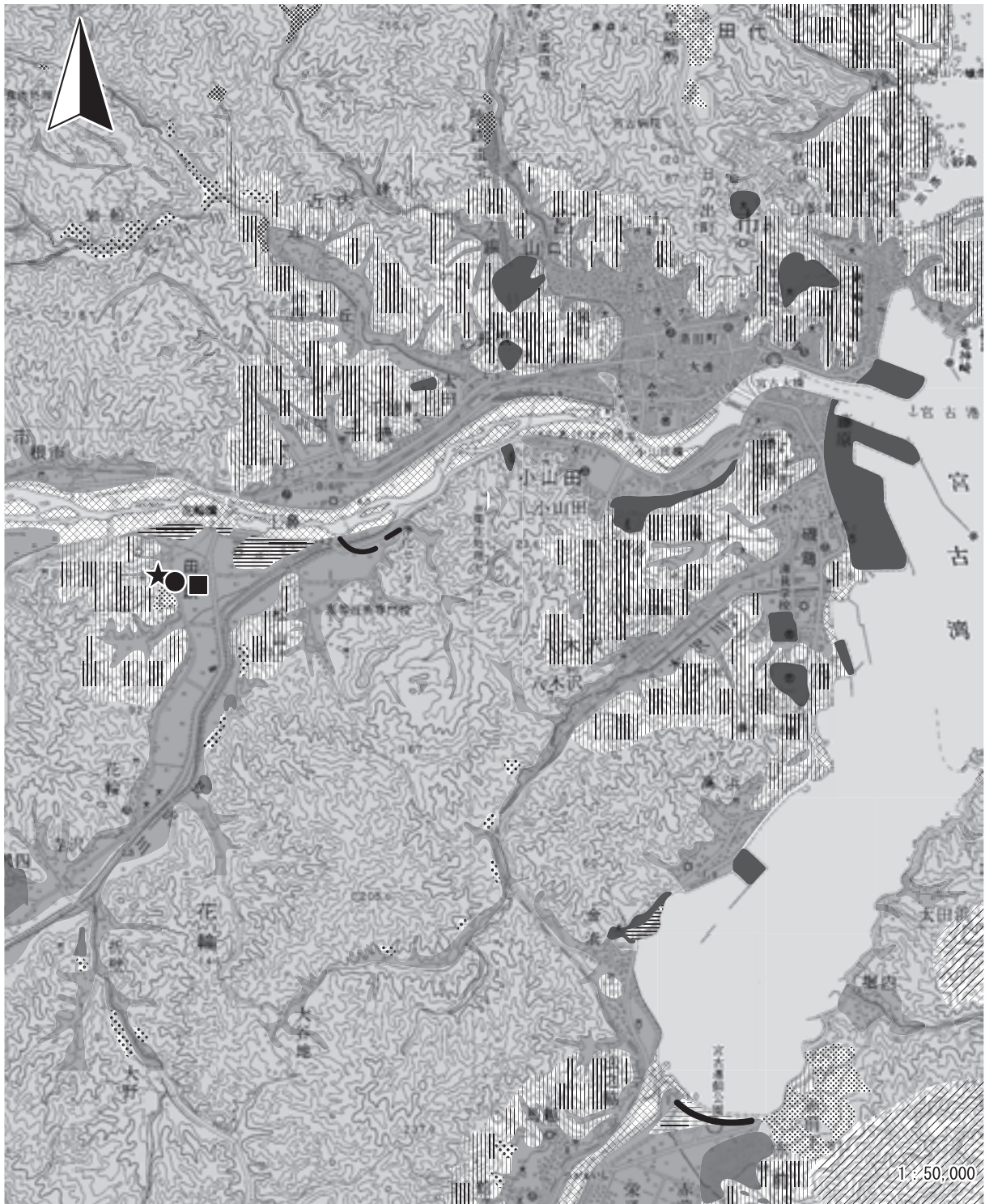


第1図 遺跡の位置



第2図 田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡範囲と調査範囲





第3図 宮古湾周辺の地形分類

### 3 歴史的環境

田鎖車堂前遺跡および田鎖遺跡が所在する宮古湾周辺地域では、これまで多くの遺跡が確認されている。これらのうち発掘調査が実施され、内容が明らかになった遺跡を中心に紹介し、歴史的な環境について述べる。

縄文時代では、早期から晩期に至る遺跡が多数確認されている。縄文時代早期の遺跡は未だ数が少ない状況であるが、前期には遺跡数が増加する状況は県内の他地域と同様である。特筆すべき縄文時代前期の調査成果として、前期初頭の大規模な集落遺跡である千鷄遺跡が挙げられる。30棟以上の竪穴住居が南向きの緩斜面で検出されている。中期になるとさらに遺跡数が増え、国指定史跡である崎山貝塚など大規模な集落が宮古湾周辺の各地で営まれる。磯鷄石崎遺跡の付近では上村貝塚で中期中葉～後葉の竪穴住居が11棟調査されている。住居以外では土器埋設遺構や複数人分の人骨が同一箇所から出土した墓壙も調査されている。後期後半～晩期前半にかけての集落である近内中村遺跡では、多数の墓壙が調査されている。特に、獣骨（イヌ）が人骨と一緒に埋葬された墓壙はきわめて稀な事例として注目される。

弥生時代の遺跡は限られており、さらに発掘調査等によってその内容が明らかになっている遺跡は数少ない。明確な集落として上村貝塚で前期の竪穴住居が5棟調査されている。

奈良・平安時代になると再び遺跡数の増加が認められる。田鎖車堂前遺跡および田鎖遺跡の所在する田鎖地区に隣接する松山地区では松山大地田沢遺跡・木戸井内IV遺跡・隠里III遺跡等が古代の集落として調査されている。また、磯鷄石崎遺跡が所在する磯鷄地区では磯鷄館山遺跡・上村貝塚などの遺跡で古代の集落が調査されている。また、両遺跡の南に位置する島田II遺跡は鉄生産を主とする大規模な集落として注目される。

古代と中世を繋ぐ時代である平安時代末期には八木沢野来遺跡・払川遺跡等でこの時代の陶磁器片、八木沢駒込I遺跡では武具の部品と銅鏡が出土しているが、この時代の遺構は不明確である。

中世は各水系に付随する要所となる高台において城館が認められる。田鎖地区には田鎖館、松山地区には松山館跡などが発掘調査されている。

(福島)

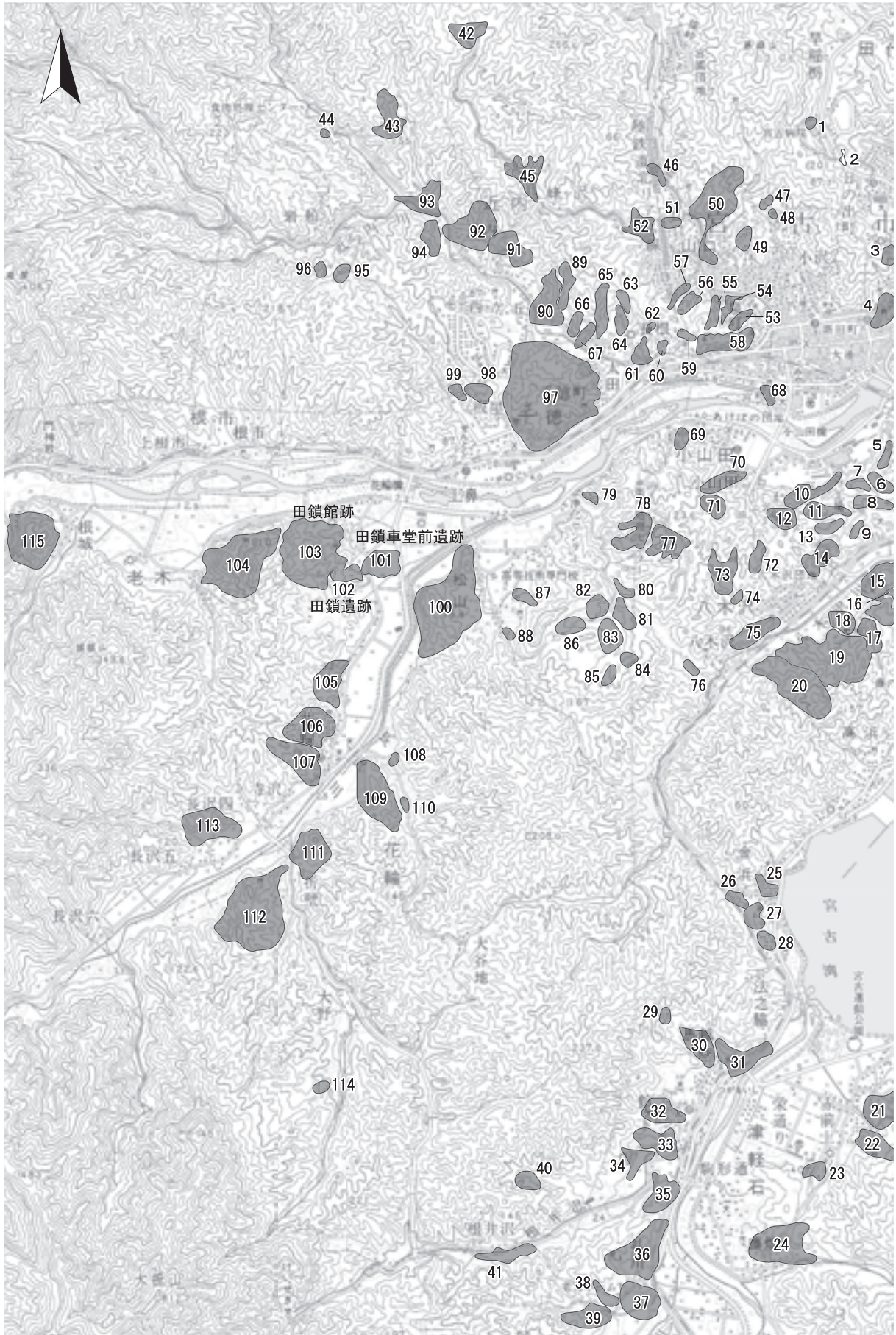
#### 中世城館

田鎖館跡は中世に於いて、この地域に勢力を有していた田鎖氏（閉伊氏の宗流）の居城と伝えられている。現在の田鎖地区は長沢川が北流して閉伊川へと合流する地域を指すが、中世にはもう少し広範の長沢川流域がそうだったと推測される。ここには宮古地域でも有数の広い沖積地がある。また、長沢川沿いに上流へ向かうと、石峠地区や豊間根地区といった津軽石地域へとつながっている。閉伊川も河口から6km程で、舟での往来も可能である。

閉伊川の下流域沿いには大小の沖積地が発達し、集落はそうした沖積地の背後にある山地の山裾部分に形成される場合が多い。田鎖館跡は閉伊川のすぐ傍まで張り出した山地の尾根上にあり、田鎖地区だけでなく北西側の花原市地区も眼下に、また閉伊川は河口の少し手前、対岸は千徳地区までを望むことが出来る。

城館の範囲は東西約700m、南北約700mで城域はこの地域ではやや広い。しかしながら山頂部に広い平場を有する部分は殆ど無く、痩せ尾根が毛細血管のように複雑に広がっている。縄張図は『日本城郭体系』掲載されたものがあり、これによると主郭の南側に二の郭（主郭より標高は高い）、北側



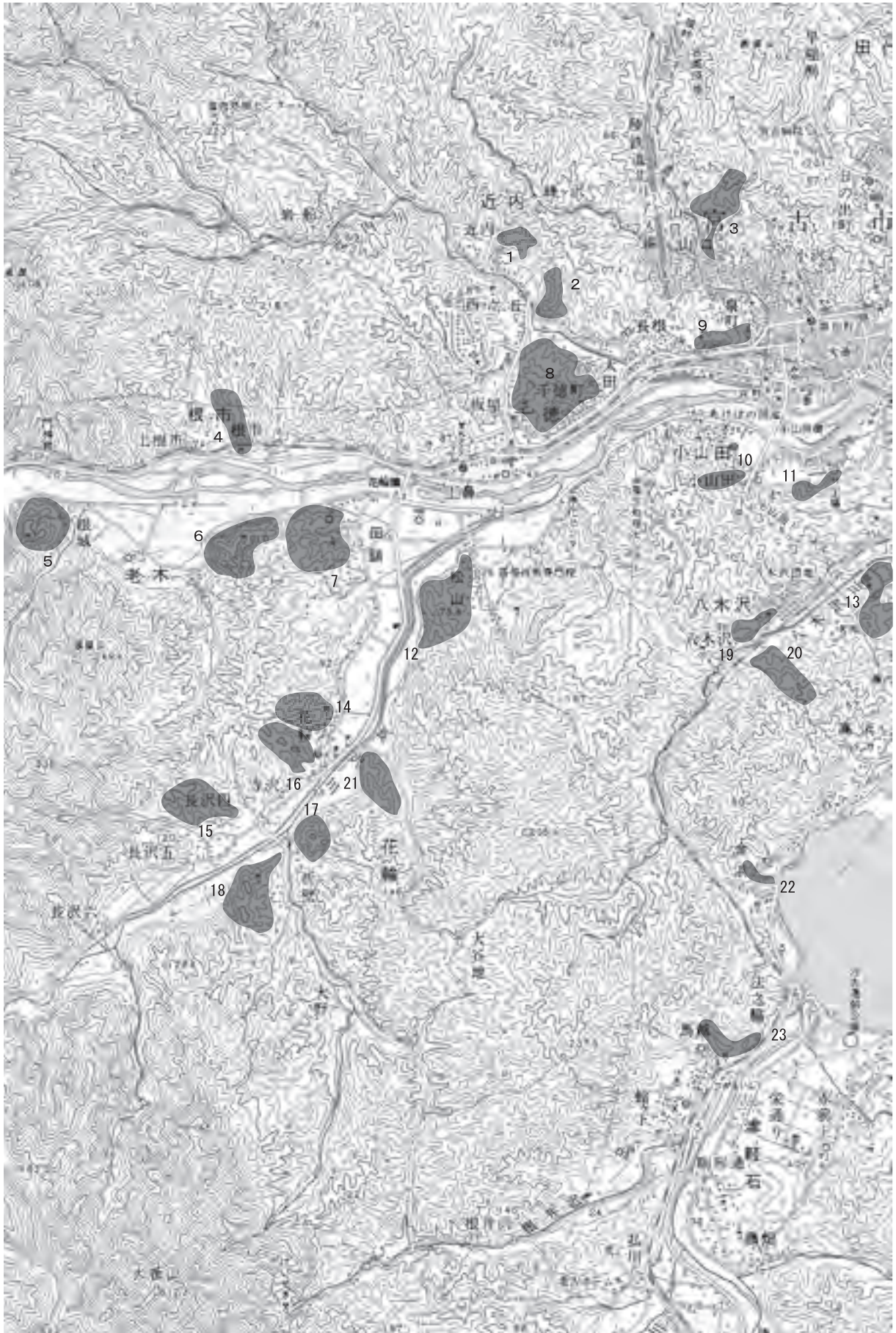


第4図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	時代	種別	
	1	LG23-1349	寒風	さむかぜ	縄文・古代	集落跡
	2	LG24-1082	佐原Ⅱ	さばらⅡ	縄文・奈良・平安・近世	散布地
	3	LG24-2076	沢田Ⅰ	さわだⅠ	古代	散布地
	4	LG34-0025	黒田館	くろたて	中世	城館跡
	5	LG34-1045	藤原上町Ⅲ	ふじわらかみまちⅢ	縄文・古代	散布地
	6	LG34-1075	早坂	はやさか	縄文・弥生・古代	貝塚
	7	LG34-1073	小沢田	こさわだ	縄文・古代	貝塚
	8	LG34-1084	上村Ⅱ	わむらⅡ	縄文・古代	散布地
	9	LG34-2013	上村Ⅲ	わむらⅢ	縄文・古代	散布地
	10	LG33-1389	小山田Ⅲ	こやまだⅢ	中世	城館跡
	11	LG34-1091	上村Ⅳ	わむらⅣ	縄文・古代	散布地
	12	LG33-2306	小山田Ⅱ	こやまだⅡ	古代	散布地
	13	LG34-2001	磯鶏竹洞Ⅰ	そけいたけほらⅠ	平安・古代	集落跡
	14	LG33-2349	磯鶏竹洞Ⅱ	そけいたけほらⅡ	縄文・古代	集落跡
	15	LG34-2155	磯鶏館山	そけいたてやま	縄文～中世	集落跡・城館跡
	16	LG34-2076	仏沢Ⅰ	ほとけざわⅠ	古代	散布地
	17	LG44-0003	磯鶏中谷地	そけいなかやち	古代	散布地
	18	LG34-2091	島田Ⅰ	しまだⅠ	平安	集落跡
	19	LG43-0338	島田Ⅱ	しまだⅡ	古代	集落跡
	20	LG43-0357	八木沢古館	やぎさわふるたて	中世	城館跡
	21	LG54-1025	赤前Ⅲ	あかまえⅢ	縄文・平安	集落跡
	22	LG54-1064	赤前館	あかまえたて	中世	城館跡
	23	LG53-1389	久保田	くぼた	縄文・古代	散布地
	24	LG53-2346	藤畑	ふじばたけ	縄文・古代	集落跡
	25	LG43-2335	金浜館	かねはまたて	中世・縄文	城館跡
	26	LG43-2342	金浜Ⅰ	かねはまⅠ	縄文・平安	散布地
	27	LG43-2363	金浜Ⅱ	かねはまⅡ	古代	集落跡
	28	LG43-2384	金浜Ⅲ	かねはまⅢ	縄文・古代	散布地
	29	LG53-0246	馬越Ⅱ	まごしⅡ	古代	集落跡
	30	LG53-0268	馬越Ⅰ	まごしⅠ	縄文・古代	散布地
	31	LG53-0382	山崎館	やまざきたて	中世	城館跡
	32	LG53-1225	沼里	ぬまり	縄文・奈良	集落跡
	33	LG53-1266	沼里館	ぬまりたて	中世	城館跡
	34	LG53-1273	根井沢穴田Ⅰ	ねいさわあなⅠ	縄文・古代	散布地
	35	LG53-2205	高平館	たかひらたて	中世	城館跡
	36	LG53-2264	弘川館 (津軽石館)	はらいがわたて	中世	城館跡
	37	LG53-2294	弘川Ⅰ	はらいがわⅠ	縄文・奈良・中世	集落跡
	38	LG63-0200	弘川Ⅲ	はらいがわⅢ	縄文・古代	散布地
	39	LG53-2291	弘川Ⅱ	はらいがわⅡ	縄文・古代	集落跡
	40	LG53-1194	根井沢寺ヶ沢	ねいさわてらがさわ	古代	散布地
	41	LG53-2152	根井沢Ⅰ	ねいさわⅠ	縄文・弥生・平安	製鉄跡
	42	LG23-0078	黒石沢	くろいしざわ	縄文・古代	散布地
	43	LG23-1042	アサナイ沢	あさないざわ	縄文・古代	散布地
	44	LG22-1365	柵館Ⅲ	さくだてⅢ	縄文・弥生・古代	散布地
	45	LG23-2104	蜂ヶ沢Ⅰ	ばちがさわⅠ	縄文・古代	集落跡
	46	LG23-1295	赤畑東	あかばたけひがし	縄文・近世	散布地
	47	LG23-2325	小沢Ⅴ神籠石	こざわⅤかごいし	縄文・古代	散布地・祭祀跡
	48	LG23-2336	小沢Ⅳ人形鼻		縄文・古代	散布地
	49	LG23-2353	拜殿ヶ沢	はいでんがさわ	縄文・古代	散布地
	50	LG23-2310	山口館 (館山)	やまぐちたて	中世・古代	城館跡
	51	LG23-2246	天神山	てんじんやま	縄文・古代・弥生	散布地
	52	LG23-2244	山口駒込Ⅰ	やまぐちこまごめⅠ	縄文・奈良	集落跡
	53	LG33-0323	鴨崎Ⅱ	かもざきⅡ	古代	散布地
	54	LG33-0312	鴨崎Ⅰ	かもざきⅠ	古代	集落跡
	55	LG33-0218	泉町狐崎Ⅱ	いずみちょうきつねざきⅡ	縄文・奈良・平安	集落跡
	56	LG33-0321	泉町狐崎Ⅰ	いずみちょうきつねざきⅠ	古代	散布地
	57	LG33-0207	狐崎	きつねざき	縄文・奈良・平安	集落跡
	58	LG33-0340	笠間館	かさまたて	中世	城館跡
	59	LG33-0248	長根寺Ⅱ	ちょうこんじⅡ	縄文・古代	散布地
	60	LG33-0256	長根Ⅱ	ながねⅡ	古代	散布地
	61	LG33-0253	長根Ⅰ	ながねⅠ	弥生～中世	群集墳
	62	LG33-0235	長根Ⅲ	ながねⅢ	古代	散布地
	63	LG33-0213	青猿Ⅲ	あおざるⅢ	縄文・古代	散布地
	64	LG33-0222	青猿Ⅱ	あおざるⅡ	弥生・平安	集落跡
	65	LG33-0221	青猿Ⅰ	あおざるⅠ	縄文・平安	集落跡・製鉄跡
	66	LG33-0138	近内寺本Ⅰ	ちかないてらもとⅠ	縄文・古代	散布地
	67	LG33-0149	近内寺本Ⅱ	ちかないてらもとⅡ	古代	散布地
	68	LG33-0385	横山	よこやま	古代	集落跡・貝塚
	69	LG33-1237	岩ヶ沢	いわがさわ	縄文・古代	散布地
	70	LG33-1370	小山田館	こやまだたて	中世	城館跡
	71	LG33-1380	小山田Ⅰ	こやまだⅠ	古代	集落跡
	72	LG33-2344	猿楽峠	さるがくとうげ	古代・縄文	散布地
	73	LG33-2351	八木沢守ノ越Ⅳ	やぎさわもりのこしⅣ	縄文・古代・弥生	散布地
	74	LG33-2372	八木沢守ノ越Ⅲ	やぎさわもりのこしⅢ	縄文・古代	散布地
	75	LG43-0312	八木沢新館	やぎさわしんたて	中世・近世	城館跡
	76	LG33-2258	八木沢Ⅲ	やぎさわⅢ	古代	生産遺跡
	77	LG33-2227	木戸井内Ⅲ	きどいないⅢ	古代・弥生	散布地
	78	LG33-2214	木戸井内Ⅱ	きどいないⅡ	古代	散布地
	79	LG33-1280	木戸井内Ⅴ	きどいないⅤ	奈良	集落跡
	80	LG33-2263	木戸井内Ⅳ	きどいないⅣ	古代・縄文	集落跡
	81	LG33-2292	隠里Ⅲ	かくれざとⅢ	縄文・古代	集落跡
	82	LG33-2280	隠里Ⅱ	かくれざとⅡ	縄文・古代	集落跡
	83	LG43-0200	隠里Ⅳ	かくれざとⅣ	縄文・古代	散布地
	84	LG43-0212	隠里Ⅴ	かくれざとⅤ	古代	散布地
	85	LG43-0230	隠里Ⅵ	かくれざとⅥ	古代	散布地
	86	LG33-2197	隠里Ⅰ	かくれざとⅠ	縄文・古代	集落跡
	87	LG33-2162	松山下谷地	まつやましもやち	縄文・古代	散布地
	88	LG43-0102	七所沢Ⅰ	しっしょざわⅠ	古代	散布地
	89	LG23-2197	近内白石Ⅱ	ちかないしろいしⅡ	縄文・古代	散布地
	90	LG23-2196	近内大館	ちかないおおだて	中世	城館跡
	91	LG23-2162	近内館	ちかないたて	中世	城館跡
	92	LG23-2059	近内中村	ちかないなかむら	縄文・弥生・古代	集落跡
	93	LG23-2024	菅ノ沢	すげのさわ	縄文・古代	集落跡
	94	LG23-2055	横川	よこかわ	縄文・古代	散布地
	95	LG22-2387	桜木	さくらぎ	縄文・古代	散布地
	96	LG22-2385	与茂子Ⅱ	よものこⅡ		散布地
	97	LG33-0197	千徳城遺跡群	せんとくじょういせきぐん	奈良・平安・中世	城館跡
	98	LG33-0099	神田沢	かんだざわ	縄文・古代	散布地
	99	LG33-0087	室井沢Ⅰ	むろいざわⅠ	縄文・古代	散布地
	100	LG33-2086	松山館	まつやまたて	古代・中世	城館跡
	101	LG33-2040	田鎖車堂前	たくさりくるまどうまえ	縄文・古代	散布地
	102	LG32-2358	田鎖	たくさり	縄文・古代	散布地
	103	LG32-2333	田鎖館 (三合並館)	たくさりたて (さんごうなみたて)	中世	城館跡
	104	LG32-2248	老木館	ろうきたて	中世	城館跡
	105	LG42-0355	鯉沢	かつおざわ	平安・奈良	集落跡
	106	LG42-0384	花輪館(エゾ館)	はなわたて	中世	城館跡
	107	LG42-1312	程久保	ほどくぼ	中世	城館跡
	108	LG43-1012	向沢	むかいさわ	縄文・平安	散布地
	109	LG43-1040	鱒沢館	ますざわたて	中世	城館跡
	110	LG43-1042	鱒沢Ⅰ	ますざわⅠ		集落跡
	111	LG42-1395	下折壁Ⅱ	しもおりかべⅡ	中世	城館跡
	112	LG42-2249	折壁館	おりかべたて	中世	城館跡
	113	LG42-1276	長沢館 (御所館・川戸館)	ながさわたて	中世	城館跡
	114	LG52-1306	上大野Ⅳ	かみおおのⅣ	古代	散布地
	115	LG32-2029	根城館	ねじょうたて	中世	城館跡





1 : 50,000 宮古

第5図 周辺の城館

第2表 城館一覧表

余白設定済1ページ

番号	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	調査経歴	文献	備考
1	LG23-2162	近内館	城館跡	中世	主郭、物見台、二重空堀、腰郭、土師器、鉄滓など	近内第4地割跡場	平成4～5年、一部発掘調査		平成17年度東側範囲拡大
2	LG23-2196	近内大館	城館跡	中世	主郭、腰郭、物見	近内第3地割白石			
3	LG23-2310	山口館(館山)	城館跡	中世・古代	主郭、副郭、二の郭、三の郭、空堀、土師器	山口第5地割久保、第10地割橋場	94、95年一部調査、99年～一部調査継続中	宮埋文報51集『赤畑・天神山・山口館跡』1998年、宮埋文報57集『山口館跡』2002年	
4	LG32-1258	根市館	城館跡	中世	水壕、主郭、二重空堀、腰郭	根市第7地割雲南沢、第8地割与藤沢			
5	LG32-2029	根城館	城館跡	中世	主郭、二の郭、三の郭、砦、空堀	老木第19地割根城館			宮古市指定史跡S31.4.11指定
6	LG32-2248	老木館	城館跡	中世	主郭、二の郭、三の郭、空堀	田鎖第1地割三合並			
7	LG32-2333	田鎖館三合並館	城館跡	中世	主郭、二の郭、空堀、物見台	田鎖第1地割三合並			
8	LG33-0197	千徳城遺跡群	城館跡	奈良平安中世	主郭、二の郭、三の郭、砦、空堀、千徳城、堀合館	千徳第5、8、16、18地割、近内第11地割	87、89、90年一部調査	宮埋文報14集『青猿I・下在家II・千徳城遺跡群(堀合館)』1998年、宮埋文報27集『青猿I遺跡・千徳城遺跡群』1991年	87、89、90年一部調査、旧千徳城、05年度遺跡範囲修正(東側縮小)
9	LG33-0340	笠間館	城館跡	中世	郭、腰郭、砦	千徳第1地割猫ヶ沢、館合町			
10	LG33-1370	小山田館	城館跡	中世	郭、主郭、二重空堀	小山田第5地割和山、大畑			
11	LG33-1389	小山田III	城館跡	中世	物見、腰郭	小山田第6地割牛ヶ鼻			
12	LG33-2086	松山館	城館跡	古代中世	蔵手刀、須恵器、主郭、二の郭、三の郭、砦、腰郭、空堀	田鎖第5地割鱒内、松山第13地割大久保沢			
枠外	LG34-2123	磯鶏沖	城館跡・台場	近世中世		磯鶏第4地割沖			「檜上館」の地名?」
13	LG34-2155	磯鶏館山	集落跡・城館跡	縄文～中世	竪穴住居跡、製鉄、貝層、建物跡	磯鶏第11地割岸ノ前	84～87、89年一部調査	宮埋文報24集『磯鶏館山遺跡—第2次調査—』1990年、宮埋文報43集『磯鶏館山遺跡』1995年	
14	LG42-0384	花輪館エゾ館	城館跡	中世	主郭、二の郭、腰郭、砦、空堀	花輪第5地割程久保			
15	LG42-1276	長沢館御所館川戸館	城館跡	中世	主郭、腰郭、砦、空堀	長沢第16地割中家和戸、第17地割寺沢			
16	LG42-1312	程久保	城館跡	中世		花輪第5地割程久保			
17	LG42-1395	下折壁II	城館跡	中世	郭	長沢第20地割下折壁、花輪第1地割姉戸			
18	LG42-2249	折壁館	城館跡	中世	主郭、二の郭、腰郭、砦、空堀	長沢第12地割向、第21地割中折壁			
19	LG43-0312	八木沢新館	城館跡	中世近世	主郭、二の郭、三の郭、腰郭、砦、空堀	八木沢第3地割八木沢、第2地割守ノ越			
20	LG43-0357	八木沢古館	城館跡	中世	主郭、二の郭、副郭、砦	八木沢第5地割寺ヶ沢、第6地割中田			
21	LG43-1040	鱒沢館	城館跡	中世	主郭、腰郭、水堀	花輪第17地割鱒沢、第1地割姉戸			
22	LG43-2335	金浜館	城館跡	中世縄文	主郭、帯郭、空堀、土坑	金浜第1地割西角地、堤ヶ沢	80年一部調査	宮埋文報7集『金浜館跡』1986年	
23	LG53-0382	山崎館	城館跡	中世	主郭、腰郭、砦	津軽石第3地割馬越、第1地割法ノ脇			

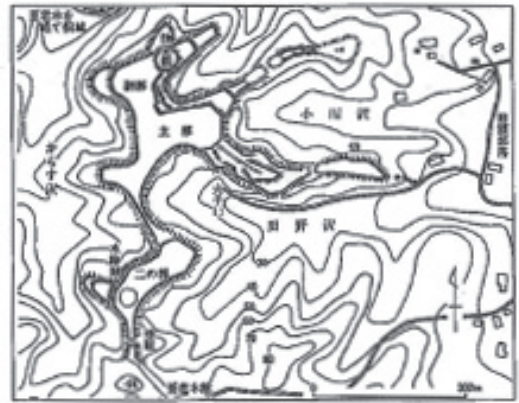


に副郭を設け、東側へ延びる複数の痩せ尾根部分にも小規模な郭を連ねている。田鎖館跡の西側に隣接して老木館があるがその縄張は田鎖館跡とほぼ同規模である。また、田鎖館跡の南側にも城館としても良さそうな尾根筋がみられる（遺跡としての田鎖館跡はこの南側の尾根までを含めている）。これらのことから、田鎖館跡の縄張についてはこれまで周知されているものに、南側の尾根筋と西側の老木館を含めた範囲と考えたい。また、山頂部には居住するような建物を建てるような空間はないため、東側麓の何処かに居所を構えていたと推測される。但し、調査区以外の部分は大半が民有地で、周辺への立ち入りは許可されなかったため縄張図作成は行っていない。

閉伊氏は永和年間（1375-1379）に田鎖城を築き、老木地区の根城から移ったのを機に田鎖氏を名乗るようになるとされる。そして15世紀前半（永享の頃）には南部氏の配下になったとされている。その間にも一族は郡内に広がり新村を開いていった。

16世紀末、九戸政実の乱に於いて南部信直からの出陣要請に動かず、奥州再仕置の時にも動かなかった。これにより所領は没収され城は破却された。

『尺素往来』（室町時代後期）には「多久佐理之本牧…」と田鎖牧の馬についての記載がある。他にも複数の文献に田鎖産の馬が登場する。このことから田鎖館周辺には牧が広がる景観が想定される。



(杉沢)

11. 田鎖城図

#### 引用・参考文献

- 宮古市教育委員会 1986 『宮古市埋蔵文化財調査報告書 9 宮古市遺跡分布図』  
 宮古市教育委員会 『磯鶏館山遺跡』  
 宮古市教育委員会 2006 『宮古市埋蔵文化財調査報告書 68 木戸井内IV遺跡』  
 岩手日報社 2000 『いわて未来への遺産 遺跡は語る 旧石器～古墳時代』  
 岩手県史 第三卷中世編下  
 角川日本の地名3 岩手県  
 日本城郭体系 2巻

(以下) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書

- 1991 『第158集 上村貝塚発掘調査報告書』  
 1999 『第450集 島田II遺跡第2～4次発掘調査報告書』  
 2008 『第511集 賽の神II遺跡・賽の神遺跡・下大谷地I遺跡・八木沢野来遺跡第1次発掘調査報告書』  
 2009 『第529集 木戸井内IV遺跡・隠里III遺跡発掘調査報告書』  
 2010 『第552集 隠里VIII遺跡発掘調査報告書』  
 2010 『第558集 松山大地田沢遺跡発掘調査報告書』  
 2014 『第625集 松山館跡発掘調査報告書』

## Ⅲ 調査方法

### 1 発掘調査

田鎖車堂前遺跡および田鎖遺跡は、いずれも平坦な地形であるが、地下水位が高く雨天で度々冠水することがあった。安全で効率的に発掘調査を進めるため排水等で様々な工夫を凝らした。

#### 掘削作業

調査開始当初は、人力によるトレンチを設定し、初期段階での層位および遺構の把握をおこなった。田鎖車堂前遺跡はトレンチの断面および平面観察により、複数の遺構面が存在する可能性が考えられ、表土直下の遺構面から順次調査をおこなうことを計画した。トレンチの結果を加味しながら、その後は重機により表土除去を実施した。重機による掘削が終了した部分については、人力による遺構検出作業をおこなった。検出した遺構の掘削作業は2分法あるいは4分法で掘削し、その状況を記録、残りの部分の掘削という流れで作業を進めた。また、多数検出された柱穴は検出後、速やかに遺構内部を数センチ掘削し、柱痕跡の有無や建物の想定等についての把握に努めた。

#### 遺構実測・写真撮影

遺構実測は、電子平板による遺構平面図を作成し、遺構断面図は手描きによる実測方法を採用した。また、遺構の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラによる撮影を基本とし、6×7判モノクロによる写真を保存用として適宜撮影した。撮影に際しては、撮影カードの記入・写し込みをおこない、撮影写真の整理に活用した。

#### 諸記録の表記

調査に際して、田鎖車堂前遺跡（TSK-14・15・16・17）、田鎖遺跡（TKS-15）、田鎖館跡（TKD-16）と各遺跡名および調査年度を略号で表現した。調査で記録したものすべてが、この略号によって管理されている。

遺構名については、調査においては汎用的な遺構略号を用いた。遺構略号は竪穴住居や竪穴建物を「SI」、独立した土坑を「SK」、独立した柱穴を「SP」、独立した焼土遺構を「SF」、不明遺構を「SX」とし、これら種別毎に「01」から番号を付与した。なお、竪穴住居に属する施設と考えられる遺構については、主体遺構名の後に「-」を付け、種別によって「S」と「0」を外して表現している。すなわち、今回の調査で検出した「竪穴住居1」内にある付属遺構の柱穴については「SI01-P1」となる。

### 2 整理作業

発掘調査終了後の整理作業は、年度毎に当センターの室内で行った。

#### 遺構実測図・写真

遺構実測図はデータを基に編集し、遺構図版としての体裁を整えた。この作業は発掘現場で取得した点のデータを基に作成しており、これら各測点に変更せず必要な点や線を加えて整えた。これらのデータの座標値等はデータとしても保存している。発掘調査現場で撮影した写真は、デジタル写真データは台帳を作成し、データ毎フォルダ整理をおこなった。これらは遺構毎に分類してある。また、ネガフィルムについては、それぞれアルバムによる整理をおこなった。

### 出土遺物

すべて洗浄および注記を行い、その過程を経たものの接合作業を行った。これらの内、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影をおこなった。選択基準は、実測可能な残存状態の良いもの原則とし、土器類の破片については、特徴から時期や土器型式が判明するもの、口縁部のあるものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での作業を基本とした。原寸で行った実測図は、縮尺を整えトレースを行い、図版用の版下を作成した。また、縄文土器・弥生土器の器表面は湿拓により拓本とした。遺物の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いて当センター内にある写場でおこない、撮影したデータは編集し、写真図版として本書に掲載した。

### 保管・収納

すべての処理が終了した記録類および遺物は、県立埋蔵文化財センター所定の場所へ収納した。遺物は、掲載遺物と不掲載遺物に分けて収納しており、それぞれコンテナに必要事項を記載したラベルを貼付し保管している。

## 3 記載方法

### 掲載遺構

3遺跡とも遺構名は、調査で使用した遺構略号から新たに本書記載用の遺構名へと変更した。その変更については下記の一覧表にて示した。

### 掲載遺物

本書に掲載した遺物は遺跡毎で、掲載順に種別を問わず通し番号により掲載番号を付与した。本書に掲載された遺物実測図・掲載遺物一覧表・写真図版に付記してある番号が共通している。

### 図版・写真図版

掲載した実測図のスケールは図版にスケールバーを付けた。遺構の縮尺は、竪穴住居等を1/40、土坑等を1/20で掲載し、遺物は土器、1/3、剥片石器・石製品は1/2で掲載した。なお、写真図版の掲載遺物については縮小を基本としそれぞれ任意の大きさとした。

(福島)

# 田 鎖 遺 跡



## IV 田鎖遺跡の調査

### 1 概要と層序

田鎖遺跡は東西に田鎖車堂前遺跡と田鎖館跡とにそれぞれ挟まれた遺跡である。遺跡は西から東へ向け緩やかな斜面である。調査前は標高の高い部分が畑、低い部分が水田、中央が宅地であったようである。調査前の現況では地形に沿うように階段状に平場が造成されており、中央にあった平場は宅地の造成に伴うものであると想定される。平場は切土や盛土によるもので、最上段より下降する順に平場1、平場2、平場3と呼称し、調査を進めた。

最上段の平場1では柱穴状の小ピットが多く検出された以外に土坑が2基みられる。大規模な削平が南東側で認められるが、全体的に旧地形を保持している。遺構、遺物とも最も希薄なエリアである。

中段に位置する平場2では、造成により南北方向帯状に造成が認められる。近現代の造成であると考えられるが、前時代にもある程度の自然地形を損ねる造成は繰り返されていたものと考えられる。遺構は平場の段に沿うように中近世の掘立柱建物が認められる。遺物もこの掘立柱建物に関連する遺物が出土している。

最下段に位置する平場3では平場2と同様に中近世の掘立柱建物群と縄文時代の遺構が分布する。縄文時代の遺構は地形面に沿うように陥し穴群が分布し、もっとも低位の南東側黒色土地帯では縄文土器が多く出土した。それ以外にも古代や中近世の遺物もわずかながら出土している。

遺跡の基本層序は遺跡の立地する地形面と密接に関わっており、西側の田鎖館跡から連続する堆積を示している。完新世以前の地質を基盤としており、遺跡は低位段丘上縁辺部に存在するということができる。

**I層**（田鎖遺跡）は表土（近現代の盛土、耕作土を含む）である。黒褐色シルトが主体で、平場1および3では締まりが無く、混入物も少ない。平場2では焼土ブロックや炭化物が多く含まれ、砂礫も混じる。平場2では近世以降に火災とその片付けがあった可能性がある。I層（田鎖遺跡）は調査区全体を覆っている。

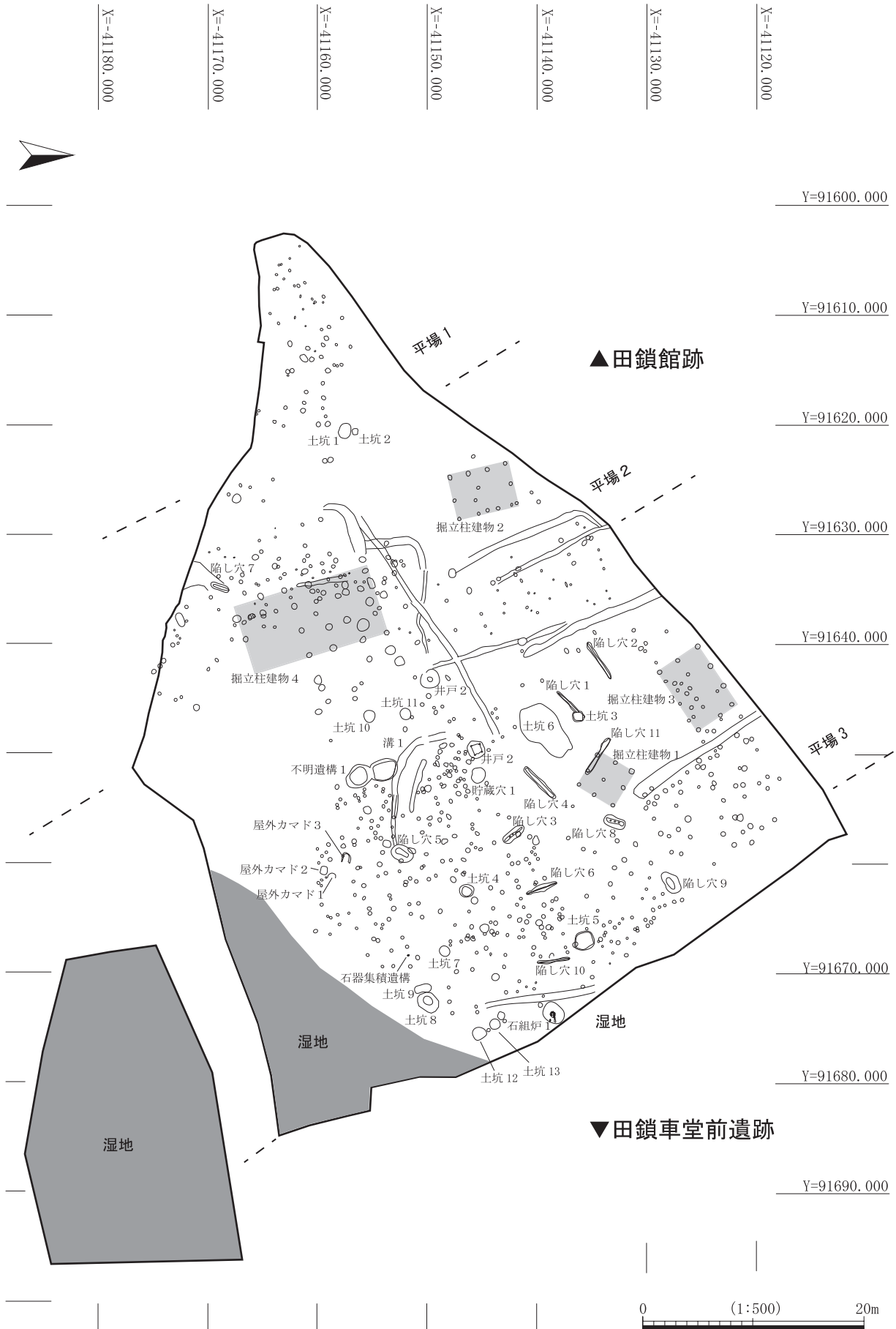
**II層**（田鎖遺跡）は古代～近世の遺物包含層である。I層同様に黒褐色シルト主体であるが、色調はI層よりもやや明るく、灰色傾向にある。締まりはあまりなく、混入物も少ない。

**III層**（田鎖遺跡）は縄文時代の遺物包含層である。I層同様に黒褐色シルト主体であるが、色調はI層よりも暗い傾向にある。縄文時代中期の土器を局所的に多く含むが、その他の混入物は認められない。締まりは無いが、湧水する低地まで認められる。

**IV層**（田鎖遺跡）は黒色シルトの無遺物・自然堆積層で、谷頭凹地のいわゆる黒ボク層である。平場1から2にかけてはおおむね東西方向筋状にみられ、東端部の低地では1m以上厚く堆積している。

**V層**（田鎖遺跡）は黄褐色シルトの無遺物・自然堆積層で、最終氷期の堆積層である。いわゆるローム層である。

**VI層**（田鎖遺跡）はV層に礫が混じる無遺物・自然堆積層であり、河岸段丘を形成している基盤層である。おもに平場1～2の北側に露出した状態が認められる。この地点が元々高い地形面であり、その後大きく改変された結果、露出したものと考えられる。



第1図 田鎖遺跡遺構配置図

## 2 遺構と遺物

発掘調査では縄文時代や古代・中世・近世を中心とした遺構を検出した。また、遺物も遺構に応じて縄文土器・石器、土師器・須恵器、中世の陶磁器、近世の陶磁器などが出土した。本節では、時代毎に項目を設けて遺構・遺物の記述をおこなう。

### (1) 縄文時代の遺構

#### 陥し穴1～11（第2～4図、写真図版2～8）

陥し穴は合計11基検出した。平場2に位置する陥し穴7を除いて残る10基は、平場3を中心に調査区の比較的低地に位置する。10基を2大別すると、細い溝条の平面形態の6基と楕円形の平面形態の5基に分けることができる。前者は陥し穴1・2・4・6・10・11、後者は陥し穴3・5・7・8・9がそれぞれ該当する。

陥し穴1は平場3北側の緩斜面に立地する溝条の陥し穴である。斜面やや上方約5m北西に同じく溝条の陥し穴2が近在する。長軸を西から東へ下る斜面傾斜に沿うように向け、設置されている。地山であるVI層で検出し、これを切り込んで作られている。VI層が検出面であることを考えると、遺構の上部は大きく削平されていると判断され、遺構の構築時には現状の倍以上の深さがあったと考えられる。埋土は黒色～黒褐色のシルトであり、色調および土質からIII層あるいはIV層を起源とする埋土であることが考えられる。

陥し穴2は平場3北側の緩斜面に立地する溝条の陥し穴である。斜面やや下方約5m南東に同じく溝条の陥し穴1が近在する。土坑4に東側を切られているが、わずかに端部は残存している。長軸を西から東へ下る斜面傾斜に沿うように向け、設置されている点は陥し穴1に共通する。さらに、検出面および地山への切り込みの様子も陥し穴1に共通するためこれら2基はセットで機能した可能性が考えられる。

陥し穴3は平場3中央に立地する楕円形の陥し穴である。これより北側にある溝条陥し穴群に長軸が直交する平面角度である。底面には逆茂木を設置したと思われる直径10cm内外の小ピットが列状に3個配置されている。

陥し穴4は平場3北側の緩斜面に立地する溝条の陥し穴である。斜面やや下方約5m南東に同じく溝条の陥し穴1が近在する。非常に浅いため上部を大きく削平されている可能性と近世の溝の残存部である可能性が考えられる。埋土より縄文土器片が3点出土したが、時期を特定できるものではない。

陥し穴5は平場3中央付近の緩斜面に立地する楕円形の陥し穴である。

陥し穴6は平場3中央から北側緩斜面に立地する溝条の陥し穴である。長軸は南北方向に向けられており、IV層上面で検出した。断面はロート状を呈し開口部は大きく、上部側壁が崩落しながら埋没したものとみられる。埋土より2点の縄文土器片が出土したが、時期を特定できるものではない。

陥し穴7は唯一平場2の平坦面に立地する楕円形の陥し穴である。V層上面で検出したが、削平された平坦面に位置しているため、本来はIV層上面から切り込んでいるものとみられる。その他の陥し穴よりも標高が高いが、谷筋に位置するという点ではその他の陥し穴の立地と共通する。

陥し穴8は平場3の北側に緩斜面に立地する楕円形の陥し穴である。IV層下位からV層上位にかけての面で検出した。埋土は黒色および黒褐色のシルトを主体とし、V層起源とみられる褐色シルトの堆積が部分的に認められ、側壁が崩落しながら自然に埋没したものと考えられる。底面は概ね平坦で



あり、逆茂木を設置したと思われる直径10cm内外の小ピットが列状に3個配認められる。これらは底面中心軸に沿って配置されている。

陥し穴9は平場3南側に位置し、11基の中でも低い地点に立地する。検出面は緩斜面のIV層上面である。平面形態は楕円形で開口部が大きく開く形状である。埋土は黒褐色シルトを主体とし、自然堆積したものである。底面は湧水のため判然としなかったが、概ね平坦である。逆茂木のピットは認められない。

陥し穴10は平場3のもっとも低い地点に立地する溝状の陥し穴である。IV層上面で黒褐色土のプランを確認した。長軸は南北方向を指向し、側壁は直立する。底面付近で湧水が顕著であった。

陥し穴11は平場3やや北寄りに位置する溝状の陥し穴である。掘立柱建物1の柱穴2基に切られている。長軸方向は周辺の溝状陥し穴と直交する方向を指向する。非常に浅いため、南に近在する陥し穴4同様に上部を大きく削平されている可能性が高い。

11基の陥し穴は、ほとんど遺物を伴わない。これは遺構の性格上遺物の混入する余地がないためと考えられる。したがって、それぞれが同時期に作られたものかどうか判断できない上、詳細な時期も不明である。しかし、周辺で出土する土器は縄文時代中期中葉～後葉に絞られるためいずれかの時期に該当する可能性が考えられる。

(福島)

#### 貯蔵穴1(第4図、写真図版8)

貯蔵穴は1基のみ検出した。平場3の平坦面に立地するフラスコ形の土坑である。IV層上面で検出し、平面形態は円形を呈する。開口部径より底面径が大きく、遺構の下半が外方へ張り出す。埋土下位にV層起源の崩落土と黒褐色シルトが互層になる。この互層の堆積は、遺構底面付近の大きく外に張り出した部分に顕著にみられる。これら互層を覆うように周囲から黒褐色シルトが自然流入したようであり、いくらか小礫が含まれることを考えると流水によって自然に堆積した可能性がある。埋土には時期が特定できる遺物は含まれていなかったが、調査区内では縄文時代中期を中心とする時期の遺物が多いことから縄文時代中期中葉～後葉頃である可能性が想定される。また、周辺に当該期の居住域が存在することを示唆している。

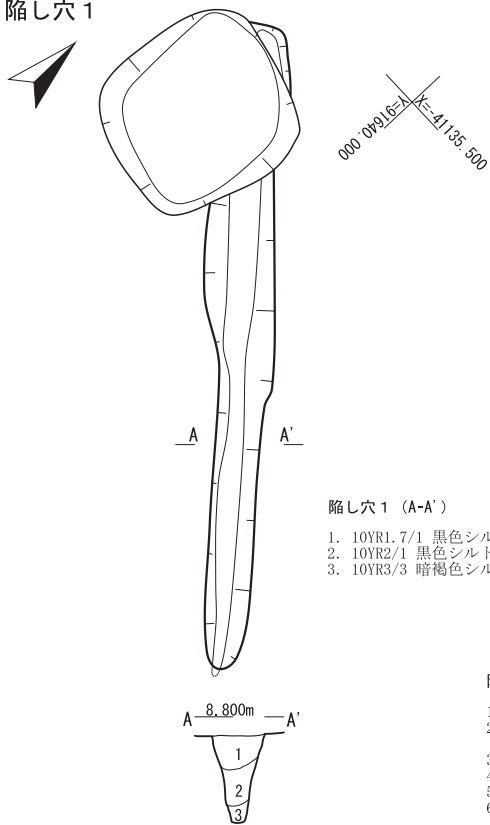
(福島)

#### 石組炉1(第5図、写真図版9)

平場3の最も低い地点に位置する遺物包含層(Ⅲ層)の下位面で石組の炉を1基検出した。およそⅢ層によって被覆されており、遺物を取り上げながらⅢ層を除去すると石組が姿を現す。検出した際、竪穴住居に伴うことを想定しトレンチを設定し調査を進めたが、床面に該当するような平坦面が確認できず、炉の周囲は緩斜面の地形に即し、炉の長軸方向に傾斜していた。そのため竪穴住居内の炉であると認定できなかった。しかし、石組内には焼土面が確認でき、炉としての機能と役割を十分果たしたと判断できる。石組は検出した際、これらを大きく囲むように円形の平面プランを確認した。これは石組および焼土面下部にみられる土坑状の掘り込みである。縄文時代中期の遺物を多く含むⅢ層によって被覆されていることから縄文時代中期あるいはそれ以前の遺構であると考えられる。先述した通り、竪穴住居に伴う炉ではないと考えたが、焼土面が顕著に形成されていることから上屋を想定する必要がある。また、下部の掘り込みと炉との関係は不明であるが、石組長軸の方向と下部掘り込みプランとの一致、石組中軸が掘り込みの中心軸との一致をそれぞれ考え合わせると両者は何らかの密接な関係があったものと推測される。

(福島・箕輪)

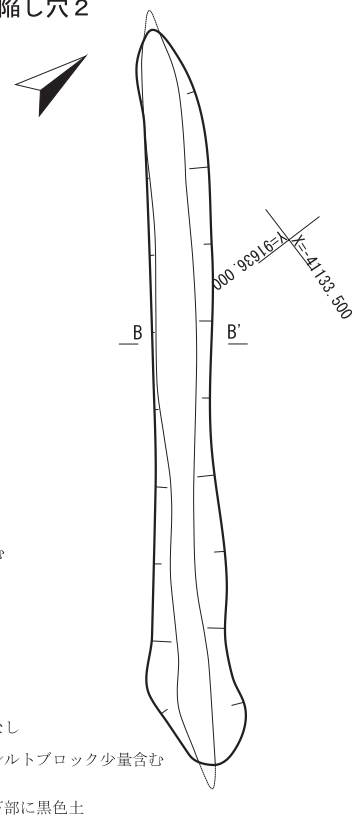
陥し穴 1



陥し穴 1 (A-A')

1. 10YR1.7/1 黒色シルト やや粘質
2. 10YR2/1 黒色シルト やや粘質 地山ブロック少量含む
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粗粒砂混

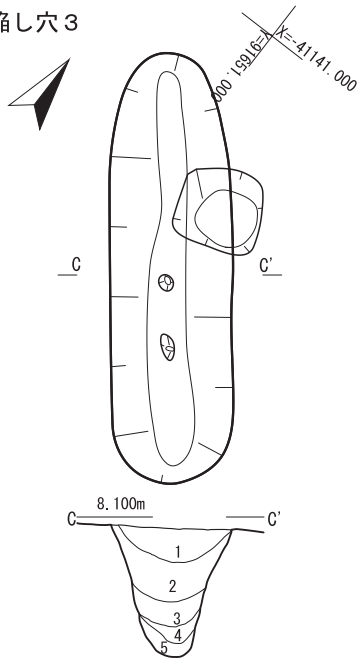
陥し穴 2



陥し穴 2 (B-B')

1. 10YR2/1 黒色シルト 中粒砂混
2. 10YR3/1 黒褐色シルト しまりなし 地山ブロック少量含む
3. 10YR6/6 明黄褐色シルト 黒色シルトブロック少量含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
5. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト
6. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 下部に黒色土

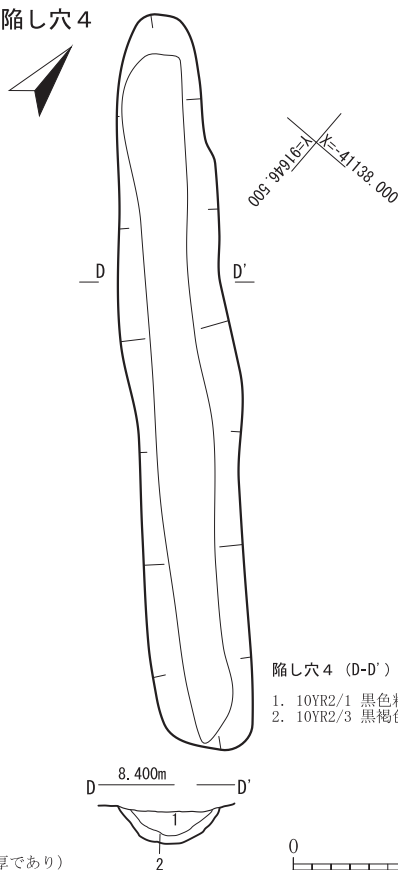
陥し穴 3



陥し穴 3 (C-C')

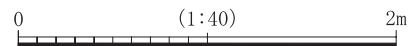
1. 10YR1.7/1 黒色シルト 地山ブロック含む
2. 10YR2/1 黒色シルト 地山ブロック含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック含む、マサ土混
4. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック含む、マサ土混
5. 10YR4/4 褐色砂質シルト (底面直上に10YR2/1粘1cm厚であり)

陥し穴 4

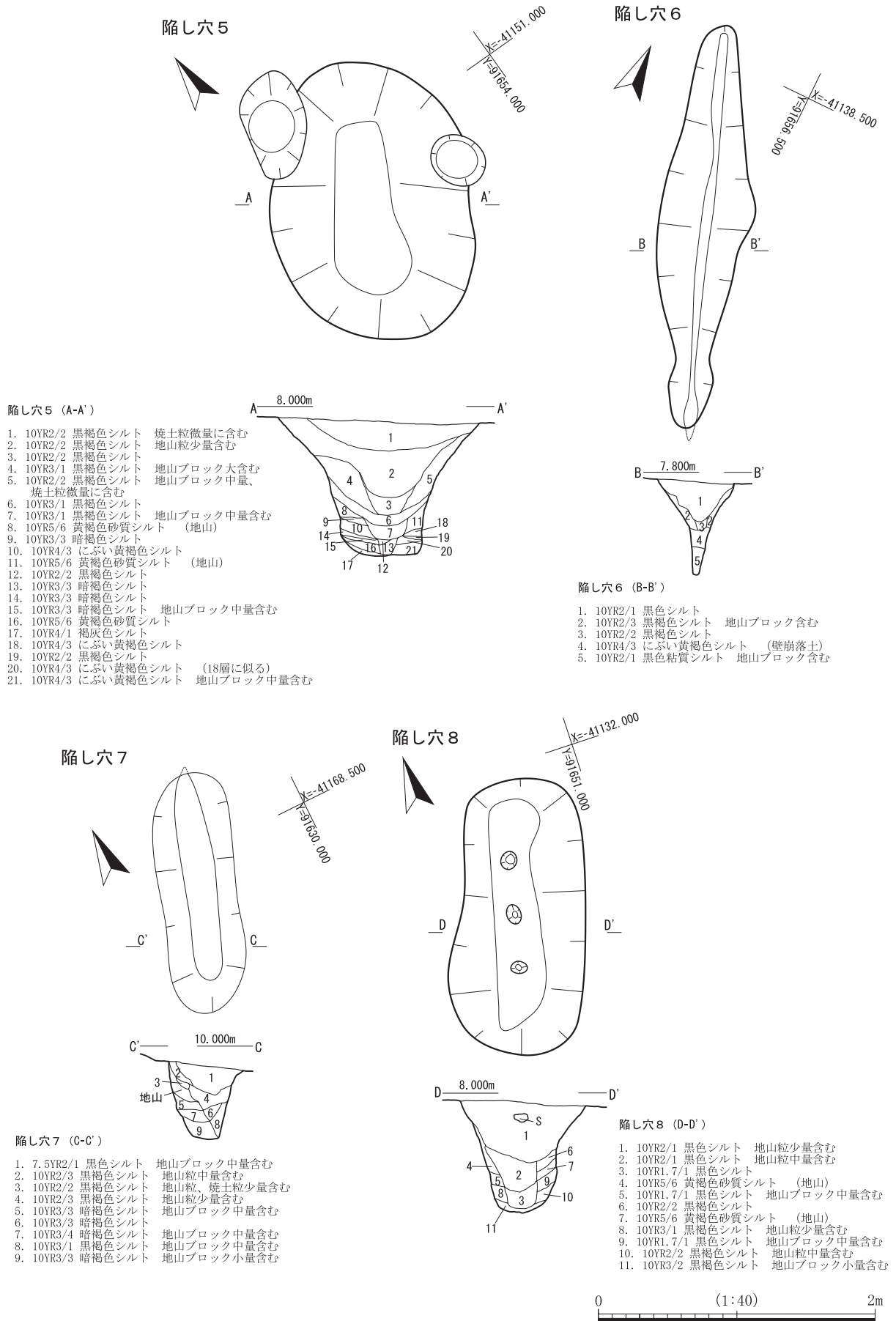


陥し穴 4 (D-D')

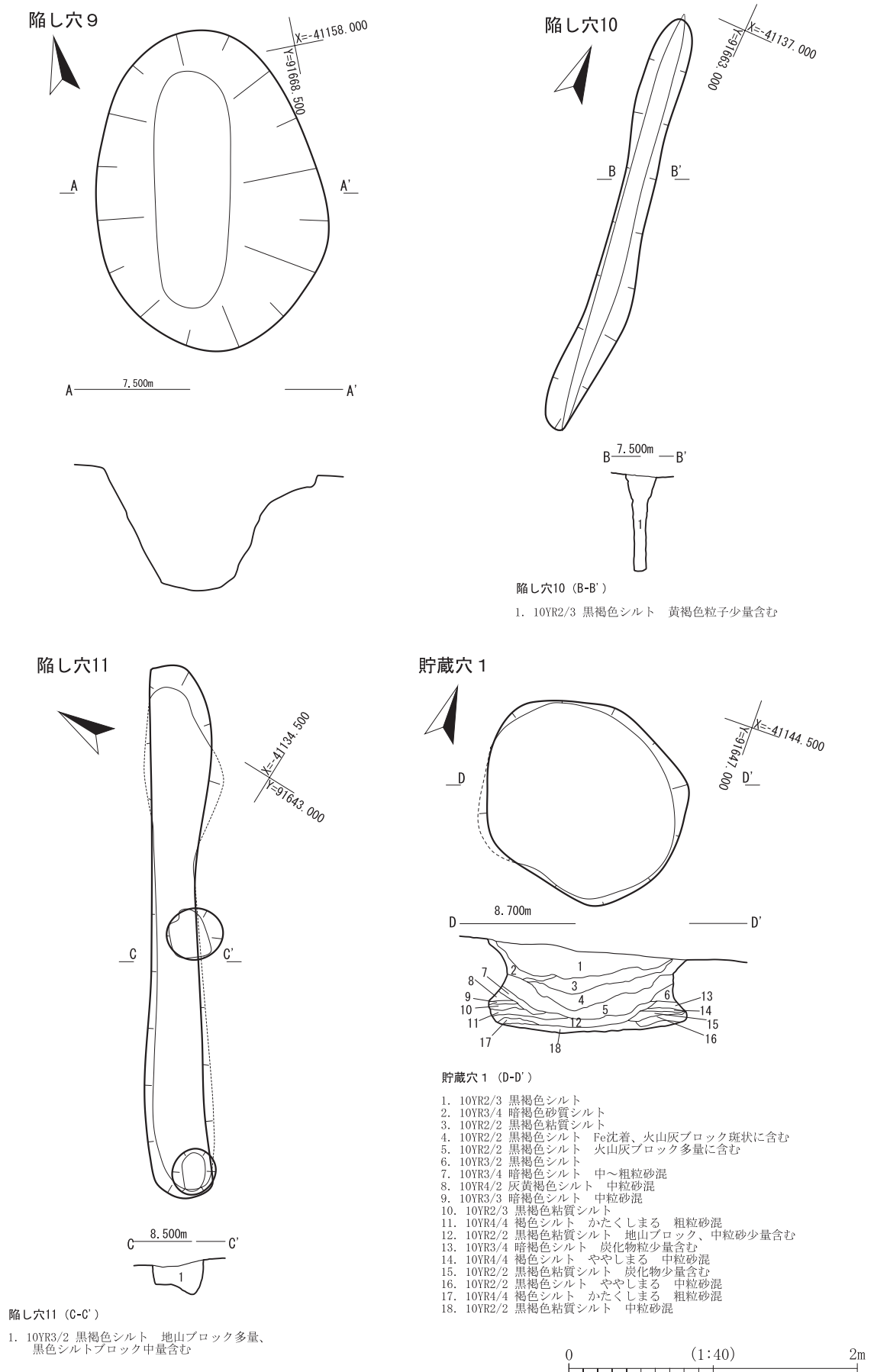
1. 10YR2/1 黒色粘質シルト (Fe沈着顕著)
2. 10YR2/3 黒褐色シルト やや粘質 粗粒砂多量に混



第2図 陥し穴 1～4



第3図 陥し穴5～8



第4図 陥し穴9～11・貯蔵穴1

**石器集積遺構 1 (第5図、写真図版9)**

平場3の石組炉1のやや南に位置し、遺物包含層中で検出した。形状およびサイズの似通った磨石8個が1箇所集中して出土した。上部の3個ほどを確認した面で掘り込み等のプラン検出を試みたが掘り込みは確認できず、さらに石の両脇断面を観察したが掘り込みは確認できなかった。しかし、8個の磨石はそれぞれの石同士がほぼ密着した状態で積み重なっており、周辺で同様の磨石は出土しなかった。このような出土状況からこれら8個の磨石は、何らかの意図でこの地点に集められ、そしてまとめ置かれたと判断できる。8個の磨石はいずれもほぼ全面に磨痕が認められるが、敲打痕は認められない点で共通する。

(箕輪・福島)

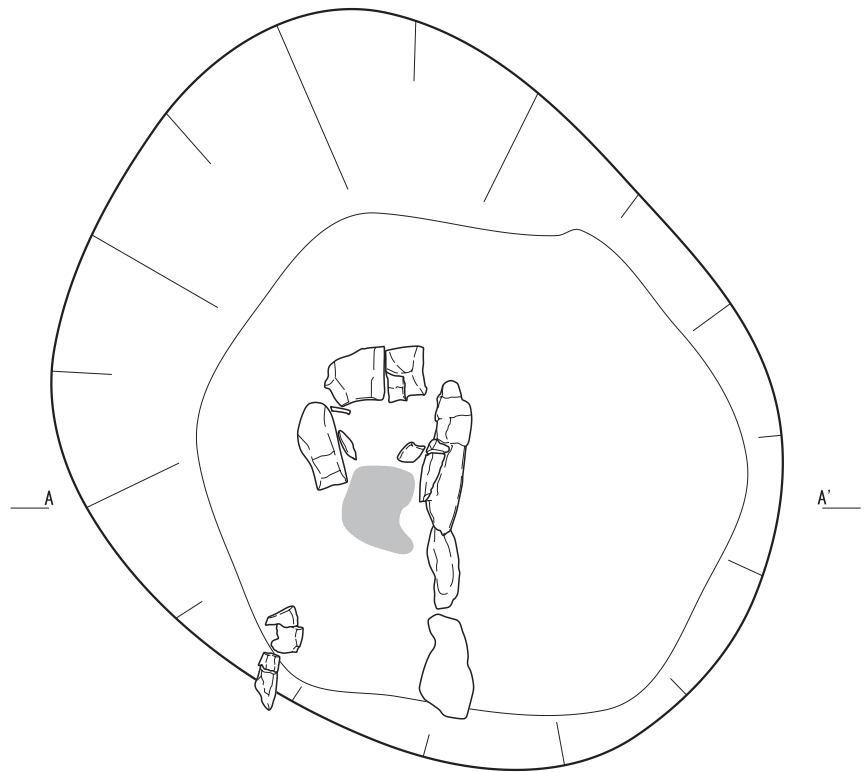
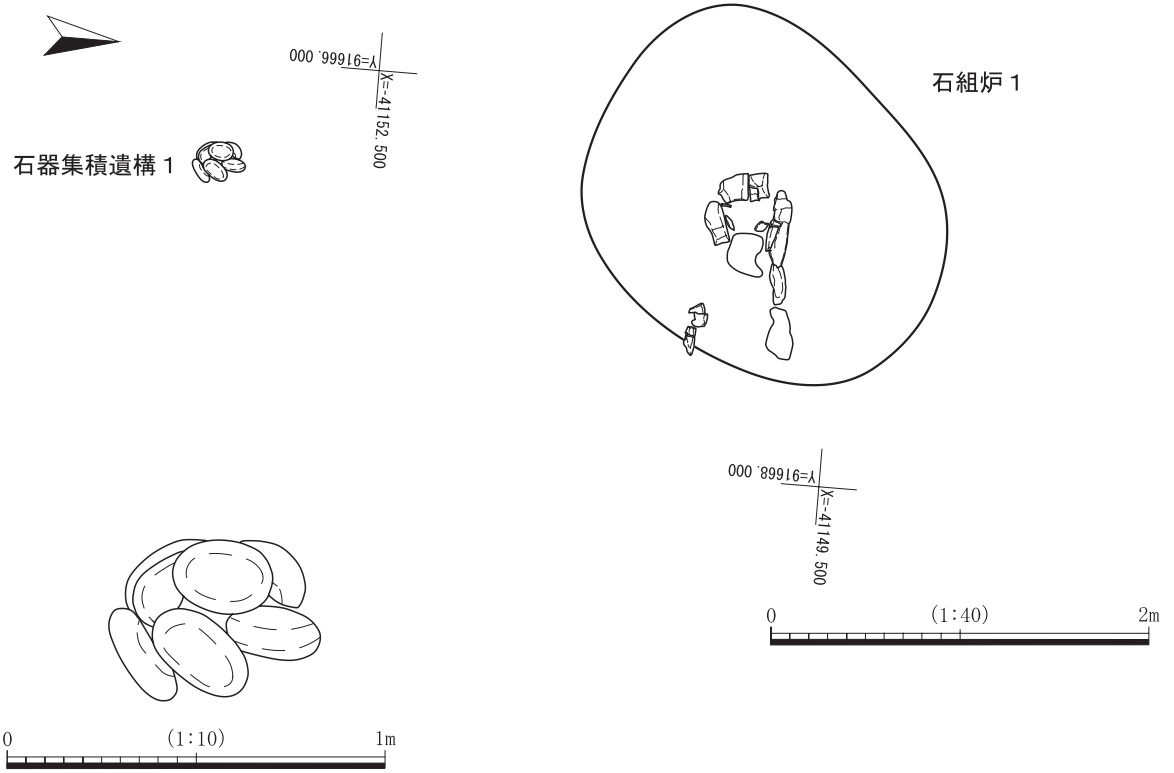
**土坑 1・2**

平場1で2基検出した土坑はそれぞれ近接しており、いずれも小規模な土坑である。土坑1は平面円形、土坑2は平面方形基調である。いずれの土坑も埋土に黒色土が認められるため縄文時代の遺構であると判断した。埋土には礫が含まれるが、出土遺物は皆無であるため、より詳細な時期を特定できない。2基ともに性格も含め小規模な土坑である以上のことは不明である。

(福島)

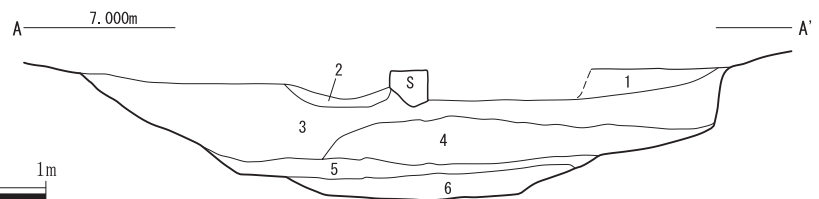
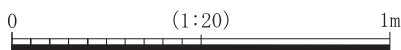
**(2) 縄文・弥生時代の遺物****縄文土器 (第6～10図、写真図版14～16)**

縄文土器は中期の土器を中心に約3箱出土した。そのうち代表的な縄文土器56点、弥生土器3点を掲載している。1～3は弥生中期の土器である。2は東北南部仙台平野の中期末～後期初頭の土器である。4～59は縄文時代中期の土器であり、大木8～10式段階に相当する。4は小形深鉢の口縁から体部片である。口縁部は肥厚し、体部の沈線区画内は充填縄文と思われる。5は浅鉢の口縁から体部片である。口縁部は平縁で横方向に平行の隆帯と沈線が施され、体部は渦巻文が形成されている。6は深鉢の体部片である。隆沈線で文様が施されている。7は深鉢の口縁から体部片である。口縁部に厚い隆帯と沈線が施されている。8は浅鉢の口縁から体部片である。口縁部は平縁で横方向に平行の隆帯と沈線が施され、体部は隆帯と沈線で曲線が施されている。9は小形深鉢の口縁部片である。隆帯で円形文が形成されている。10は小形深鉢の口縁から体部片である。体部には横方向に平行の沈線が施されている。11は小形深鉢の口縁から体部片である。口縁部は外反し無文帯であり、横方向に平行の隆沈線で境界が設けられている。12は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は隆帯と沈線で文様が施され、渦巻文が形成されている。13は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は隆帯と沈線で文様が施されている。14は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は隆帯と沈線で文様が施され、円形文が形成されている。15は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は肥厚し無文帯であり、横方向の隆帯で境界が設けられている。16は浅鉢の内湾する口縁部片である。一部剥離しているが、隆線に文様が施されている。17は深鉢の体部片である。縦方向に隆帯と沈線で文様が施されている。18は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は波状であり、突出部は隆帯と沈線で渦巻文が形成されている。体部は縦方向に隆沈線で文様が施されている。19は小形深鉢の口縁から体部片である。頸部に貫通孔が開けられる。20は深鉢の口縁から体部片で、文様は無く地文のみである。21は深鉢の口縁から体部片で、口縁部につけられた突起に隆帯と沈線が施され、突起頂部には渦巻文と思われるものが形成されている。突起に接して貫通孔が開けられる。22は小形深鉢の外反する口縁から体部片で、文様は無く地文のみである。23は浅鉢の内湾する口縁部片である。隆帯と沈線で文様が施されている。24は小形深鉢の口縁から体部片である。



石組炉 1 (A-A')

1. 10YR1.7/1 黒色シルト
2. 5YR4/6 赤褐色シルト
3. 10YR2/1 黒色粘質シルト
4. 10YR2/1 黒色粘質シルト 粘土ブロック、赤褐色シルトブロック含む 炭化物少量含む
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 帯状に地山ブロック含む
6. 10YR2/2 黒褐色シルト

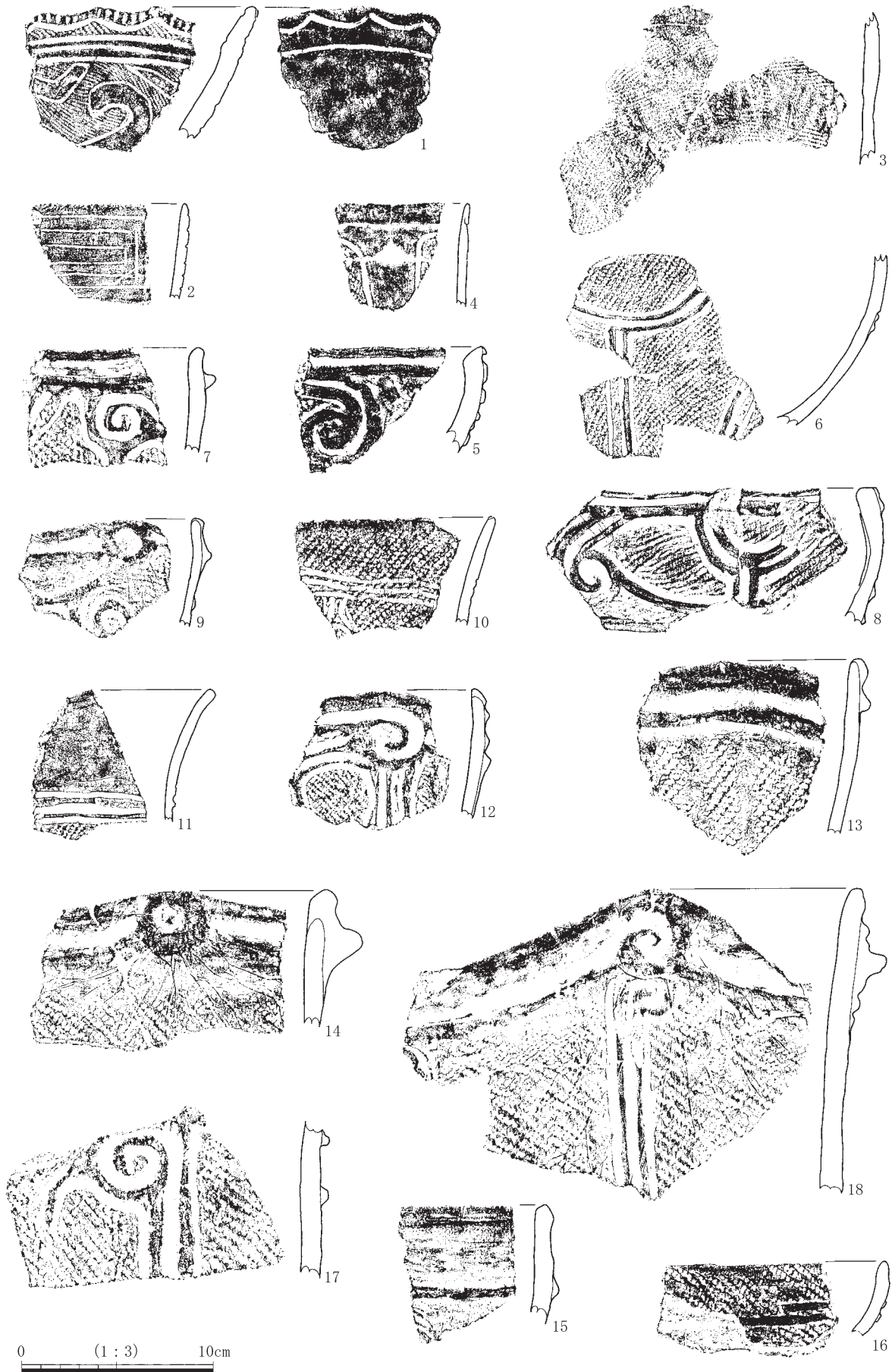


第5図 石器集積遺構・石組炉 1



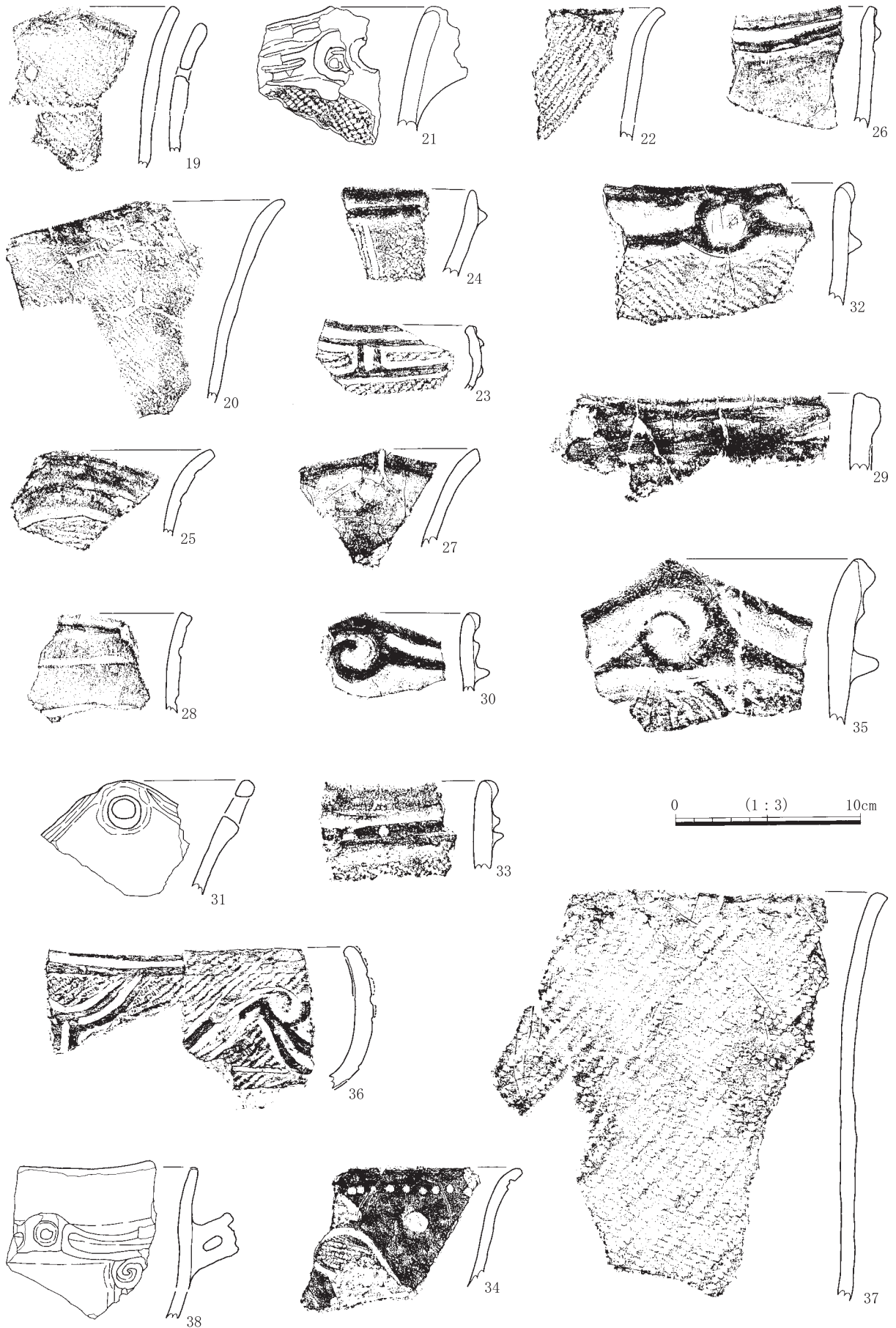
口縁部は体部に比べ薄く、隆帯と沈線で文様が施されている。25は小形深鉢の口縁から体部片である。口縁部は無文帯が設けられ、体部は沈線で文様が施されている。26は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は隆帯と沈線で文様が施され、頸部は無文帯である。27は深鉢の口縁部片で、無文帯である。28は深鉢の口縁から体部片で、地文磨り消し後に沈線で文様が施されている。29は浅鉢の口縁部片である。口縁部は肥厚し無文帯であり、口唇部は沈線が施されている。30は深鉢の口縁部片である。隆帯と沈線で文様が施され、渦巻文が形成されている。31は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は波状であり、地文は磨り消されている。突出部に貫通孔が開けられる。口唇部には沈線が施されている。32は深鉢の口縁から体部片である。隆帯と沈線で文様が施され、円形文が形成されている。33は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は肥厚し、頸部は横方向に平行の隆帯が施されている。34は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は磨り消し後、横方向に連続する竹管の刺突列が見られる。頸部には外側から指頭で押圧された円文があり、内面がわずかに隆起している。沈線の区画内は充填縄文と思われる。35は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は波状であり、突出部には隆帯と沈線で渦巻文が形成されている。36は浅鉢の口縁から体部片である。口縁部は平縁で、一部剥離しているが、横方向に平行の隆帯と沈線が施されている。体部の隆帯と沈線も剥離しているが、曲線が施されている。8と同一個体の可能性がある。37は深鉢の口縁から体部下半まで復元されている。文様は無く地文のみである。38は深鉢の口縁から体部片である。地文は磨り消されている。口縁部は装飾的な橋状の突起がつけられており、突起頂部には円形文が施されている。体部は隆帯と沈線で文様が施され、渦巻文が形成されている。39は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は波状であり、突出部は隆帯で渦巻文が形成されている。頸部は磨り消され無文帯になっており、横方向に平行の沈線で境界が設けられている。40は深鉢の口縁部片である。口縁部は波状であり、隆帯と沈線で文様が施され、突出部には渦巻文が形成されている。41は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は隆帯と沈線で文様が施されており、体部は地文のみである。42は深鉢の口縁から体部片である。大部分剥離しているが、厚い隆帯と沈線で文様が施され、渦巻文が形成されている。43は深鉢の口縁から体部片である。一部剥離しているが、隆帯と沈線で文様が施されている。44は深鉢の口縁から体部片である。隆帯と沈線で文様が施されている。45は深鉢の体部から底部片で、体部は文様無く地文のみである。底部には網代痕が見られる。46は小形深鉢の口縁から体部片である。口唇部に沈線が入る。口縁部は無文帯であり、横方向に平行の沈線で境界が設けられている。47は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は隆帯と沈線で文様が施され、体部は沈線で曲線が施されている。48は深鉢の体部から底部片である。沈線で縦方向に文様が施され、体部下端まで延びている。49は小形深鉢である。口縁部は外反し無文帯であり、横方向に平行の沈線で境界が設けられている。体部は沈線によって曲線が施されている。50～56はいずれも体部から底部片である。50は体部に撚糸文が施されている。51、54、55、56は地文のみである。52は底部には網代痕が見られる。53は体部に隆沈線が施され、体部下端まで延びている。57は深鉢の口縁から体部片である。口縁部は地文磨り消し後、棒状工具の先端による刺突列が横方向に連続する。同一工具を使用し、沈線で「J」の字形に区画されたその内部は縄文が磨り消されており、文様の頂部には指頭で押圧された円文がみられる。押圧は内面にも影響を及ぼしており、外面と対応してわずかに内側へ凹んでいる。58は深鉢の体部から底部片で、加飾や沈線などの文様は無く地文のみである。59は大形深鉢の口縁から体部片である。寸胴で筒形の形態であるが、残存する体部下端はわずかに外方へ張り出しており、体部中位がこの土器の最大径となるようである。口縁部には無文帯がみられ、横方向の沈線で境界が設けられている。体部は縦方向に綾絡文が施されている。

(箕輪)

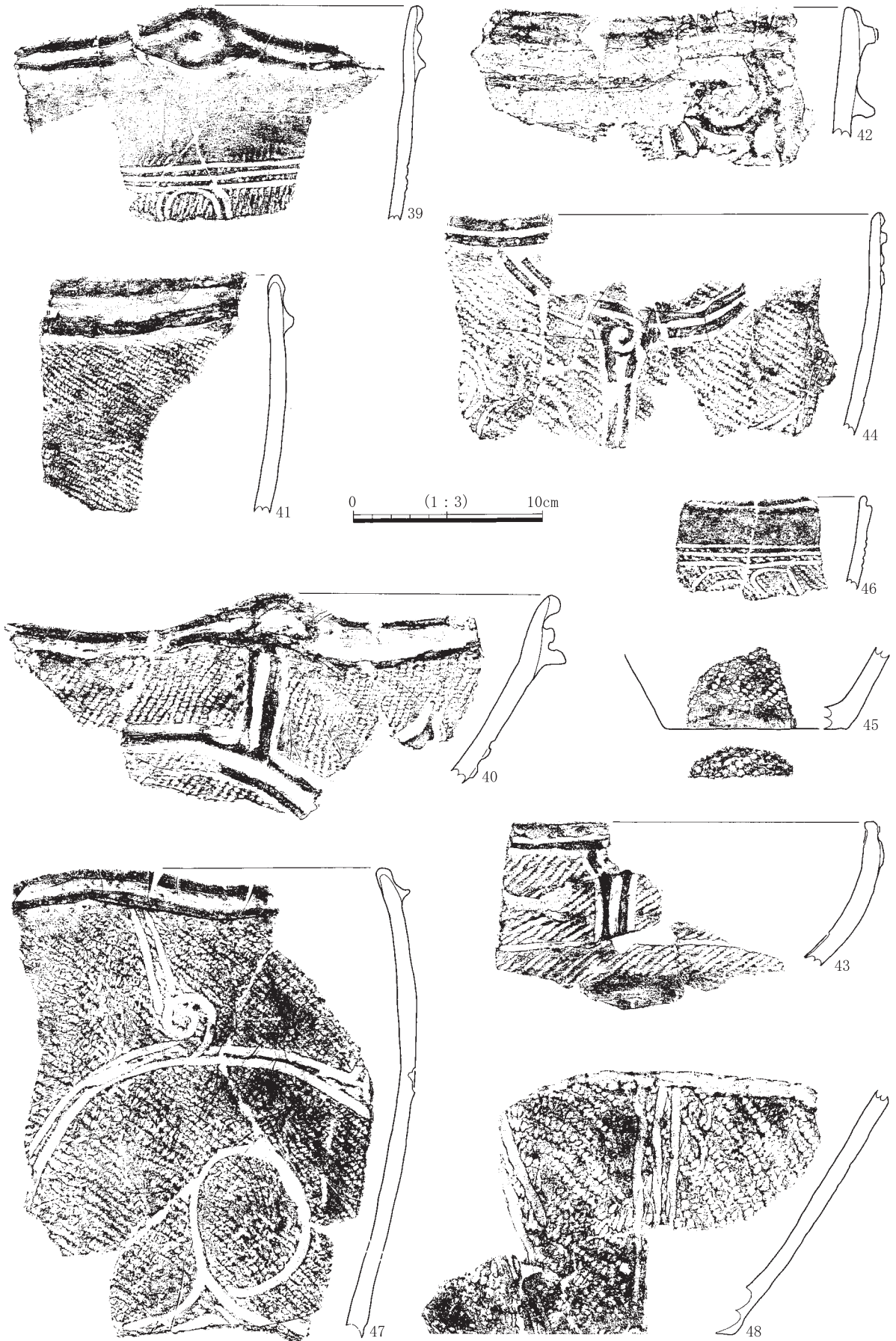


第6図 弥生土器（1～3）・縄文土器（4～18）

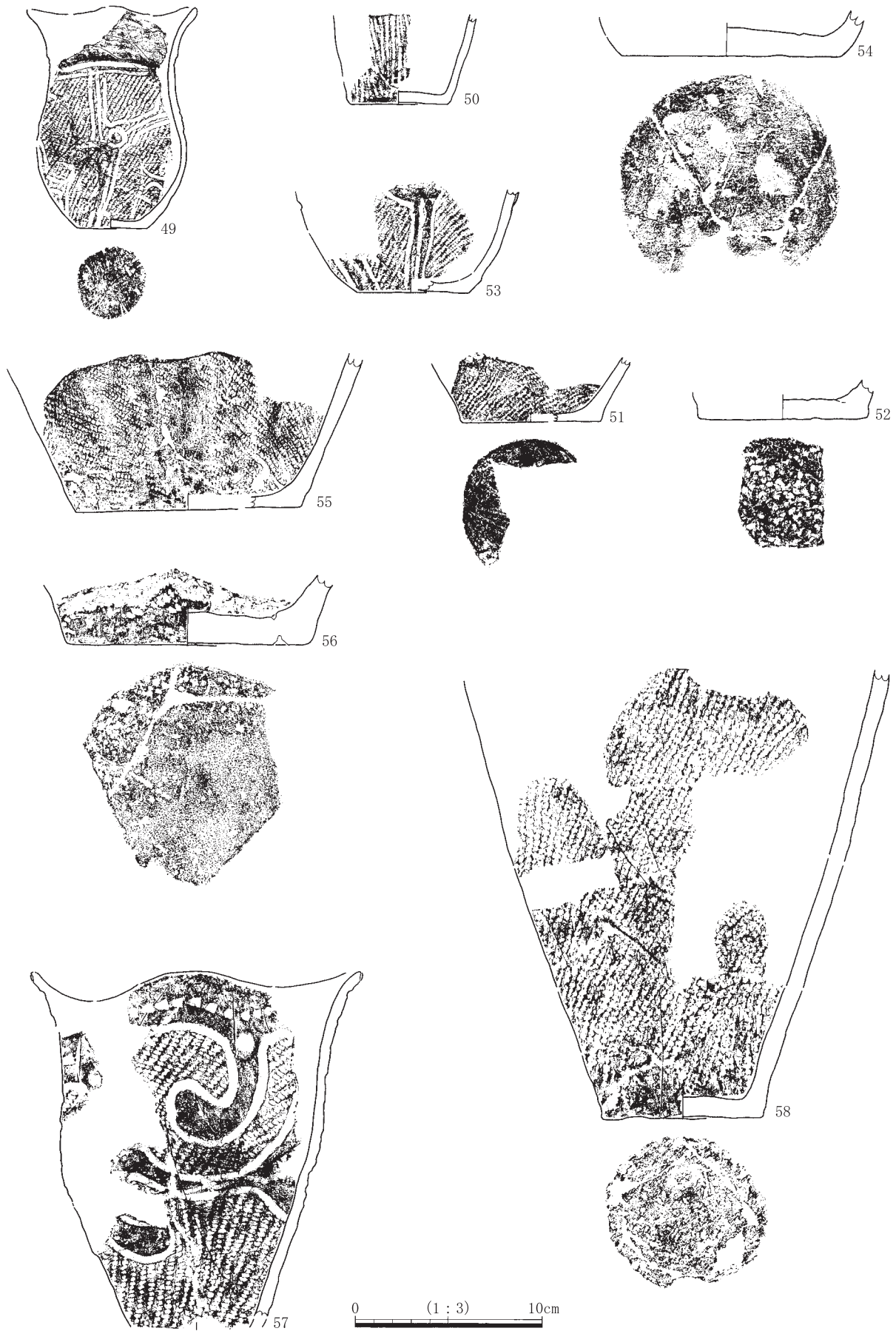




第7図 縄文土器 (19~38)

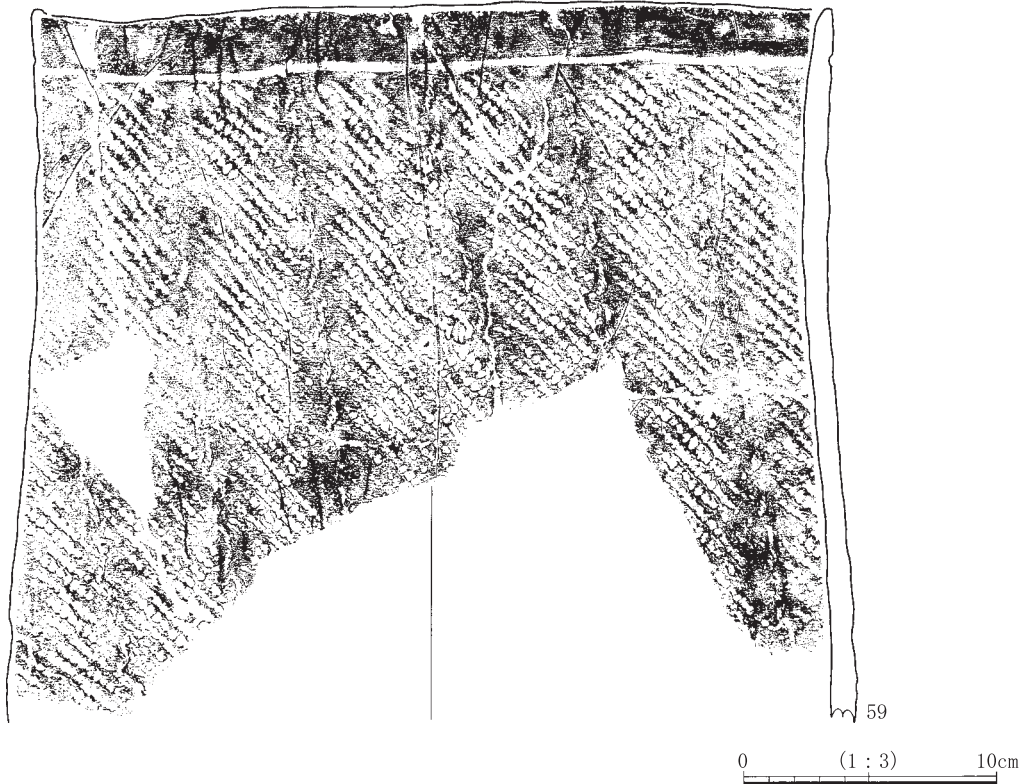


第8図 縄文土器 (39~48)



第9図 縄文土器 (49~58)



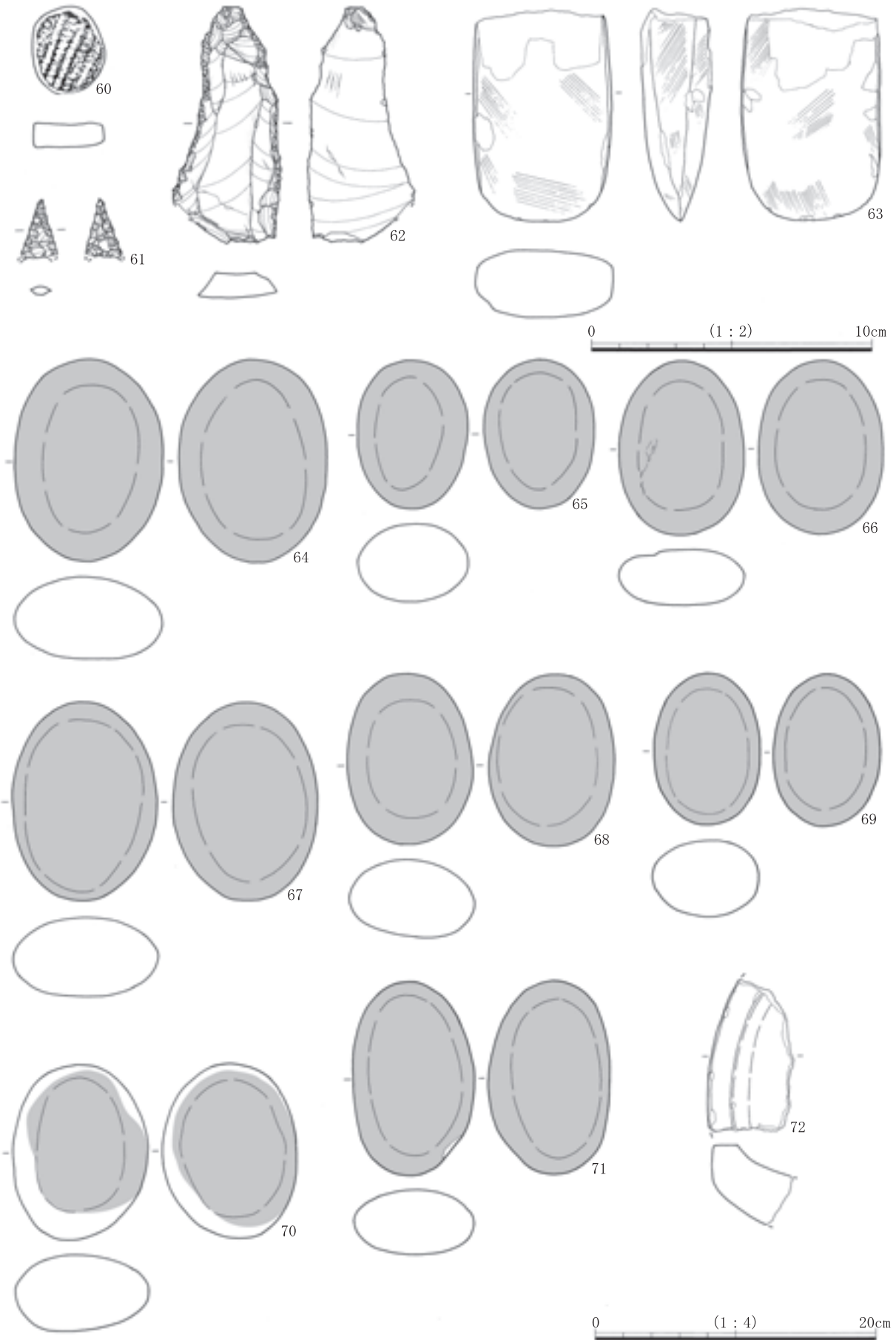


第10図 縄文土器 (59)

## 土製品・石器・石製品 (第11図、写真図版17)

60は土器片を再加工した土製円盤である。単節の縄文が外面に施された土器片を楕円形に再加工した円盤である。本来の土器破断面に該当する側縁は全周するように磨痕が明瞭であり、再加工を物語っている。61は平場3遺構検出面で出土した頁岩製の石鏃である。二等辺三角形で無茎の石鏃である。62は遺物包含層より出土した頁岩製のスクレイパーである。両側縁に調整が施されている。62は蛇紋岩製の磨製石斧である。基部は欠損している。63～70はすべて石器集積遺構1よりまとめて出土した磨石である。いずれも形の整った楕円形であり、表面は滑らかである。大きさの差異は多少あるが、突出するサイズのものはない。使用された磨石かどうか肉眼では判断できないが、少なくとも明瞭で蓋然性の高い敲打痕は認められない。8個の磨石を一箇所に集め置いた理由はわからないが、意図的に同一形状で同一サイズのものを集積したものと考えられる。71は近世の柱穴より出土した石皿片である。出土遺構は近世であるが、縄文時代の石皿であると考えられ、何らかの理由で後世の遺構に混入した遺物である。石皿縁部は幅約2cm、高さ約1cmの突出である。皿部表面は滑らかである。

(福島)



第11図 土製品 (60) ・石器 (61~72)



第1表 田鎖遺跡掲載遺物一覧（縄文土器）（ ）復元値、[ ]残存値、その他最大値

掲載No.	種別	出土遺構・位置・層位	おもな文様	寸法 (cm)			備考
				口径	器高	底径	
1	弥生土器	遺構外	沈線・充填 (RL)	-	[7.8]	-	
2	弥生土器	遺構外 (平場2)	沈線	-	[5.2]	-	
3	弥生土器	遺構外 (平場3)	沈線・地文 (RL)	-	[10.2]	-	
4	縄文土器深鉢	カマド状遺構6埋土	沈線・磨消 (RL)	-	[5.7]	-	
5	縄文土器浅鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線	-	[5.5]	-	
6	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (RL)	-	[10.9]	-	
7	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (LR)	-	[6.2]	-	
8	縄文土器浅鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (擦糸?)	-	[7.5]	-	
9	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (RL)	-	[6.3]	-	
10	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	沈線・地文 (RL)	-	[7.0]	-	
11	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	沈線・地文 (RL)	-	[8.0]	-	
12	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (LR)	-	[6.1]	-	
13	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (RL)	-	[9.8]	-	
14	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (LR)	-	[7.9]	-	
15	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線	-	[7.1]	-	
16	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (LR)	-	[4.5]	-	
17	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (LR)	-	[9.5]	-	
18	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線・地文 (LR)	-	[16.3]	-	
19	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	地文 (LR)	-	[8.9]	-	補修孔。
20	縄文土器深鉢	遺構外 (平場2)	地文 (LR)	-	[11.9]	-	
21	縄文土器深鉢	I W 6 j検出面	隆沈線・地文 (LR)	-	[7.5]	-	
22	縄文土器深鉢	石組炉1周辺検出面	隆沈線・地文 (RL)	-	[7.4]	-	
23	縄文土器浅鉢	石組炉1周辺検出面	隆沈線・地文 (RLR)	-	[3.8]	-	
24	縄文土器深鉢	遺構外 (平場3)	隆沈線	-	[5.0]	-	
25	縄文土器浅鉢	遺構外 (平場3)	沈線・磨消 (LR)	-	[5.5]	-	

2 遺構と遺物

第2表 田鎖遺跡掲載遺物一覧（縄文土器） ( ) 復元値、[ ] 残存値、その他最大値

掲載No.	種別	出土遺構・位置・層位	おもな文様	寸法 (cm)			備考
				口径	器高	底径	
26	縄文土器深鉢	石組炉1周辺検出面	隆沈線	-	[6.9]	-	
27	縄文土器深鉢	石組炉1周辺検出面	沈線・磨消 (RL)	-	[6.1]	-	
28	縄文土器深鉢	石組炉1周辺検出面	沈線	-	[5.6]	-	
29	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	隆沈線	-	[5.1]	-	
30	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	隆沈線	-	[4.5]	-	
31	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	隆沈線	-	[6.4]	-	円孔突出部。
32	縄文土器深鉢	I X9d検出面	隆沈線・地文 (LR)	-	[7.8]	-	
33	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	隆沈線・地文 (LR)	-	[5.3]	-	
34	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	刺突列・沈線・充填 (LR)	-	[7.8]	-	
35	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	隆沈線	-	[8.1]	-	
36	縄文土器深鉢	石組炉1埋土	隆沈線・地文 (RL)	-	[7.2]	-	
37	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	地文のみ (RL)	-	[22.3]	-	
38	縄文土器深鉢	遺構外(平場3～傾斜面)	隆沈線	-	[7.5]	-	内外面丁寧なミガキ補修孔。
39	縄文土器深鉢	遺構外	隆沈線・地文 (撚糸)	-	[12.1]	-	
40	縄文土器深鉢	遺構外	隆沈線・地文 (RL)	-	[12.1]	-	
41	縄文土器深鉢	平場1検出面	隆沈線・地文 (LR)	-	[12.9]	-	
42	縄文土器深鉢	平場1検出面	隆沈線・地文 (RL)	-	[9.9]	-	
43	縄文土器深鉢	石組炉1周辺検出面	隆沈線・地文 (RL)	-	[9.9]	-	
44	縄文土器深鉢	石組炉1周辺検出面	隆沈線・地文 (LR)	-	[10.3]	-	
45	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	地文のみ (RL)	-	[4.4]	(9.8)	
46	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	沈線・地文 (LR)	-	[5.5]	-	
47	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	隆沈線・沈線・地文 (LR)	-	[26.1]	-	
48	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	沈線・地文 (LR)	-	[13.1]	-	
49	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	沈線・地文 (RL)	(9.1)	[11.8]	3.7	
50	縄文土器深鉢	遺構外(平場3)包含層	地文のみ (撚糸)	-	[4.9]	5.2	

第3表 田鎖遺跡掲載遺物一覧（縄文土器） ( )復元値、[ ]残存値、その他最大値

掲載No.	種別	出土遺構・位置・層位	おもな文様	寸法 (cm)			備考
				口径	器高	底径	
51	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	地文のみ (RL)	-	[3.4]	(7.4)	
52	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	不明	-	[2.6]	(8.8)	底部網代痕。
53	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	隆沈線・地文 (RL)	-	[5.5]	5.9	
54	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	不明	-	[2.5]	11.8	
55	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	地文のみ (LR)	-	[8.2]	(12.0)	
56	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	地文のみ (RL)	-	[3.7]	(13.0)	
57	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	刺突列・沈線・地文 (RL)	(17.7)	[19.0]	-	
58	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	地文のみ (RL)	-	[23.8]	8.5	
59	縄文土器深鉢	遺構外（平場3）包含層	沈線・地文（綾絡LR）	(31.5)	[28.8]	-	

第4表 田鎖遺跡掲載遺物一覧（土製品・石器・石製品） [ ]残存値、その他最大値

掲載No.	種別	器種	出土遺構・位置・層位	寸法 (cm)			重さ (g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
60	土製品	土器片円盤	平場3検出面	3.2	2.7	0.9	8.2	
61	石器	石鏃	平場3検出面	2.2	1.3	0.3	0.7	頁岩
62	石器	スクレイパー	平場3包含層	8.6	4.1	1.1	31.5	頁岩
63	石器	磨製石斧	平場3包含層	7.6	5.0	2.5	155.7	蛇紋岩
64	石器	磨石	石器集積遺構1	7.3	5.4	3.0	1316.3	
65	石器	磨石	石器集積遺構1	5.4	4.0	2.8	676.4	
66	石器	磨石	石器集積遺構1	6.3	4.5	2.1	660.2	
67	石器	磨石	石器集積遺構1	7.2	5.2	2.9	1218.4	
68	石器	磨石	石器集積遺構1	6.2	4.6	2.9	893.9	
69	石器	磨石	石器集積遺構1	5.5	3.8	2.7	638.6	
70	石器	磨石	石器集積遺構1	6.3	4.9	2.7	946.2	
71	石器	磨石	石器集積遺構1	7.0	4.5	2.4	833.5	
72	石製品	石皿	掘立柱建物7柱穴1埋土	[5.5]	[3.0]	[2.8]	330.5	近世遺構混入遺物。

(3) 古代の遺構

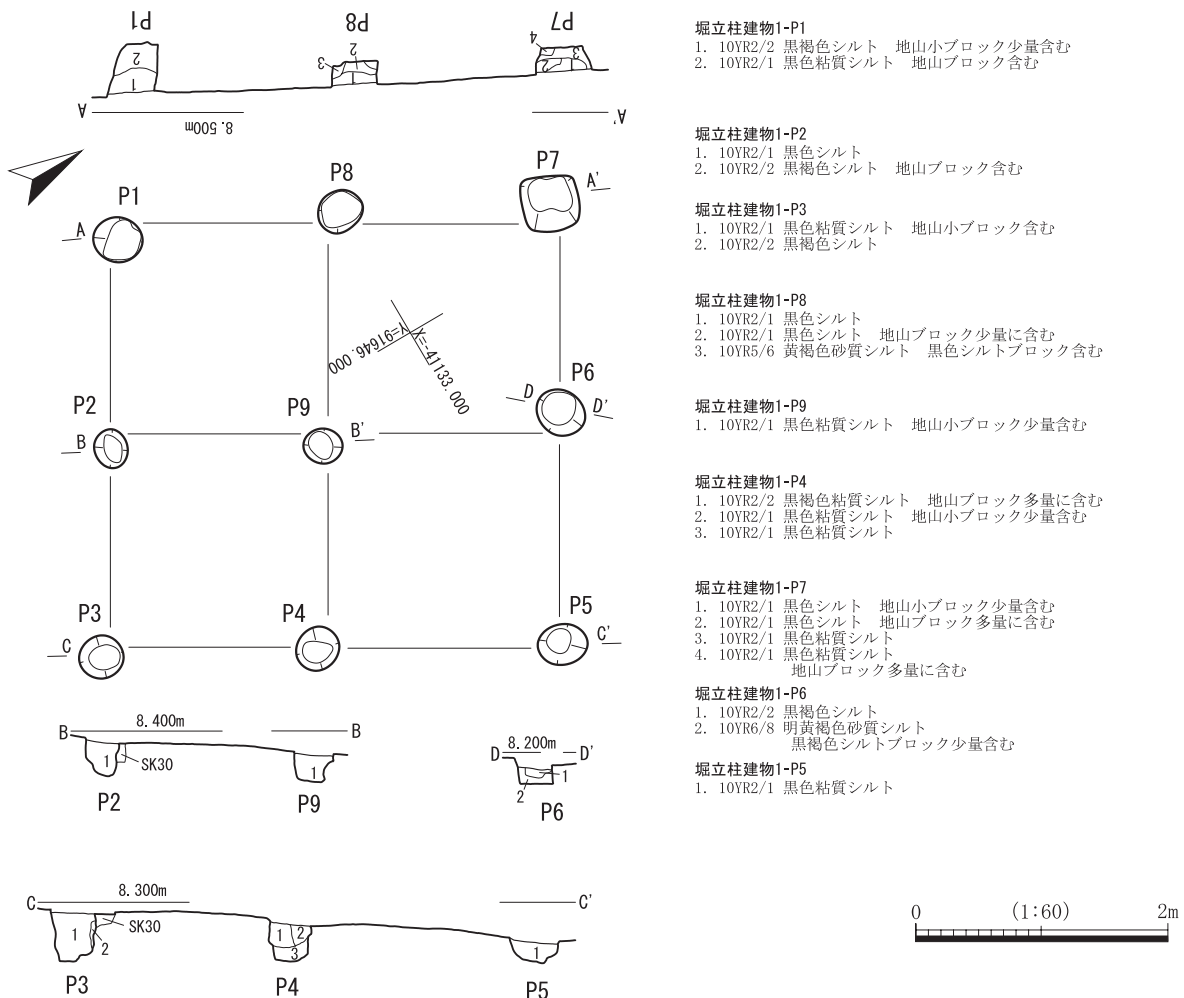
掘立柱建物 1 (第12図、写真図版10)

2×2間の総柱建物であり、その他の建物とは軸角や柱間寸法が異なり、古代によくみられる平面形態であることから古代(平安時代)の掘立柱建物であると推測した。建物は平場3北側の緩斜面地に立地する。建物の平面形態は方形を基調とすると考えられるが、軸角は正方位ではなく、約45°

(N-24° -W)の傾きである。この軸角は他の近世の建物とは異なる点からも古代の可能性を導き出す証左となる。建物西側に配されている2個の柱穴が縄文時代の陥し穴11を切っている。柱穴は計9個からなり、いずれも埋土は黒色および黒褐色の色調を帯びたシルトである。P7の平面は隅丸方形であるが、その他の柱穴はいずれも平面円形である。P1、P2、P3の各柱穴の並びは1.7mの等間隔であるが、P5、P6、P7については1.9m、1.65mとやや不揃いである。中央のP9は床束の可能性も考えられるが、その他の柱穴と大きく異なる特徴は見出せない。柱穴から遺物は出土していない。建物の性格は平面方形の総柱建物であることから倉庫の可能性が考えられる。

また、この遺構以外で古代の遺構である可能性が考えられるものに溝1がある。掘立柱建物1と同じく平場3に位置するが、約15m南である。土師器等古代の遺物が出土したが、その機能および性格は不明である。掘立柱建物1との関係も不明である。

(宮内)



- 掘立柱建物1-P1**  
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山小ブロック少量含む  
 2. 10YR2/1 黒色粘質シルト 地山ブロック含む
- 掘立柱建物1-P2**  
 1. 10YR2/1 黒色シルト  
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック含む
- 掘立柱建物1-P3**  
 1. 10YR2/1 黒色粘質シルト 地山小ブロック含む  
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 掘立柱建物1-P8**  
 1. 10YR2/1 黒色シルト  
 2. 10YR2/1 黒色シルト 地山ブロック少量に含む  
 3. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 黒色シルトブロック含む
- 掘立柱建物1-P9**  
 1. 10YR2/1 黒色粘質シルト 地山小ブロック少量含む
- 掘立柱建物1-P4**  
 1. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 地山ブロック多量に含む  
 2. 10YR2/1 黒色粘質シルト 地山小ブロック少量含む  
 3. 10YR2/1 黒色粘質シルト
- 掘立柱建物1-P7**  
 1. 10YR2/1 黒色シルト 地山小ブロック少量含む  
 2. 10YR2/1 黒色シルト 地山ブロック多量に含む  
 3. 10YR2/1 黒色粘質シルト  
 4. 10YR2/1 黒色粘質シルト 地山ブロック多量に含む
- 掘立柱建物1-P6**  
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト  
 2. 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト 黒褐色シルトブロック少量含む
- 掘立柱建物1-P5**  
 1. 10YR2/1 黒色粘質シルト

第12図 掘立柱建物 1

## 溝 1

平場 3 上部平坦面に位置する。概ね東西方向に伸び、不明遺構 1 を切る。溝の線形は緩やかに弧を描く。溝は斜面下方へ向け延びるが、傾斜が付くと消滅する。埋土から古代の遺物が複数出土したが、時期を特定できない。不明遺構にも古代の遺物が含まれているためこれらが混入した可能性も考えられる。

## 不明遺構 1

平場 3 上部平坦面に位置する。溝 1 に切られる。楕円形の土杭が二つ重なるように検出されたが、切り合いが認められず、一体のものであったと考えられる。埋土から古代の土器類が出土したが、大半が細片であった。機能等は不明である。

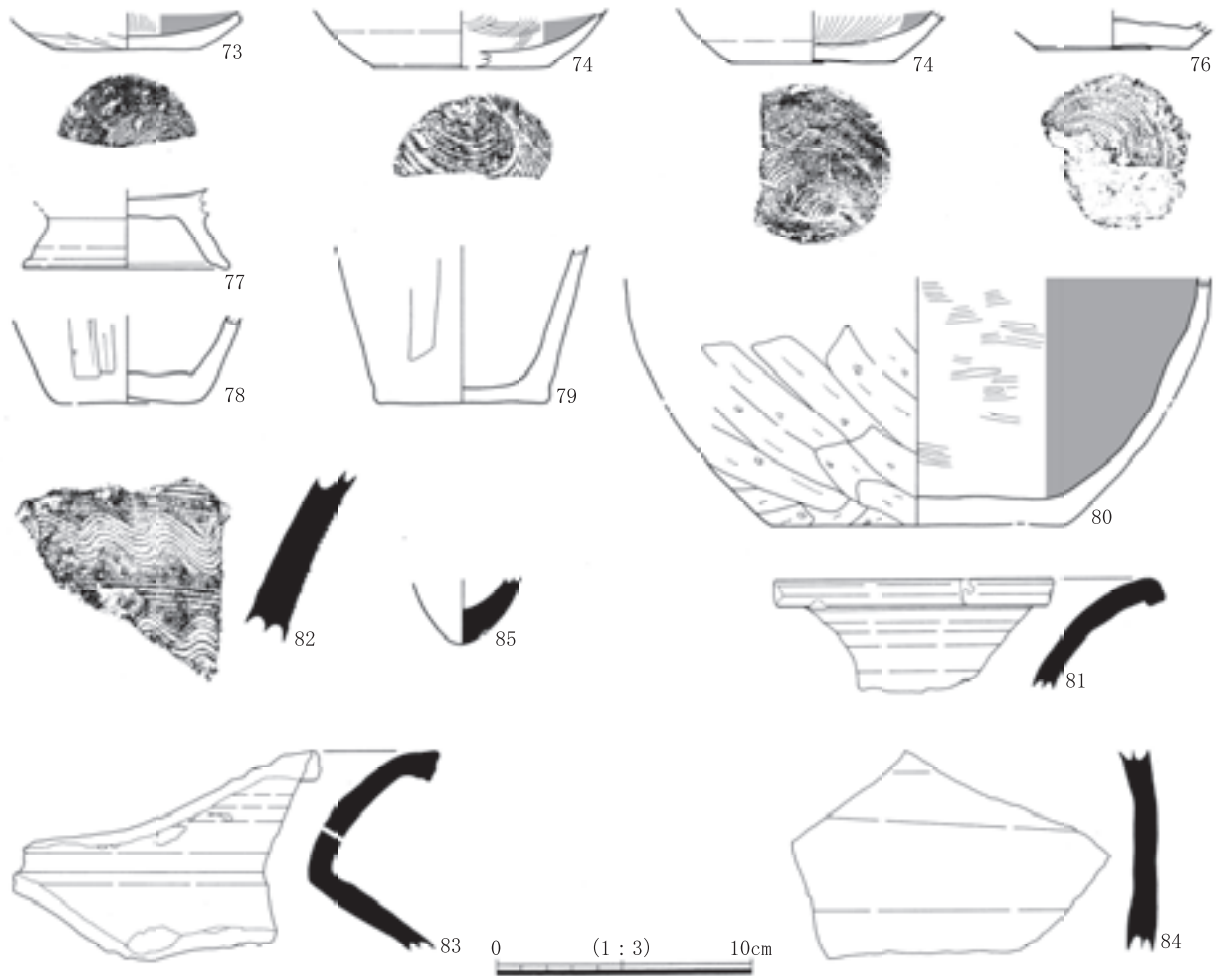
## (4) 古代の遺物

### 土師器・須恵器 (第13図、写真図版18)

調査では土師器と須恵器が小コンテナ約0.5箱出土した。これらのうち、13点(73~85)の土師器および須恵器を掲載した。73~75は土師器坏の底部片である。いずれも外面はナデ、内面はヘラミガキおよび黒色処理が施され、底部は回転糸切り痕が認められる。73のみ底部外周および体部下端にヘラケズリが施されており、糸切り痕もこれによって消されている。74の外面は少し赤みのさす褐色を呈し、内面には放射状のヘラミガキがみられる。75内面の放射状ヘラミガキはより明瞭に視認できる。76は須恵器坏の底部片である。底部外面には回転糸切り痕がみられ、内外面ともにナデ調整が施されている。77は土師器高台付坏の高台部片である。内面はヘラミガキ調整と黒色処理が施されており、高台部は丁寧なナデ調整が認められる。その他の高台の形状から土師器坏よりもやや新出の要素が認められ、10世紀を前後する時期のものであると考えられる。78・79は土師器甕の体部下半から底部にかけての破片である。78は体部外面にはタテ方向のヘラケズリ調整がみられる。胎土は粗く、直径2~3mmの砂粒が多く含まれている。内面は外面に比べ粗雑な調整であり、口径が小さく工具を自由に動かし難い形状だったのかもしれない。79は体部外面に工具によるタテ方向の調整が認められる。工具の動きによる砂粒の移動は認められないが、乾燥がある程度進んだ状態での工具使用の調整であることからヘラケズリと同じ作用を目したのものであると推測される。80は土師器鉢の体部下半から底部片である。体部は丸みを帯び、底部は回転糸切り後、ヘラケズリ調整したとみられる。体部はナデが施された後、外面は斜位だがタテ方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキが施されたものと考えられる。内面は黒処理されており、底部と体部下端には土器焼成時に生じた黒斑がみられる。81は須恵器甕の口縁部片であると考えられる。外反し、口縁端部は方形の断面形態を有する。内面上半には焼成時の降灰が確認でき、その状況から大きく外に開く形態であったことが推測される。82は甕の口縁部片である。外面には波状文と平行する圏線が上下交互に巡る。圏線の一部はナデによって消されており、圏線によって区画帯が定められた後に、その区画帯を波状文で埋める手法が採用されていると推測される。ナデによって消された部分は区画帯上下を広く確保するための所作であるとみられる。また、内面にはわずかに降灰が確認でき、その状況から天地と口縁部のおよその傾きが推測される。頸部の文様から考えて、7~8世紀の須恵器である可能性が考えられ、県内で須恵器生産が開始される以前の土器である。したがって、宮城地域など南の地域で生産されたものが搬入されたということが考えられる。83は須恵器甕の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は端面を持ちながら屈曲する。外面には複数方向のタタキ、内面には当て具の痕跡が確認できる。内外面ともに降灰がみられ、特に頸部と胴部の接合部分の凹みに厚く掛かる。降灰の様子



2 遺構と遺物



第13図 古代の土器 (73~85)

第5表 田鎖遺跡掲載遺物一覧 (土師器・須恵器) ( ) 復元値、[ ] 残存値

掲載No	種別	器種	出土遺構・位置・層位	おもな調整	寸法 (cm)			備考
					口径	器高	底径	
73	土師器	坏	不明遺構 1	ナデ・ミガキ	-	[1.5]	(5.8)	底部・体部下端回転ヘラケズリ
74	土師器	坏	不明遺構 1	ナデ・ミガキ	-	[2.2]	(6.4)	
75	土師器	坏	不明遺構 1	ナデ・ミガキ	-	[1.5]	6.4	
76	土師器	坏	不明遺構 1	ナデ	-	[1.2]	(6.0)	
77	土師器	高台付坏	不明遺構 1	ナデ	-	[3.1]	(8.1)	
78	土師器	甗	不明遺構 1	ケズリ	-	[3.4]	(5.0)	
79	土師器	甗	不明遺構 1	ケズリ	-	[6.2]	(6.6)	
80	土師器	鉢	不明遺構 1	ケズリ・ミガキ	-	[9.8]	(11.6)	
81	須恵器	甗	遺構外 (平場 3)	ナデ	-	[4.5]	-	
82	須恵器	甗	遺構外 (平場 3)	ナデ	-	[8.2]	-	大甗頭部片。圏線と波状文。
83	須恵器	壺	遺構外 (平場 3)	ナデ	-	[4.3]	-	
84	須恵器	壺	遺構外 (平場 3)	ナデ	-	[8.2]	-	会津大戸窯産
85	須恵器	不明	P43埋土	ナデ	-	[2.7]	-	

から焼成時に正置された状態での窯詰めが想定される。全体に青灰色の色調で堅く焼き締まっている。84は須恵器甕の体部の一部とみられる。胎土に石英を含み、全体的に砂粒が多い。これら砂粒の表面は焼成時の高温によって熔融し、丸みを帯びている。そのため外面はガラス質のコーティングが施されたように光沢を帯びる。色調は白味を帯びた淡い灰色を呈し、その他の須恵器類とは大きく異なる。胎土・色調・焼成具合を観察すると岩手県内の製品とはほど遠い外貌であり、会津大戸窯の製品である可能性が考えられる。外面は不定方向にヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。

(船渡)

### (5) 中・近世の遺構

#### 掘立柱建物2 (第14図、写真図版10)

平場2北西に位置する梁行2間、桁行3間の掘立柱建物である。田鎖館跡とは現道を挟んで接しているエリアである。検出面は平坦で、露出したIV層およびV層である。これより上位の層位は地形改変のため失われている可能性が高い。柱穴は10個からなり、いずれも浅いことから建物廃絶後に大幅な削平および地形改変がおこなわれたものと考えられる。

軸角はN-16° -Wであり、規模は桁行5.3m×梁行3.7m、面積は約20㎡である。柱穴はP1からP10で構成されている。桁行方向における柱間の寸法は概ね1.7~1.8mの間で収斂している。隅柱となるP1、P4、P6、P9のうちP4以外は深く掘られ、柱痕跡もP6とP9は明瞭に確認されている。

P7底面中央で銭貨1枚が出土した。底面に張り付くように出土したことから、この柱穴での地鎮等祭祀のための埋納行為であると考えられる。出土した銭貨は銅銭で銭文は、平安通寶と判読可能である。非常に出土事例の少ない銭種であるが、現段階では16世紀末~17世紀前半の鑄造であると考えられている。

建物の平面形態および規模、出土した銭貨から推測して、16世紀末頃の掘立柱建物であると考えられる。近世の掘立柱建物とは柱間寸法が異なる点においても中世の掘立柱建物である可能性が高い。今回の調査区内では同時期の遺物は散見されるが、建物等の遺構は認められないため、田鎖館跡に関連する建物である可能性が考えられる。また、周辺には同規模の柱穴が存在することから現道下に展開する同時期の掘立柱建物が存在する可能性があることを付記しておく。

(福島)

#### 掘立柱建物3 (第15図、写真図版11)

平場3の北端に位置する梁行2間、桁行3間の掘立柱建物である。その他の遺構との重複関係は認められないが、建物内外に多くの柱穴が検出された。

軸角はN-56° -Eであり、建物規模は梁行約4m、桁行約6m、平面積は約24㎡である。建物はP1からP11の11個の柱穴で構成される。しかし、P11はP2-P8の中間に位置し、束柱の可能性も考えられるが、梁行方向の間仕切りの可能性も考えられる。

柱穴の平面形態は円形であり、円筒状を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴内部には柱根が残るものも多く、柱根そのものは腐食しているが、木材が柱痕跡の下部や側面に確認できた柱穴も少なくない。残存する柱材はいずれもクリである。埋土は北側のP1~P4では暗灰褐色土が主体であり、南側のP6~P9では暗灰褐色土、黒褐色土等と地山の黄褐色土が混在する土層であり、ほとんどは版築状に突き固められた埋土である。P7の検出時に寛永通寶が出土し、柱穴の埋土2層上面より同じく寛永通寶が出土している。

建物の平面規模および出土した銭貨から推測すれば、近世の掘立柱建物である可能性が高く、間仕

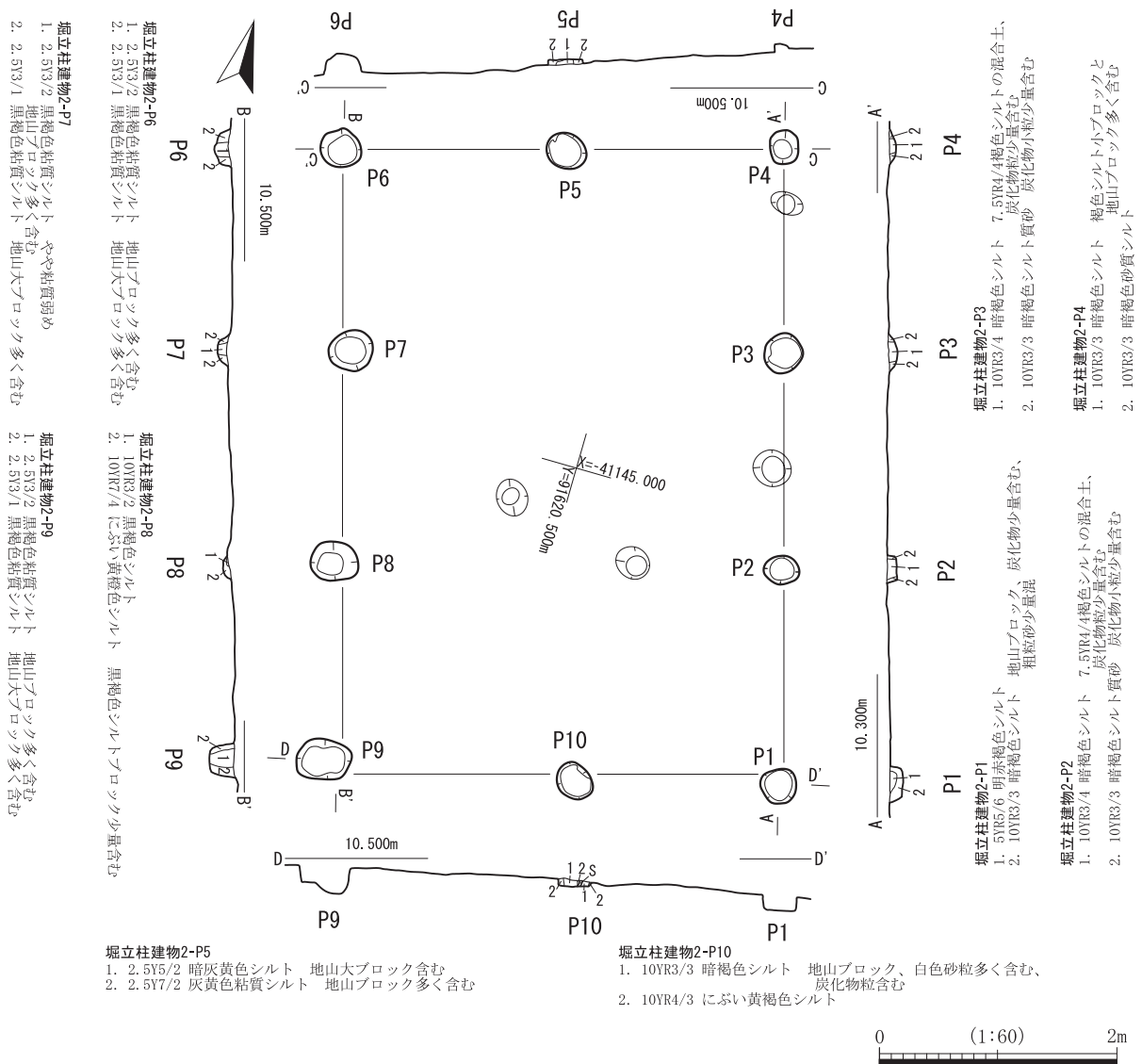
切りを持つことを最大限評価するならば、居住施設として機能したものと考えられる。また、東西には建物範囲を区画する溝がそれぞれ配されており、これらは区画の方向などからみて建物と同時代の区画であると想定できる。なお、建物自体が調査区の北端に位置しているため北側に付属する遺構が存在するかもしれない。

(宮内)

掘立柱建物 4 (第16・17図)

平場 3 の南端に位置する梁行 2 間、桁行 6 間に下屋が取り付く掘立柱建物である。検出面は南東方向に下降する緩やかな斜面地であるが、斜面下方ほど削平が著しいようで、V層やVI層が露出している。掘立柱建物の構築時には切土や盛土による造成で平場が設けられていたものと思われるが、調査時、この本来南東部に存在したであろう盛土を除去してしまった可能性も考えられる。

(宮内・福島)

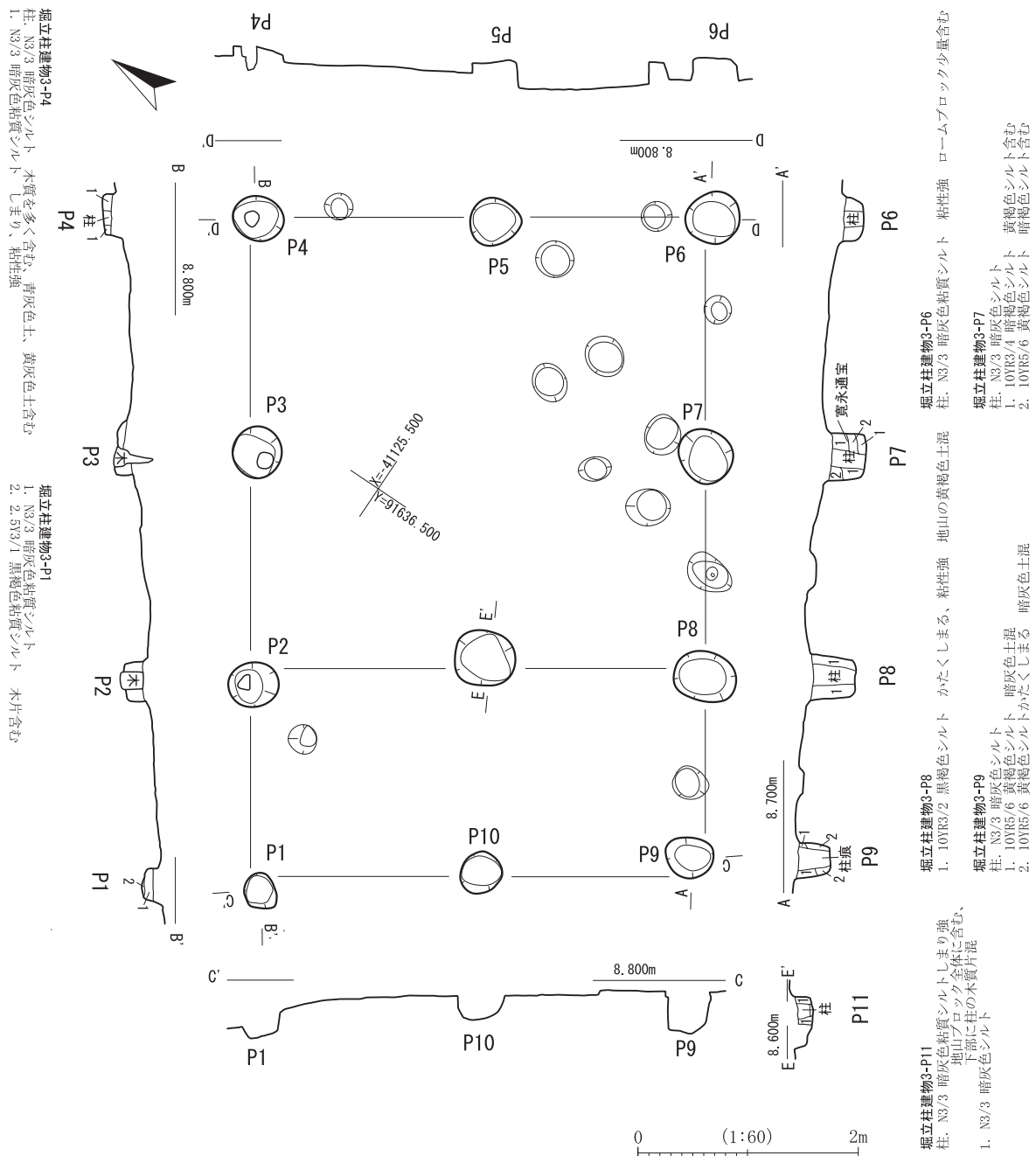


第 14 図 掘立柱建物 2

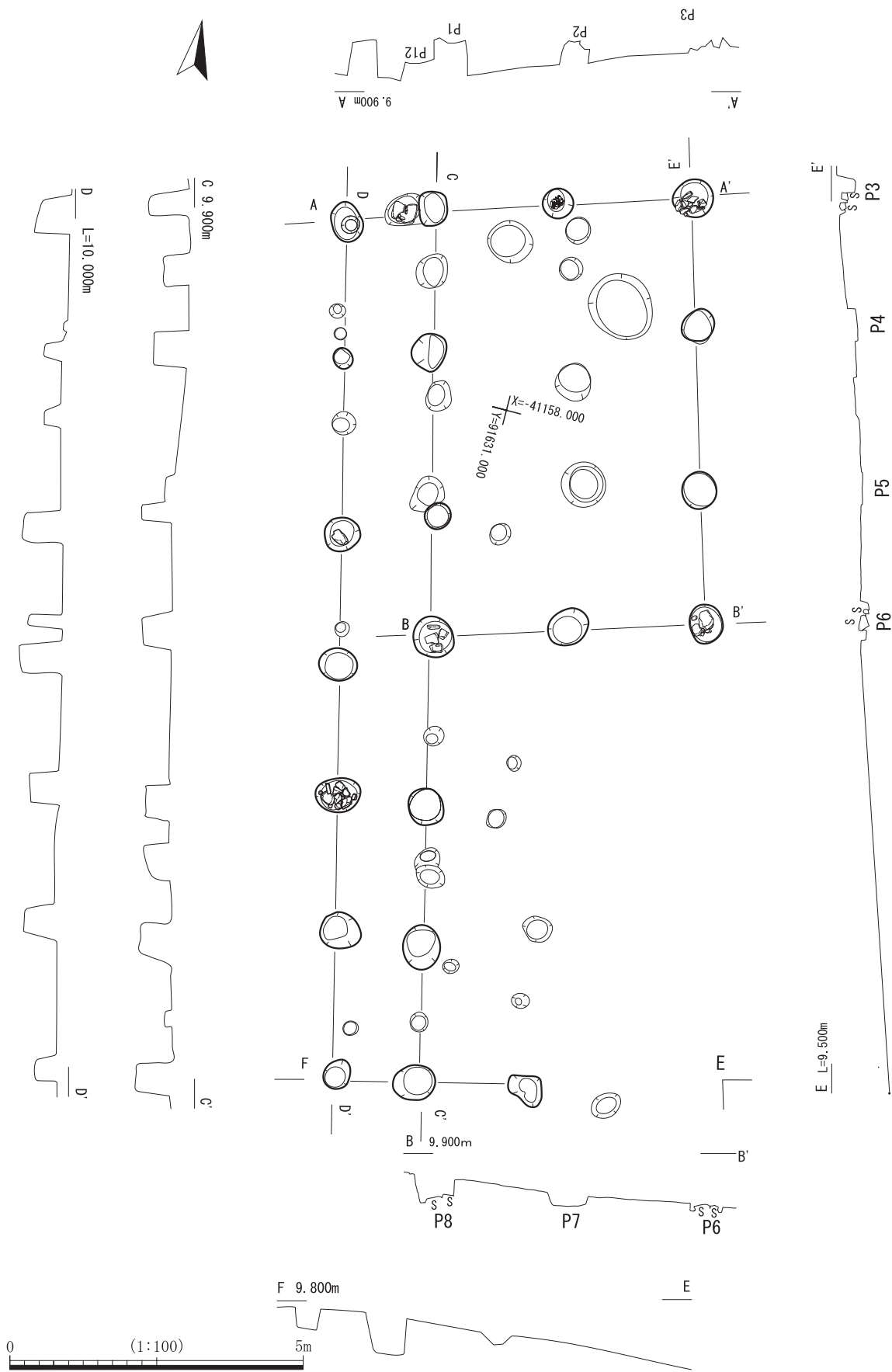
井戸 1・2 (第18図、写真図版11)

調査区中央付近で2基の井戸を検出した。いずれも近世のものであると推測される。

井戸1は掘立柱建物4の東に位置し、検出面はV層が露出した西から東へ下降する緩斜面である。平面円形で、遺構中央に向けて窄まる形態である。遺構の側壁は緩やかに立ち上がり、開口部で広がる。埋土には砂や滞水面が認められ、自然埋没する過程で流水や滞水を繰り返したものと考えられる。遺構底面では湧水が著しく、側壁に鉄分の沈着や還元を示す範囲も認められ、井戸としての機能を十分に果たしたものと推測される。井戸の斜面西上方から溝2が1条延びており、この井戸との関連性が想起される。斜面上方からこの井戸に集水した可能性が考えられる。井戸内部から遺物は出土しなかったが、周辺の遺構の配置や埋土の様子から近世の素掘り井戸の可能性が高い。

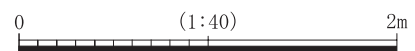
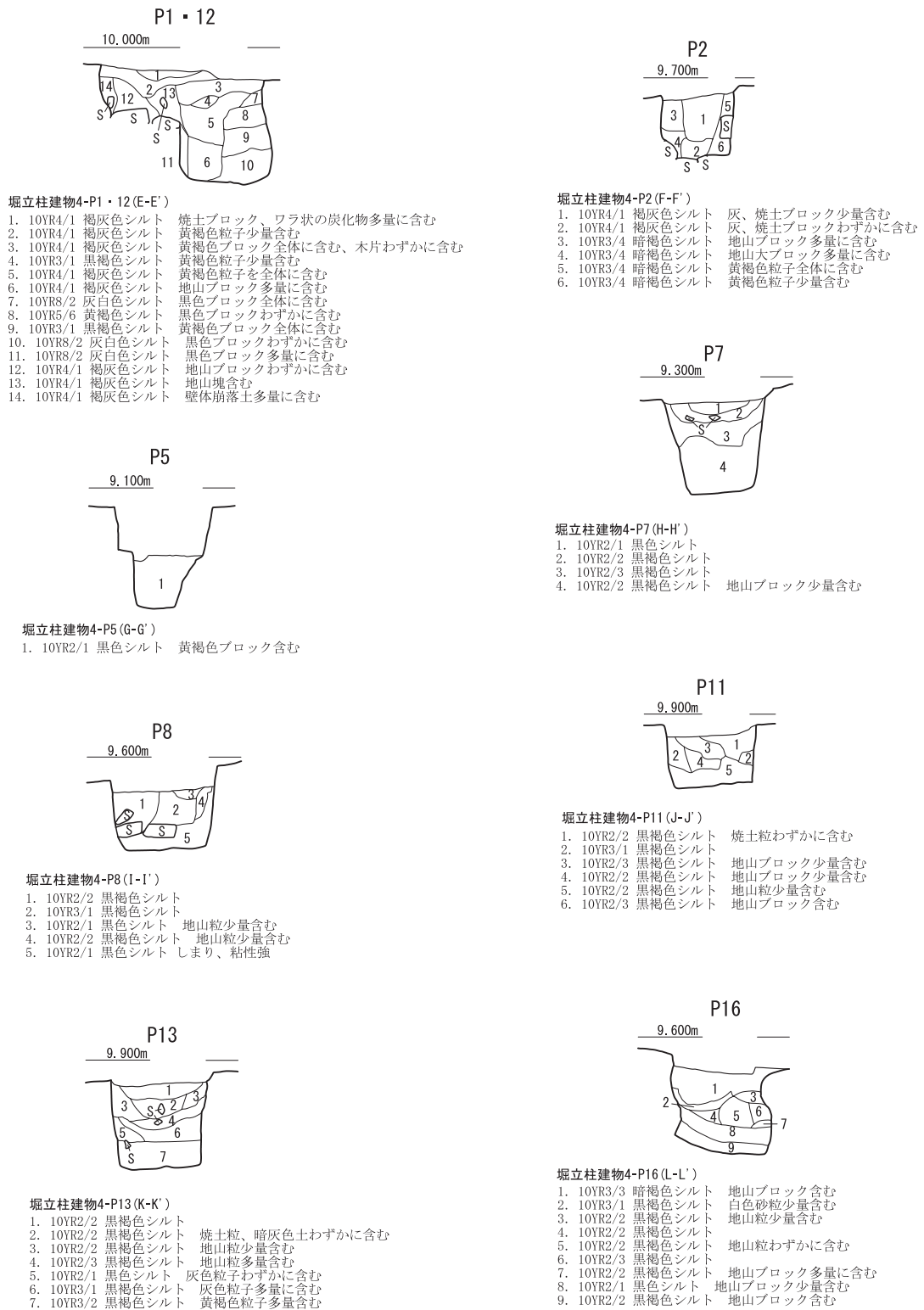


第15図 掘立柱建物3



第16図 掘立柱建物4



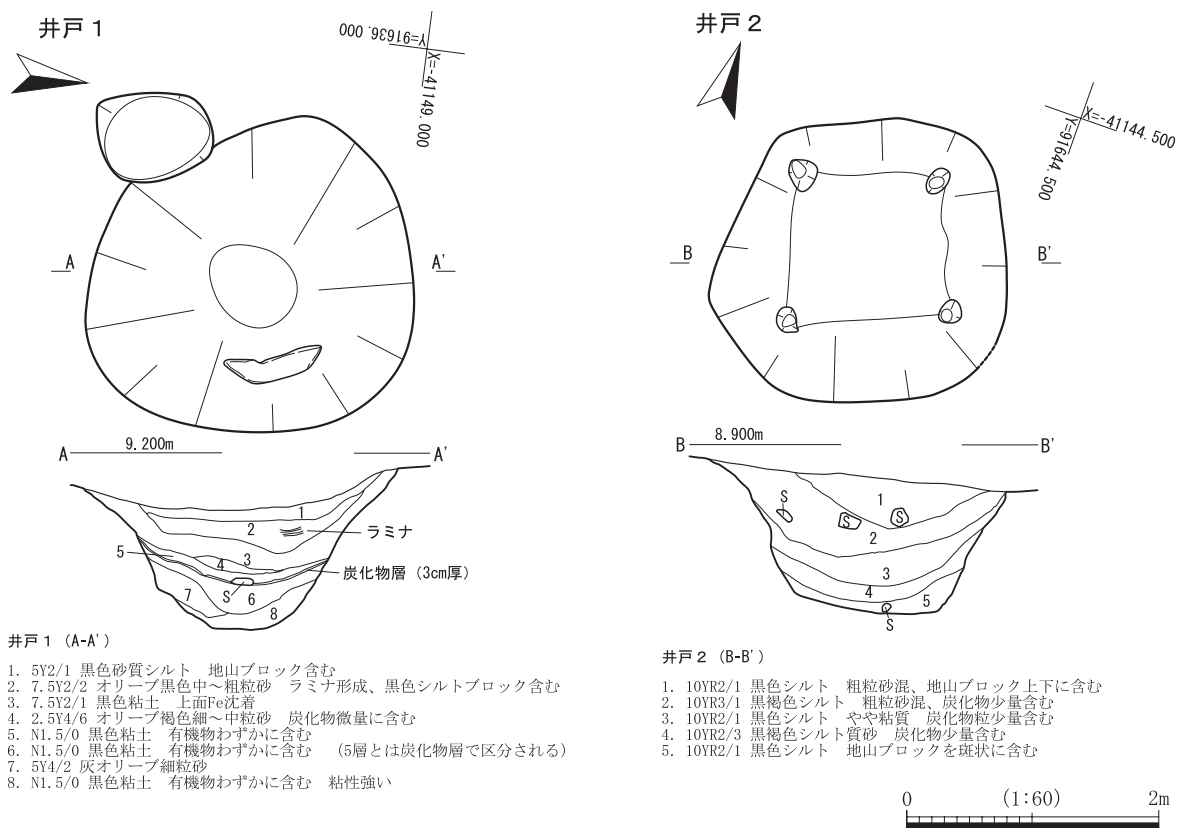


第17図 掘立柱建物4・柱穴断面

2 遺構と遺物

井戸2は平場3の中央に位置し、V層上面で略円形のプランを検出した。調査を進めると側壁に四隅の角が生じていることが判明した。この角は底面に近くなるとより明瞭で、底面は正方形を呈する平面形状となった。底面の四隅には、それぞれ小ピットが検出され、いずれも約10cmの深さを有する。小ピットは、井戸の隅柱に由来するものであると想定される。小ピット埋土には褐色のシルト質砂が堆積しており、打ち込みの柱材が欠失した後に堆積したと考えられる。このことから隅柱横棧留めの側板を持つ方形の井戸であったと考えられる。しかし、井戸の埋土には側板の痕跡や掘り方を埋めた土が確認できなかったため、井戸の機能が停止して埋没する前に井戸枠が外されたことを物語っている。埋土から遺物は出土せず、詳細な時期特定はできないが、周辺の遺構のあり方からみて近世の井戸である可能性が高い。

(福島)



第18図 井戸1・2

屋外カマド (写真図版12・13)

調査区中央より南側、平場3南端に屋外カマド群が分布する。いずれも内部の被熱が著しく、赤化・硬化している。時期を特定できるような遺物が出土していないため時代は不明であるが、類例からみて近世以降の所産であると推測される。

(福島)

## (6) 中・近世の遺物

## 陶磁器 (第19～21図、写真図版18～22)

86～88・94は中国産磁器である。86は白磁皿である。94は同安窯系青磁の碗体部片である。外面には櫛状工具で縦方向の文様、内面には劃花文が掘り込まれている。胎土は灰色を呈し、その上から全体に光沢のある透明釉が掛けられている。95・96は明代の染付である。89～92は瀬戸・美濃の灰釉皿類である。丸皿、折縁皿があり、いずれも16世紀後半の大窯4期に相当するとみられる。93は16世紀後半の志野菊皿である。全面に施釉されており、光沢を持つ乳白色を呈する。99はいわゆる青織部の向付である。精緻な胎土、濃淡のある灰釉が特徴であり、見込みには植物の絵付けがなされている。底部外面には施釉されておらず、一部欠損しているが小さな半環状の脚部が貼付されている。16世紀末～17世紀初頭の優品である。100は古瀬戸後期様式の燭台脚部である。外面には淡緑色の灰釉が掛かっており、平行する沈線が上下2条巡っている。上1条は細く、下の1条はその2倍程の太さである。97・98は渥美産陶器甕片である。97は外面に並行文の押印が認められるが、それを覆うように濃緑色の分厚い自然釉が掛かっている。甕の体部片であると考えられる。103～109は信楽産陶器片であると考えられる。いずれの陶器片も胎土が非常に精良であり、砂粒がほとんど認められない。器表面の長石表面が高温のため熔融しており、窯の中での焼成温度が高いことを示している。これら特徴的な点でその他の国産陶器片とは異なる。時期の特定は難しいが、特徴から16～17世紀頃のもの可能性が考えられる。101は瓦質焼成の播鉢である。内面には櫛描きの播り目が放射状に配されている。産地は不明であるが、一部銀化した燻しと精良な胎土が特徴的である。110～113は唐津皿である。110・111は内外面ともに施釉されており、濃緑色を呈する。17世紀頃の所産である。115・116は近世美濃碗である。内面および外面上半部は透明度の高い灰釉、外面下半は鉄釉が施釉されたいわゆる腰鍔の碗である。130は近世瀬戸播鉢である。外方に折り返して肥厚させた口縁部を有し、体部内面には放射条に櫛描きの播り目が認められる。内底面の櫛描き播り目は同心円状に施されている。17世紀末～18世紀前葉の所産であると考えられる。

本調査に先行しておこなわれた岩手県教育委員会の試掘調査では、平場3に設定されたトレンチより古瀬戸卸皿片が1点出土していることを付記しておく。この卸皿は鋭利に角張った口縁部が特徴的で、内面にはわずかながら直交方向に2条の卸し目が認められる。大半が剥落しているが、内外面ともに灰釉が施釉されていたようであり、両面とも部分的に釉が残存する。これら特徴からおおむね13世紀後半に位置付けられる古瀬戸前期様式に帰属するものである。

(福島)

## 石製品 (第21図、写真図版22)

砥石2点、石鉢2点を掲載した。砥石(131・132)は使用によって過度な擦痕と摩耗が顕著である。石鉢(133・134)は多孔質の石材を削り抜いて鉢形に成形している。133は口縁部に丸みを持ち、内面は摩耗が著しく認められるため粉碎やすりつぶし等の作業に用いられたと考えられる。134は口縁部が欠損している。いずれも近世の掘立柱建物の柱穴内で根石として再利用されたようであり、類例からみて本来は中世の遺物である可能性が考えられる。

(福島)

## 銭貨 (第22図、写真図版23)

中世から近世にかけての銭貨16点(135～150)が出土した。これらの内訳は平安通寶(135)、唐國通寶(136)、嘉祐通寶(137)、熙寧元寶(138)、至和元寶(139)、永樂通寶(140)の各1

点、無文銭（149・150）2点、寛永通寶9点（141～148）である。8点の寛永通寶は古寛永3点、文銭3点、新寛永2点である。135は平安通寶である。全国的に出土例が少なく鑄造地・初鑄年・流通圏ともに不明であるが、概ね中世末期から近世初頭の鑄造とされる。東北地方に分布が偏ることから東北地方のどこかで鑄造された可能性が指摘されている。140の永楽通寶は小さい銭径、薄い銭厚、軽量、凸部の無い背面などの特徴があり、永楽通寶が中国大陸でほとんど流通せず模鑄銭も造られなかったことから、日本列島で鑄造された模鑄銭であると考えられる。141～148はいずれも寛永通寶である。うち144～146は背面に「文」字があるいわゆる文銭である。144はいわゆる輪銭と呼ばれる無文の粗悪銭であるとみられ、中世末期から近世初頭のものであると考えられる。

出土した銭貨の多くが寛永通寶であり、遺構内から出土したものに限っても全体の半数を占める。これは中世の遺構より近世の遺構が多く検出されたことと合致する出土内容である。

（船渡）

### （7）時代不明の土坑

#### 土坑3～13

時代不明の土坑を11基調査したが、遺構の特徴に時代を推測する材料が見当たらず、いずれも時代が特定できるような遺物が出土していない。

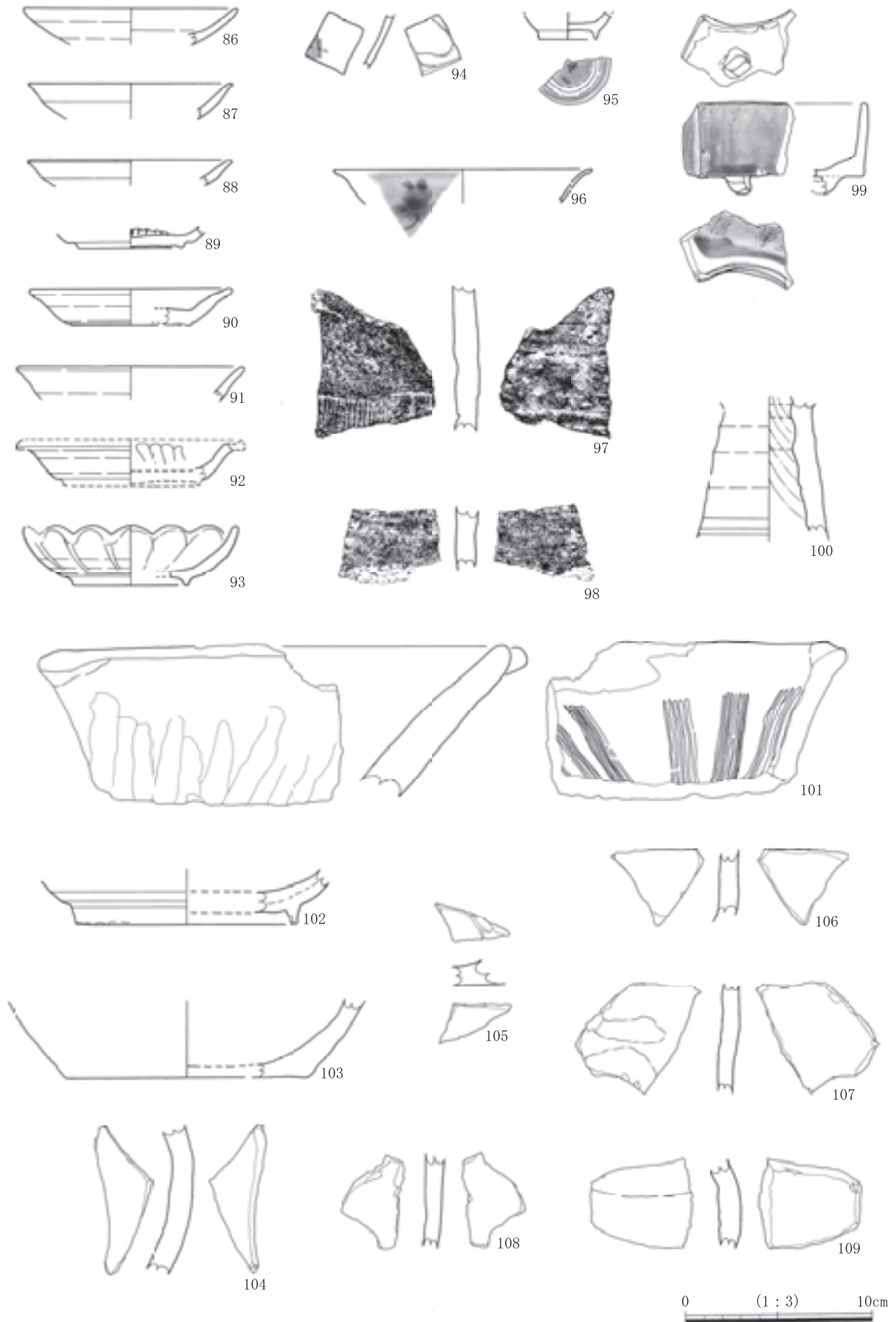
## 3 小 結

今回の田鎖遺跡の調査成果を簡略にまとめると、東から西に向けて下る緩やかな斜面地の調査区内で縄文時代・古代・中世・近世の遺構を検出した。縄文時代の遺構は陥し穴・貯蔵穴などを検出したが、これらの明確な時期は不明である。ただし、調査区内の西側低地部分において中期中葉～後葉の土器が多く出土したことを考えれば、この時期の遺構である可能性が想定される。また、磨石を集め置いたような遺構も検出したが、その意図を推し量ることは難しい。古代以降は、掘立柱建物を中心とする遺構を多く検出した。1棟は2×2間の総柱建物であり、古代であると推測した。古代の出土遺物全体量は少なく、近くに竪穴住居もみられない。しかし、田鎖館跡の調査区内では古代の集落がみられるため、竪穴住居域から少し離れてこの建物が存在したようである。倉庫など居住とは異なる用途で建てられたものと考えられる。中世は確実な遺構が少ないながらも掘立柱建物を1棟検出した。中世であると確実視できるのは、この1棟のみで、北西端にみられる2間×3間の掘立柱建物2である。柱穴から出土した銭貨（平安通寶）より16世紀後半から17世紀初頭のものであると想定される。また、中世の出土遺物は陶磁器等が出土している。古いものは12世紀の同安窯系青磁碗1点・渥美産甕片2点が出土している。これらは隣接する田鎖車堂前遺跡の居館との関連を想起させる遺物である。それ以降では、古瀬戸後期の燭台や、織部向付、志野菊皿、瀬戸・美濃大窯期の皿類、中国大陸明代の染付等、中世後半を中心とする遺物が挙げられる。これら15・16世紀の中世陶磁器が存在することは背面に隣接する田鎖館跡との関係性を考える必要がある。近世は掘立柱建物、井戸、屋外カマドなど近世住家に関する遺構がみられ、調査区内には17世紀頃の屋敷が構えられていたことを示している。近世の建物であると確実視できるのは掘立柱建物3・4の2棟で、それぞれ離れているため別住家の主屋に該当すると推察される。中世末から近世・近代を通じて現代へと連なる屋敷であることが想定される。

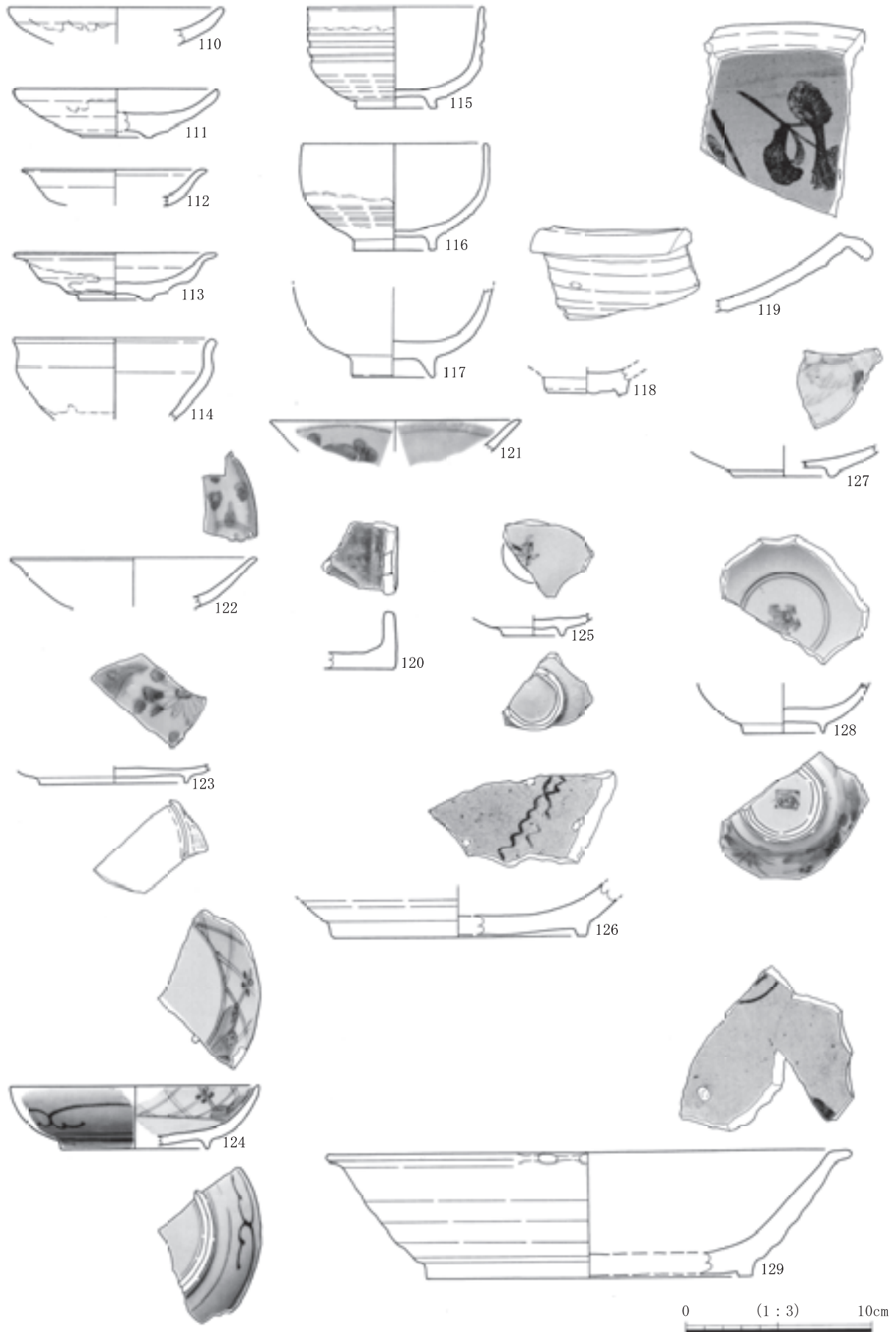
## 引用・参考文献

- 大川清ほか 1996 『日本土器事典』
- 永峰光一ほか 1981 『縄文土器大成 2 一中期』
- 小林達雄 2008 『総覧 縄文土器』
- 藤澤良祐 2001 『瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通』  
『戦国・職豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジア的視点から—資料集』  
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 中世土器研究会編 1998 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧』1996年版
- 高桑 登 2001 「国内出土の平安通寶集成」『出土銭貨』第15号 出土銭貨研究会

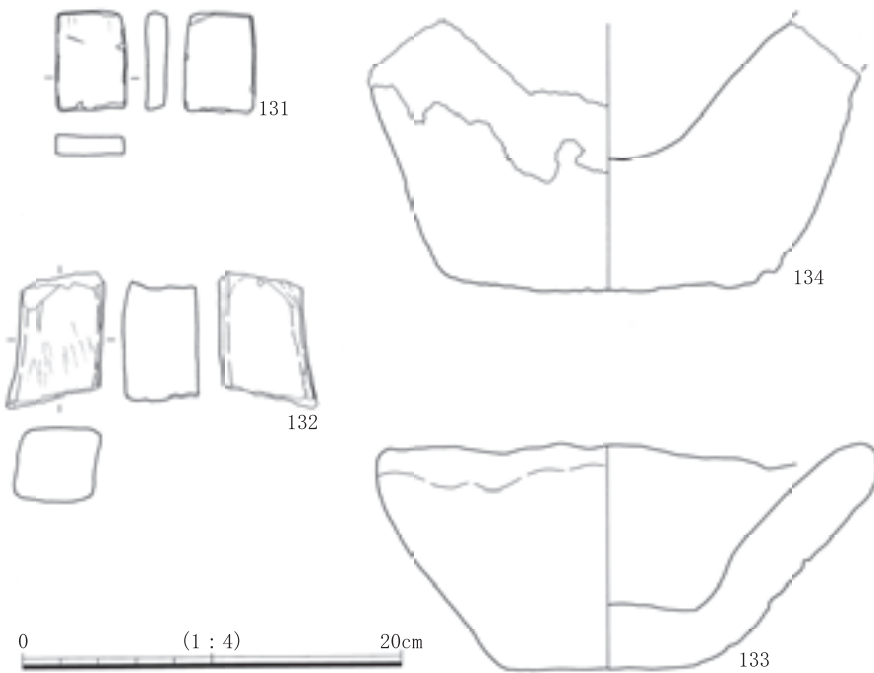
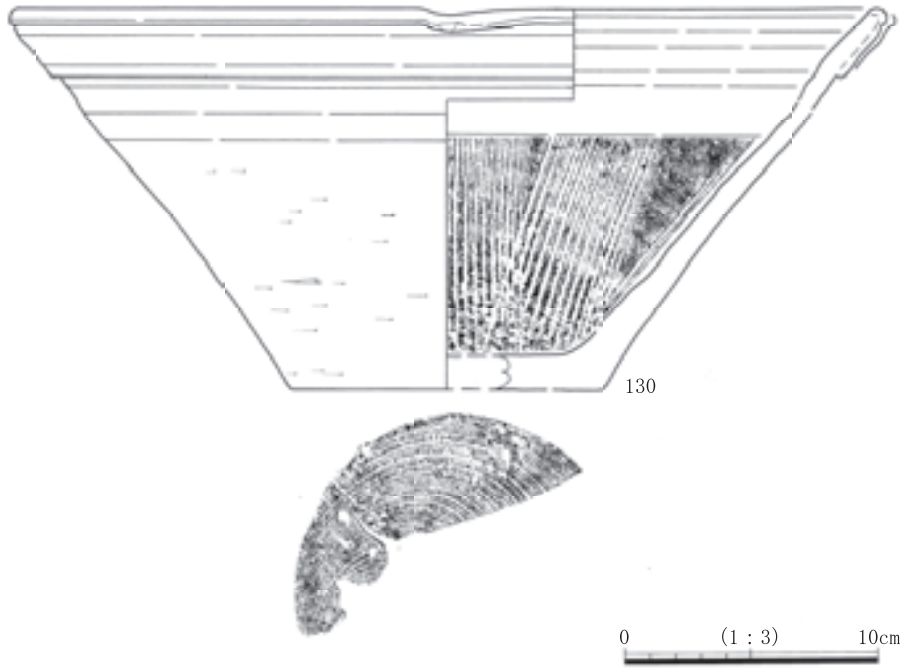




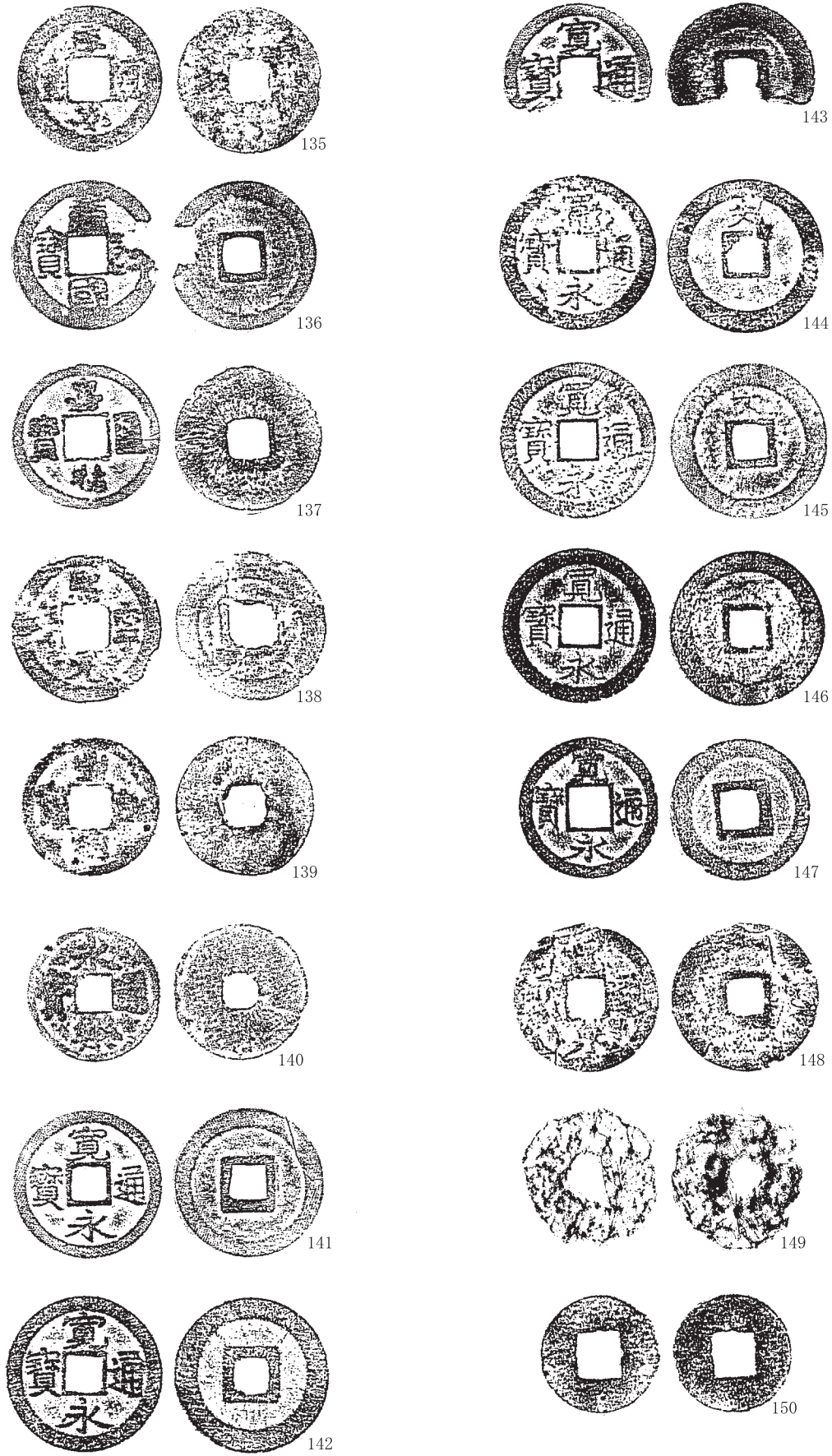
第19図 中世～近世陶磁器 (86～109)



第20図 近世陶磁器 (110~129)



第21図 近世陶磁器 (130) ・ 石製品 (131~134)



原寸

第22図 銭貨 (135~150)

第6表 田鎖遺跡掲載遺物一覧(陶磁器)

( ) 復元値、[ ] 残存値、その他最大値

掲載No.	種別	器種	出土遺構・位置・層位	特徴	寸法 (cm)			備考
					口径	器高	底径	
86	白磁	皿	包含層(平場3)	透明釉	(11.4)	[2.0]	-	中国産
87	白磁	皿	包含層(平場3)	透明釉	(11.0)	[1.95]	-	中国産
88	白磁	皿	攪乱(1Y)	透明釉	(11.0)	[1.35]	-	中国産
89	陶器	皿	包含層(平場3)	灰釉、折縁?	-	[1.15]	(5.7)	瀬戸・美濃大窯期
90	陶器	皿	検出面(平場3)	灰釉	(10.8)	2.0	(6.4)	瀬戸・美濃大窯期
91	陶器	皿	検出面(平場3)	灰釉	(12.0)	[1.8]	-	瀬戸・美濃大窯期
92	陶器	皿	SK18埋土	灰釉、折縁	-	[2.0]	-	瀬戸・美濃大窯期
93	陶器	皿	表土(平場3)	乳白色長石釉	(11.3)	3.2	(6.2)	志野焼菊皿
94	青磁	椀	検出面(平場3)	外面(櫛描文)、内面劃花文	-	[2.9]	-	同安窯系
95	染付	椀	攪乱(1Y)	コバルト圏線、透明釉	-	[1.55]	(3.1)	明代?
96	染付	碗	包含層(平場2)	コバルト植物文、透明釉	(13.9)	[1.75]	-	明代?
97	陶器	甕	遺構外(北側側溝)	自然釉、外面押印	-	-	-	渥美産
98	陶器	甕	近世柱穴(P39)埋土	自然釉	-	-	-	渥美産
99	陶器	向付	包含層(平場3)	青色、緑色の灰釉	-	[4.9]	-	織部焼
100	陶器	燭台	包含層(平場3)	灰釉、平行沈線	-	[7.6]	-	古瀬戸(中期様式)
101	瓦質土器	播鉢	検出面	内外面とも黒色の燻し、内面櫛描の播目、片口	-	[8.75]	-	産地不明
102	陶器	鉢	近世柱穴(P12)埋土	灰釉	-	[3.0]	(11.8)	瀬戸・美濃連房期
103	陶器	壺	SP104埋土	細かな胎土、自然釉	-	[4.2]	(13.0)	信楽焼(近世)
104	陶器	甕	検出面(平場3)	細かな胎土、自然釉	-	-	-	信楽焼(近世)
105	陶器	甕	P22	細かな胎土、自然釉	-	-	-	信楽焼(近世)
106	陶器	甕	P22	細かな胎土、自然釉	-	-	-	信楽焼(近世)
107	陶器	甕	SD05埋土	細かな胎土、自然釉	-	-	-	信楽焼(近世)
108	陶器	甕	検出面(平場3)	細かな胎土、自然釉	-	-	-	信楽焼(近世)
109	陶器	壺	攪乱(1Y)	細かな胎土、星状降灰	-	-	-	信楽焼(近世)
110	陶器	皿	SD04埋土	濃緑色釉	(11.6)	[2.0]	-	唐津焼
111	陶器	皿	SD03検出面	濃緑色釉	(10.8)	2.6	(3.8)	唐津焼
112	陶器	皿	攪乱(平場3)	暗褐色釉	(9.8)	[1.9]	-	唐津焼
113	陶器	皿	P11	緑灰色釉	(10.6)	2.5	4.0	唐津焼
114	陶器	碗	包含層(平場3)	鉄釉	(10.6)	[4.4]	-	美濃?天目茶碗
115	陶器	碗	SD13埋土	上半灰釉、腰錆	(9.3)	5.5	(4.0)	近世瀬戸



第7表 田鎖遺跡掲載遺物一覧（陶磁器） ( )復元値、[ ]残存値、その他最大値

掲載No.	種別	器種	出土遺構・位置・層位	特徴	寸法 (cm)			備考
					口径	器高	底径	
116	陶器	碗	SD13埋土	上半灰釉、腰錆	(9.8)	5.8	(4.4)	近世瀬戸
117	陶器	碗	北側溝 1	灰釉	-	[4.9]	(4.2)	近世瀬戸？
118	陶器	碗	遺構外 (平場 2)	鉄釉、削出高台	-	[1.5]	4.1	美濃？天目茶碗
119	陶器	鉢	遺構外 (平場 3)	内面鉄絵	-	[4.4]	-	近世美濃
120	陶器	皿	攪乱 (平場 3)	灰釉	-	3.2	-	近世織部角皿か向付？
121	染付	碗	遺構外 (平場 2)	内外面染付	(13.5)	[1.7]	-	肥前産
122	染付	碗	遺構外 (平場 3)	内面染付	(13.0)	[2.8]	-	肥前産
123	染付	碗	遺構外 (平場 3)	内外面染付	-	[1.0]	(8.0)	肥前産
124	染付	皿	遺構外 (平場 3)	内外面染付	(13.3)	3.4	(7.9)	肥前産
125	染付	碗	SD04埋土	内面染付	-	[1.2]	(3.3)	肥前産
126	陶器	鉢	遺構外 (平場 3)	内面鉄絵	-	[2.8]	(13.5)	近世美濃
127	染付	碗	遺構外 (平場 1)	内面染付	-	[1.6]	[5.4]	肥前産
128	染付	碗	遺構外 (平場 3)	草花文	-	[2.8]	(4.2)	肥前産
129	陶器	鉢	遺構外 (平場 3)	内面鉄絵	(28.4)	6.8	[17.4]	近世美濃
130	陶器	播鉢	SD13埋土	内面柳描による播目	(34.0)	12.2	(15.1)	近世美濃

第8表 田鎖遺跡掲載遺物一覧（石製品）

掲載No.	種別	器種	出土遺構・位置・層位	備考
131	石製品	砥石	検出面（平場3）	研磨痕
132	石製品	砥石	検出面（平場3）	研磨痕
133	石製品	石鉢	P17根石	内面擦痕、摩滅
134	石製品	石鉢	SB09P 6根石	内面擦痕、摩滅

第9表 田鎖遺跡掲載遺物一覧（銭貨）

掲載No.	種別	器種	出土遺構・位置・層位	備考
135	銭貨	平安通寶	掘立柱建物2-P7底面	16世紀？
136	銭貨	唐國通寶	出土地点、出土層位不明	南唐959年初鑄
137	銭貨	嘉祐通寶	平場3・表土直下	北宋1056年初鑄
138	銭貨	熙寧元寶	平場2	北宋1068年初鑄
139	銭貨	至和通寶	SP312埋土	北宋1054年初鑄
140	銭貨	永樂通寶	D06埋土上層	模鑄？明1408年初鑄
141	銭貨	寛永通寶	SP196埋土	古寛永（1636～1659年）
142	銭貨	寛永通寶	SB05・P7埋土	古寛永（1636～1659年）
143	銭貨	寛永通寶	検出面（平場3）	古寛永（1636～1659年）
144	銭貨	寛永通寶	検出面（平場3）	新寛永（1697～1747年）
145	銭貨	寛永通寶	検出面（平場3）	新寛永（1697～1747年）
146	銭貨	寛永通寶	北側側溝	新寛永（1697～1747年）
147	銭貨	寛永通寶	SB05・P7埋土	新寛永（1697～1747年）
148	銭貨	寛永通寶	SD04埋土	新寛永（1697～1747年）
149	銭貨	無文	検出面（平場3）	寛永鉄銭？
150	銭貨	無文	SD03検出面	私鑄銭？